

松森城跡他

発掘調査報告書

松森城跡第1.2次・南小泉遺跡第48~51次
富沢遺跡第137.139次・田母神屋敷跡
袋前遺跡第3次・養種園遺跡第6次
杉土手第4次調査

2007年3月

仙台市教育委員会

松森城跡他

発掘調査報告書

松森城跡第1.2次・南小泉遺跡第48~51次
富沢遺跡第137.139次・田母神屋敷跡
袋前遺跡第3次・養種園遺跡第6次
杉土手第4次調査

2007年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守ってきた文化遺産（文化財）の存在が挙げられます。仙台市内には現在約800カ所もの遺跡が確認されております。これらの文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと継承いくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成17年度に発掘調査を実施した松森城跡、南小泉遺跡の他、平成18年度に発掘調査を実施した南小泉遺跡、宮沢遺跡、田母神屋敷跡、袋前遺跡、養種園遺跡、杉土手の調査結果を収録しております。

松森城跡および田母神屋敷跡は今回初めて実質的な調査が行われ、遺跡の実態を知る上で貴重な資料となる遺構・遺物を確認し、また、その他の遺跡の調査についても貴重な資料を得ることができました。

先人の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未來へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大変な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成19年3月

仙台市教育委員会
教育長 奥山 恵美子

例　　言

1 本書は、仙台市教育委員会が実施した民間開発事業に伴う松森城跡第1・2次、南小泉遺跡第50次、富沢遺跡第139次、杉土手第4次と、個人住宅建設に伴う南小泉遺跡第48・49・51次、富沢遺跡第137次、袋前遺跡第3次、養種園遺跡第6次及び仙台市関連施設建設に伴う田母神屋敷跡の発掘調査報告書である。

民間開発事業に係わる発掘調査は事業者の負担において実施し、個人住宅建設及び仙台市関連施設建設に係わる調査は公費で実施した。

2 本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議をもとに、工藤哲司・今野秀治・早川潤一・藤田雄介が分担して行った。担当は次のとおりである。

工藤：松森城跡第1・2次、南小泉遺跡第48・49次、富沢遺跡第139次、杉土手第4次

今野：南小泉遺跡第51次、袋前遺跡第3次、養種園遺跡第6次

早川：富沢遺跡第137次、田母神屋敷跡

藤田：南小泉遺跡第50次、

3 本書に掲載した陶器・磁器に関する産地及び年代については、仙台市博物館の佐藤洋氏に鑑定をお願いした。

4 本書に係わる遺物・写真・実測図面等の資料については、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976)に準拠している。

2 断面図・平面図の標高値は、海拔高度を示している。

3 遺構は種別毎に次の略号を使用した。

S B : 挖立柱建物跡 S D : 溝跡 S E : 井戸跡 S I : 穴穴住居跡・竪穴遺構

S K : 土坑 P : ピット S X : その他の遺構

4 遺物の登録は、以下の分類と略号を使用している。

A : 繩文土器 B : 弥生土器 C : 土師器（非口クロ）D : 土師器（口クロ）

E : 須恵器 F : 丸瓦 G : 平瓦 I : 陶器 J : 磁器

K : 石器・石製品 L : 木製品・杭材 N : 金属製品 P : 上製品

5 穴穴住居跡等における、焼け面範囲は、網かけにより表現した。

6 挖立柱建物跡の柱穴およびピット内の網は柱痕跡の位置と範囲を示している。

7 土師器実測図における網は、黒色処理されていることを示している。

8 遺物観察表の()内の法量は残存値を示している。

9 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田：1980)は、「十和田a (To-a)」と考えられ、十和田aの降下年代は現在、西暦915年初夏とされている。(町田：1981・1996)

10 本書における「擬似畦畔B」という用語は、水田畦畔直下の自然堆積層に認められる畦畔状の高まりをさす(斎野ほか1987:「富沢・富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集)が、本書では自然堆積層の高まりだけでなく、畦畔直下の下層の水田耕作上層に認められる畦畔状の高まりにもこの用語を使用した。

目 次

序文

例言・凡例

目次

I 松森城跡第1次発掘調査報告書

1 調査要項	1
2 調査に至る経過と調査方法	1
3 遺跡の位置と環境	1
4 基本層序	3
5 発見遺構と出土遺物	4
1) 掘立柱建物跡	4
2) 溝跡	7
6 まとめ	11

II 松森城跡第2次発掘調査報告書

1 調査要項	19
2 調査に至る経過と調査方法	19
3 遺跡の位置と環境	19
4 基本層序	19
5 発見遺構と出土遺物	19
1) 溝跡	20
2) 上坑	20
3) ピット群	22
4) 沢状の落込み	25
6 まとめ	25

III 南小泉遺跡第48次発掘調査報告書

1 調査要項	33
2 調査に至る経過と調査方法	33
3 遺跡の位置と環境	34
4 基本層序	35
5 発見遺構と出土遺物	36
1) II層検出遺構	36
2) III層検出遺構	37
6 まとめ	39

IV 南小泉遺跡第49次発掘調査報告書

1 調査要項	45
2 調査に至る経過と調査方法	45

3	遺跡の位置と環境	45
4	基本層序	45
5	発見遺構と出土遺物	46
1)	溝跡	46
2)	土坑	46
6	まとめ	47

V 南小泉遺跡第50次発掘調査報告書

1	調査要項	51
2	調査に至る経過と調査方法	51
3	遺跡の位置と環境	51
4	基本層序	51
5	発見遺構と出土遺物	52
1)	溝跡	52
2)	出土遺物	54
6	まとめ	55

VI 南小泉遺跡第51次発掘調査報告書

1	調査要項	59
2	調査に至る経過と調査方法	59
3	遺跡の位置と環境	59
4	基本層序	59
5	発見遺構と出土遺物	60
1)	柱列	60
2)	小溝状遺構群（SD 1-5）	60
3)	土坑	61
4)	ピット	61
6	まとめ	61

VII 富沢遺跡第137次発掘調査報告書

1	調査要項	65
2	調査に至る経過と調査方法	65
3	遺跡の位置と環境	66
4	基本層序	66
5	発見遺構と出土遺物	67
1)	水田層	68
2)	V字水田畦跡	69
6	まとめ	69

VIII 富沢遺跡第139次発掘調査報告書

1	調査要項	73
2	調査に至る経過と調査方法	73
3	遺跡の位置と環境	73
4	基本層序	74

5 発見遺構と出土遺物	75
1) II層出土遺物	75
2) III層検出の遺構	75
3) IIIb層：耕作土層	77
4) IV層検出遺構	77
6 まとめ	78

IX 田母神屋敷跡発掘調査報告書

1 調査要項	89
2 調査に至る経過と調査方法	89
3 遺跡の位置と環境	89
4 基本層序	92
5 発見遺構と出土遺物	92
1) 溝跡	92
2) 十坑	92
6 まとめ	93

X 袋前遺跡第3次発掘調査報告書

1 調査要項	99
2 調査に至る経過と調査方法	100
3 遺跡の位置と環境	100
4 基本層序	100
5 発見遺構と出土遺物	100
1) 小溝状遺構群	101
2) 性格不明遺構	102
6 まとめ	102

XI 養種園遺跡第6次発掘調査報告書

1 調査要項	105
2 調査に至る経過と調査方法	105
3 遺跡の位置と環境	105
4 基本層序	106
5 発見遺構と出土遺物	106
溝跡	106
6 まとめ	107

XII 杉士手第4次発掘調査報告書

1 調査要項	111
2 調査に至る経過と調査方法	111

3	遺跡の位置と環境	111
4	基本層序	112
5	発見遺構と出土遺物	113
1)	平面調査の検出状況	113
2)	断面調査の状況	114
6	まとめ	115

I 松森城跡第1次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	松森城跡（宮城県遺跡番号19020）
調査地点	仙台市泉区松森字内町20-2、20の一部
調査期間	平成18年2月27日～3月10日
調査対象面積	154m ²
調査面積	94m ²
調査原因	長屋住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 三塚博之・浅野克樹・赤岡光騎

2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成16年6月10日付けで、地権者の斎藤幸雄氏より、表層土壌改良の基礎工法伴う長屋住宅の建築に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成17年12月15～16日に実施した。42m²の範囲で調査を実施した結果、多数の柱穴などの遺構や上部器などの遺物が発見されたので本調査が必要と判断した。本調査は、地権者と協議のうえ、厳冬季を避けて2月27日から3月10日に行った。

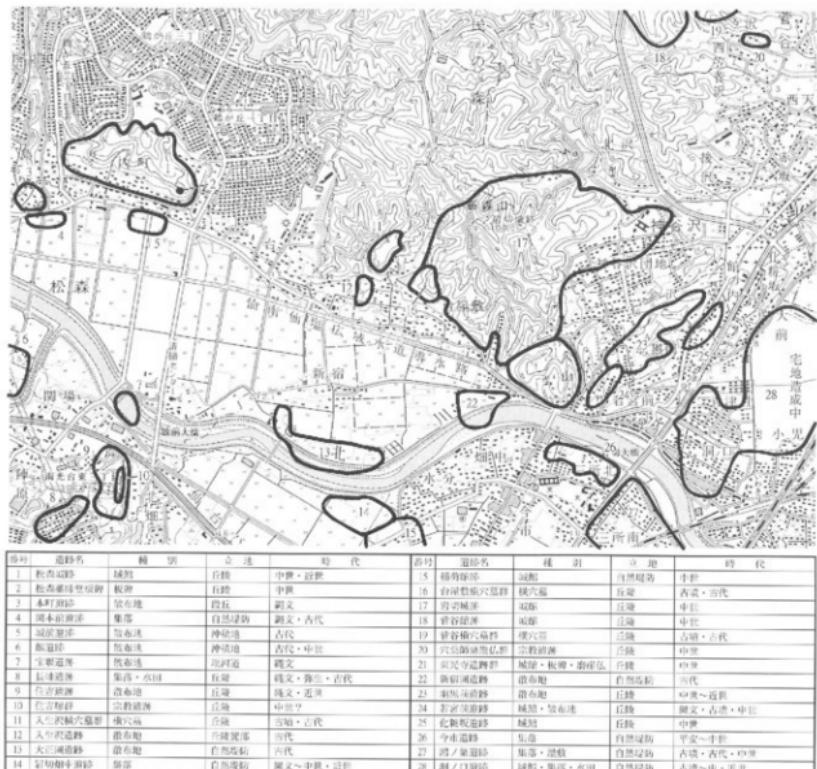
3 遺跡の位置と環境

当該地は、仙台市の北東部にあたり、JR岩切駅の北西3.5km付近に位置する。仙台平野の北部を画して東西に延びる富谷丘陵の南側の縁辺部にあたる。松森城跡は、標高20m前後の麓部から標高85m前後の丘陵頂部に渡り、東西700m・南北350mの範囲が遺跡に登録されている。遺跡の南面は、遺跡から約600m付近を七北田川が東流し、その間は標高15m前後で、水田となっている沖積地が広がる。遺跡の北側は、標高60～95mの丘陵が続いているが、広範囲に住宅団地として開発されている。

富谷丘陵の南辺と七北田川に沿った地域には遺跡が数多く認められる。绳文時代には木町遺跡や若宮前遺跡・宝坂遺跡で遺物が採集されているが遺跡の実態は不明である。弥生時代には長袖遺跡と岩切畠中遺跡で土器片が出土している。古墳時代中期になると鴻ノ巣遺跡に堀と柵列に囲まれた集落が形成され、柵内から多数の整穴住居跡が検出されている。以後集落やこれに関係する祭祀遺構、横穴墓などが古代にかけて連続的に営まれている。

古代から中世に移行するころ、富谷丘陵の東端に陸奥国留守職の伊沢家影の居城である岩切城や中世寺院の東光寺が築かれる。周辺には、稲荷館跡・洞ノ口遺跡・菅谷館跡・若宮前遺跡・化粧坂遺跡などの城館関係遺跡や、東光寺の崩崖仏群・板碑群・穴薬師磨崖仏群などの宗教遺跡がある。また、今市遺跡や鴻ノ巣遺跡のあたりの七北田川のそばには「冠屋市場」や「河原宿五日市場」と呼ばれる市があったといわれ、中世においてこの地域は非常に栄えていたことがうかがわれる。

松森城跡は、泉区七北田から宮城野区岩切へ向う街道沿いにあり、旧黒川郡と宮城郡の境界付近に位置する。山城形式の城館で、大手は城の南面の中央からやや西に寄ったところにある現在の登り口がこれに当ると考えられている。城は大手口を境に東西に分かれ、東側が本丸、西側が二の丸と考えられる。東側の本丸は標高約85mの丘陵



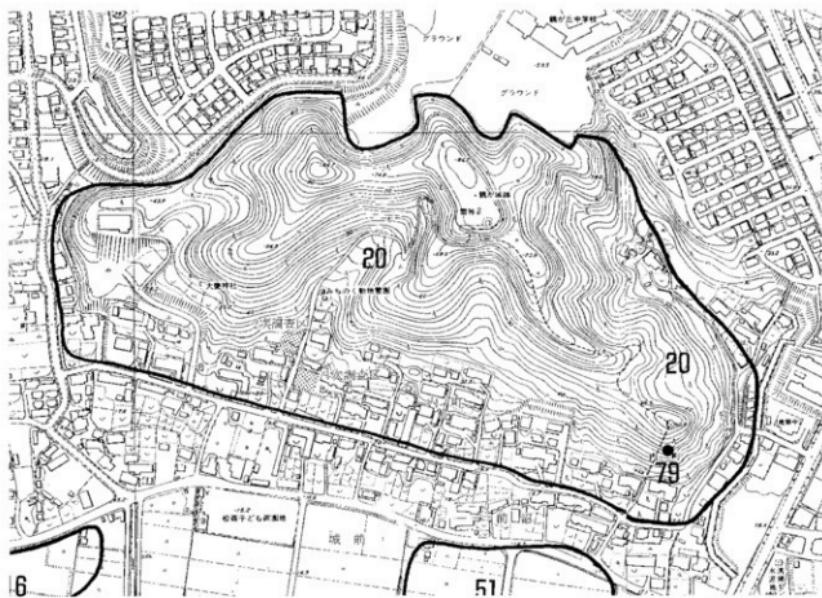
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

頂部に大きな平場が造成され、ここからさらに四方に曲輪がのび、西に延びる曲輪は二の丸に続いている。

城の南側の丘陵部分は、標高30mから15mくらいまでが150mの幅で緩やかに傾斜している。この傾斜面には中央部と南端部に沿って、中世の街並みを反映するかのように東西に延びる2条の道路がある。中央の道路より丘陵側は「内町」、東西の道路の間が「前沼」、南側の道路の外側は「城前」という地名が残っている。内町と前沼地区には、2条の東西道路を機軸として計画的な里敷割が行われ、城下町の集落が形成されていたことが、現在の地割りからも伺われる。

なお、「古城書上」によれば、本丸の大きさ東西四四間・南北一六間、二の丸の大きさ東西一六間・南北一六間と記載されている。また、城の南側には幅一五間、長さ一四〇間の堀が存在したことと記されている。

松森城は、戦国時代には仙台市の中央部から北部を支配した国分氏の所領に当たり、千代城・小泉城・南目館などとともにその城の一つとして成立した。『古城書上』には、「此城主国分彦九郎盛重小泉村より取移、天正年中迄居住」とある。重盛は伊達政宗の叔父で、国分氏の養子として入っていたが、家臣團の統率に失敗すると、天正15年（1587）に米沢に呼び戻され、国分領は伊達家の直轄領となり、国分氏は実質的に滅亡した。天正16年に伊達政



第2図 調査地点の位置

宗が大崎氏を攻めた際には、伊達城の北辺の要衝として重要な役割を果たし、伊達家重臣の石母田氏や栗野氏が城に入っている（伊達政宗書状）。その後、天正18～19年の豊臣秀吉による奥州仕置により城となるが、江戸時代には、「御野始」とよばれる正月行事として藩主が行う狩の陣場として利用されている。

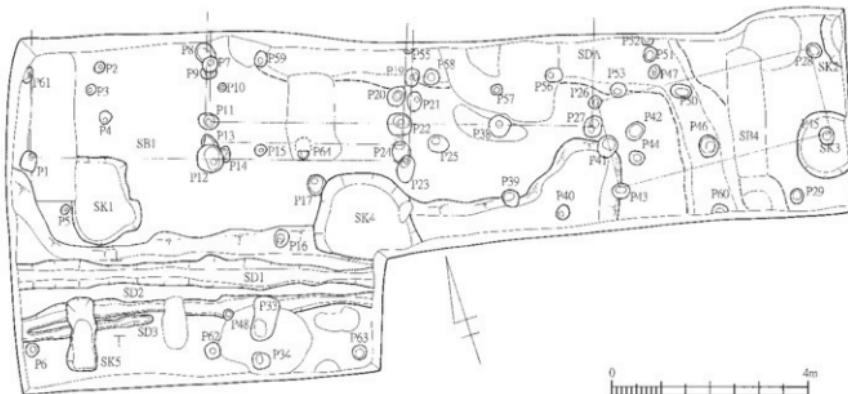
4 基本層序

調査区は南部が一段低くなっているため、南部と北部では基本層に多少の違いが認められるが、調査区北壁を基準にすると大別4層、細別5層に分けられた。

- I a層：10YR 4/4褐色シルト。層厚は20cm。風化礫を多く含む。近代の畑耕作上層上部。
- I b層：10YR 4/4にぶい暗褐色シルト。層厚は10cm。風化礫粒を多く含む。炭化物を含む。畑耕作上層下部。
調査区西壁面では、地形が低くなった部分のI b層下部にI b 2～I b 6層とした盛土整地層ないし耕作土層と考えられる層の分布が観察される。
- II 層：10YR 3/3暗褐色シルト質粘土。層厚は5～30cm。風化礫粒を多く含む。東側の一部に黒褐色上のブロックを含む。
- III 層：10YR 2/1 黒色シルト質粘土。層厚は70cm以上。径1～5cmの風化礫を多量に含む。SDAとした浅い溝



第3図 調査区配置図



第4図 遺構配置図

状の落ち込み部の堆積土。土師器出土。

IV 層 : 10YR 5/8 黄褐色粘土質シルト。層厚は60~70cm。大小の風化礫を多量に含む。

5 発見遺構と出土遺物

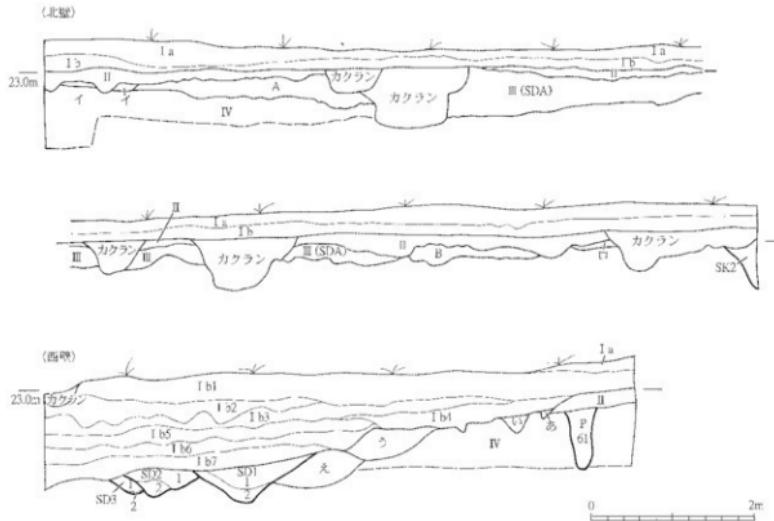
IV層上面で遺構検出作業を行った結果、掘立柱建物跡4棟・溝跡3条・土坑5基・ピット55基が検出された。

1) 掘立柱建物跡

S B 1 掘立柱建物跡 調査区北西部の北壁際で検出され、北側は調査区の外にのびる。S B 2 掘立柱建物跡を切る。S B 3 掘立柱建物跡と平面的には重複関係にあるが、新旧は不明である。堆積土の上面はII層が覆っている。検出部分の遺物の規模は、東西が南辺で2間768cm、南北が東辺で1間約170cm・西辺で1間168cmである。柱間寸法は南辺東西列が東から393cmと375cmである。南北列の方向は、東辺でN-19°-Eである。検出された6個の柱穴は、直徑54cmから32cmの円形ないし梢円形を呈し、検出面からの深さはP 1で70cm程度。P 7・12・19・23の4個で直徑13~15cmの柱痕跡が検出されている。P 12の掘り方から、17世紀初め頃と考えられる志野の端反縫の破片が1点(第9図5)が出土している。

S B 2 掘立柱建物跡 調査区中央西寄りの北壁際で検出された。北側は調査区の外にのびる。S B 1 掘立柱建物跡に切られる。S B 3 掘立柱建物跡とは平面的には重複関係にあるが、新旧は不明である。検出部分の遺物の規模は、東西が南辺で2間398cm、南北が東辺で1間約205cm・西辺で1間約180cmである。柱間寸法は南辺東西列が東から200cmと198cmである。南北列の方向は、東辺でN-20°-Eである。検出された5個の柱穴は、長軸45cm前後、短軸35cm前後の梢円形を呈す。柱痕跡の残るものはない。遺物は出土していない。

S B 3 掘立柱建物跡 調査区中央の北壁際で建物の南辺が検出され、大部分は調査区の外にのびる。検出部分の遺物の規模は、東西南辺が4間768cmと考えられるが、西から2個目の柱穴は擾乱坑に切られている。柱間寸法は南辺東西列が東から188cm・201cmで、残り2間を二分割するとそれぞれ193cmである。東西列の方向は、南辺でN-72°-Wである。検出された4個の柱穴は、直徑52cmから43cmの円形ないし梢円形を呈す。検出面からの深さはP 38



<調査区北壁>

No.	土色	土性	特徴
I-a	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。炭化物片を含む。
I-b	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。炭化物片を含む。
II	7V8/1 緑褐色	シルト質粘土	風化礫を多く含む。風化色上の小ブロックを含む。
III	7V8/1 黄褐色	シルト質粘土	風化礫を多く含む。SDAを含む。
IV	7V8/8 黄褐色	粘土質シルト	小の風化礫を多量に含む。
A	7V8/8 黄褐色	シルト質粘土	風化礫、炭化色のゾロッキを多量に含む。
B	7V8/2 黒褐色	粘土質シルト	風化礫を多量に含む。
C	7V8/8 黄褐色	粘土質粘土	風化礫を多量に含む。
D	7V8/8 黄褐色	シルト質粘土	風化礫を多く含む。炭化物の小片を含む。

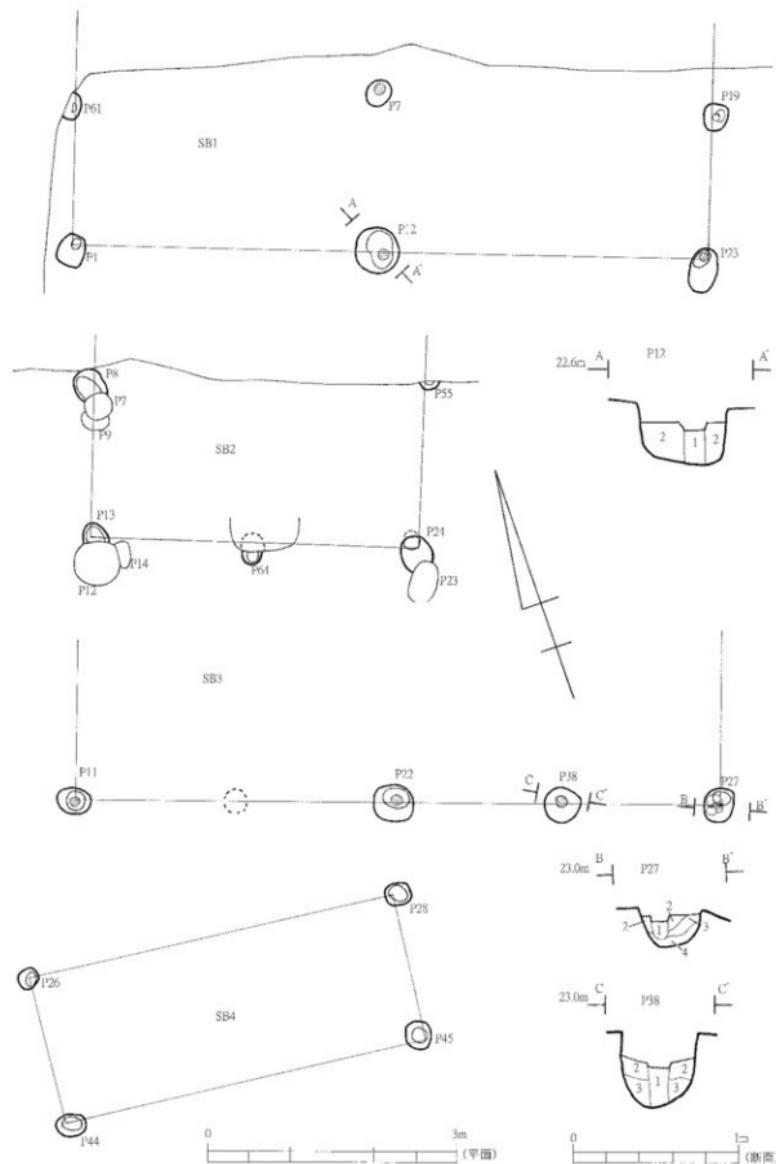
<調査区西壁>

No.	土色	土性	特徴
I-a	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。炭化物の小片を含む。
I-b	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。炭化物を含む。
I-c	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。炭化物を含む。
I-d	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
I-e	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
I-f	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
I-g	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化色のゾロッキを多く含む。
I-h	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化色のゾロッキを多く含む。
II	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
III	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
IV	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
5	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
6	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
7	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
8	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
9	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
10	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
11	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
12	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
13	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
14	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
15	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
16	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
17	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
18	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
19	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
20	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
21	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
22	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
23	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
24	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
25	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
26	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
27	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
28	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
29	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
30	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
31	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
32	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
33	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
34	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
35	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
36	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
37	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。
38	10V8/4 黄褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。風化物片を含む。

第5図 調査区断面図

で45cm程ある。P11・22・27・38の4個で直径15cm前後の柱旋跡が検出されている。出土遺物はない。

S B 4 据立柱建物跡 調査区東部に位置する。ピットの配置から迷物跡と想定した。S B 3 据立柱建物跡と平面的には重複関係にあるが、新旧は不明である。検出部分の遺物の規模は、東西が南北で1間約440cm、南北が東西で



第6図 堀立柱建物跡

<第6図 土層>

P.12

番号	土色	上・性	特徴
1	IORY03 黒褐色	粘土	褐色土質、黄色土を含む。
2	IORY02 单褐色	シルト質粘土	褐色土質、風化礫を多く含む。

P.27

番号	土色	上・性	特徴
1	IORY03 黒褐色	粘土質シルト	
2	IORY02 单褐色	シルト質粘土	褐色土質を多く含む。
3	IORY03 黑褐色	シルト質粘土	褐色土質を多く含む。
4	IORY03 黑褐色	シルト質粘土	褐色土質のブロック、風化礫を多く含む。

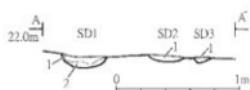
1 間180cmである。東西列の方向は、南辺でN=87°-Wである。検出された4基の柱穴は、直径35cmから25cmの円形を呈す。柱底跡は検出できなかつた。出土遺物はない。

2) 溝跡

S D 1溝跡 調査区南部の1段下がったところで、段差と平行にのびて検出された。S D 2溝跡を切る。幅は検出部では60cm前後であるが、西壁断面では150cmを確認できる。深さも検出面では18cm程であるが、断面では45cm程である。断面形は舟底状を呈する。堆積土は上部が暗褐色の粘土質シルト、下部が灰黄褐色の砂質シルトないし黄褐色または灰黄褐色の粘土質シルトで、風化礫を含んでいる。18世紀代の瀬戸内美濃窯と見られる碗の破片が1点出土している。

S D 2溝跡 S D 1溝跡の南側20~30cmに平行にのびて検出された。S D 3溝跡を切る。幅は検出部では35~20cmであるが、西壁断面では90cmを確認できる。深さは検出面では8cm程であるが、断面では45cm程である。断面形は舟底状を呈する。堆積土は上部が暗褐色の粘土質シルト、下部が黒褐色の粘土質シルトで、各層に風化礫を含んでいる。

S D 3溝跡 S D 1・2溝跡の南側にこれと平行にのびて検出された。北側はS D 2溝跡に切られる。幅は検出部で15~20cm前後である。深さは5cm程で断面形は舟底状を呈する。堆積土は上部が暗褐色の粘土質シルト、下部が暗褐色の粘土で、風化礫を含んでいる。



第7図 溝跡断面図

SD 1溝跡

番号	土色	土性	特徴
1a	IORY03 に深い黒褐色	粘土質シルト	風化礫をわずかに含む。
1b	IORY02 黒褐色	粘土質シルト	トレンチ用セメント等含む。内輪削り台。

SD 2溝跡

番号	土色	土性	特徴
1	IORY03 に深い黒褐色	粘土質シルト	風化礫を含む。

SD 3溝跡

番号	土色	土性	特徴
1	IORY03 に深い黒褐色	粘土質シルト	風化礫を含む。

S D A溝跡 基本層Ⅲ層とした旧表土が流入したと考えられる黒色シルト質粘土が堆積する溝状の落込みで、調査区の北壁断面では東西方向にのび、調査区西寄りで南東方向に折れてのびている。幅は75~200cmと一定していない。検出面からの深さは20~30cmであるが、北壁断面でのⅢ層は最大60cmの厚さがある。北壁の堆積土中から土師器の壺が潰れた状態で出土している。出土した壺は、やや扁平な球形の体部で、頸部から口縁部が外反し、口縁部は外側に折り返されて厚くなっている(第10図8)。外面は底部から口縁部までヘラミガキ調整されている。古墳時代前期の塩釜式期のものと考えられ、類例は、名取市野田山遺跡22号住居跡出土の壺などに見られる。

3) 土坑

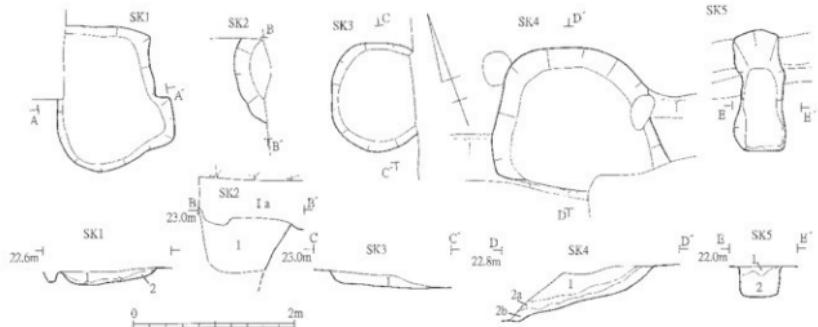
S K 1土坑 調査区西部中央で検出された。平面形は不整な長方形を呈し、南北長軸180cm・東西短軸14kmを測る。検出面から深さは15cmで、断面形はU字状を呈している。堆積土は2層に分けられる。上部は黒褐色の粘土質シルトで、底面付近には地山に類似する褐色の粘土質シルトが堆積している。出土遺物はない。

S K 2 土坑 調査区の北東角で検出された。遺構の大部分は調査区の外にのびている。検出部の状況から平面形は円形を呈するものと考えられる。検出部で南北104cm・東西45cmを測る。検出面から約70cm下がった底面に達しなかった。壁面の立ち上がりは比較的急である。調査部分の堆積土は黒褐色のシルト質粘土で、褐色土のブロックを含む。平面形と壁面の立ち上がりが急であることから、井戸跡の可能性が考えられる。遺物は近世の磁器片が出土している。

S K 3 土坑 調査区の東端際で検出された。一部は調査区の外にのびている。S B 4 垂直柱建物跡を切っている。平面形は円形を呈し、南北軸で径136cmを測る。深さは15cmで断面形は浅いU字形を呈する。褐色及び黄褐色の風化礫を含む暗褐色のシルト質粘土層1層である。遺物は出土していない。

S K 4 土坑 調査区の中央部で検出された。南側は調査区南部に形成された段差によって切られている。また、遺構の南東部は調査区の外にのびる。検出部の平面形は隅丸方形を呈する。検出部の大きさは、南北176cm・東西210cmを測る。検出面からの深さは68cmで、断面形は播鉢状を呈する。堆積土は上部が黒褐色の粘土質シルト層で、下部は黒色ないし黒褐色のシルト質粘土層であるが、各層とも風化礫を含む。遺物は、17世紀初頭頃の唐津の鉢（第9図7）、18世紀前半頃の肥前の鉢（第9図3）、18世紀代と見られる产地不明の播鉢（第9図8）。16世紀後半の中国産青花の皿（第10図4）などが出土している。

S K 5 土坑 調査区西南部で検出された。S D 2・3 溝跡に切られている。平面形は長方形を呈する。大きさは、南北長軸150cm・東西短軸63cmを測る。深さは39cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は、上部が灰黃褐色シルト質粘土、下部は褐色の粘土質シルト質粘土層で、各層とも風化礫を多く含む。遺物は2層中から土師器片が出土している。



SK 1 土坑

地番	土 色	土 性	備考	番 号
1	10Y23/3 黒褐色	粘土質シルト	風化礫が多く含む。	
2	10Y34/4 黒色	粘土質シルト	風化礫多く含む。土中に風化したコックを含む。	

SK 2 土坑

地番	土 色	土 性	備考
1	10Y23/1 黒褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックをまばらに含む。

SK 3 土坑

地番	土 色	土 性	備考
1	10Y33/2 黒褐色	シルト質粘土	褐色、黄褐色の風化礫を多量に含む。

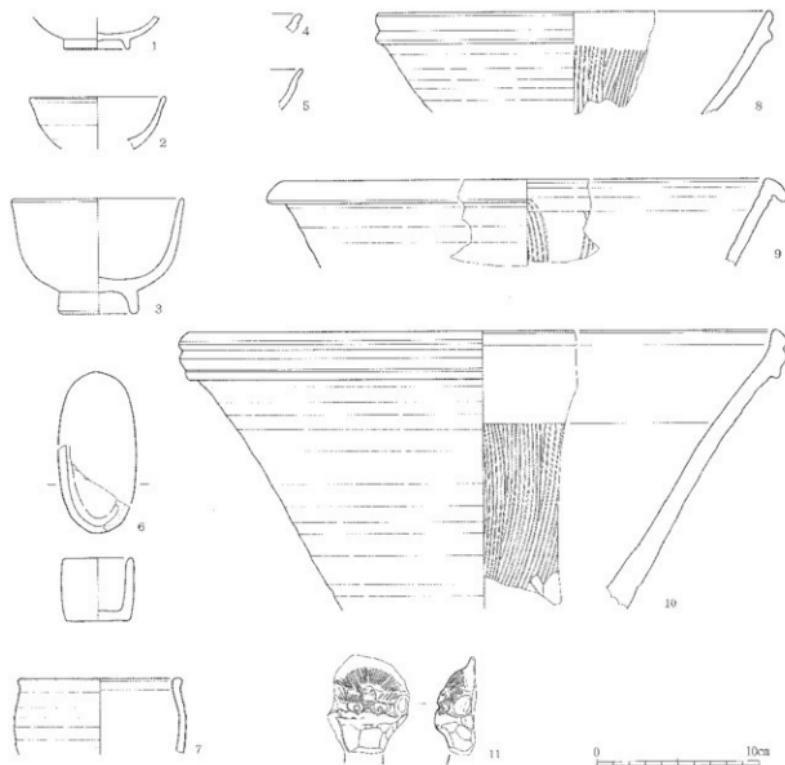
SK 4 土坑

地番	土 色	土 性	備考
1	10Y32/2 黒褐色	粘土質シルト	風化礫及び風化物を多く含む。
2	10Y2/1 黒色	シルト質粘土	風化礫を含む。
3	10Y2/2 黒褐色	シルト質粘土	風化礫を多く含む。

SK 5 土坑

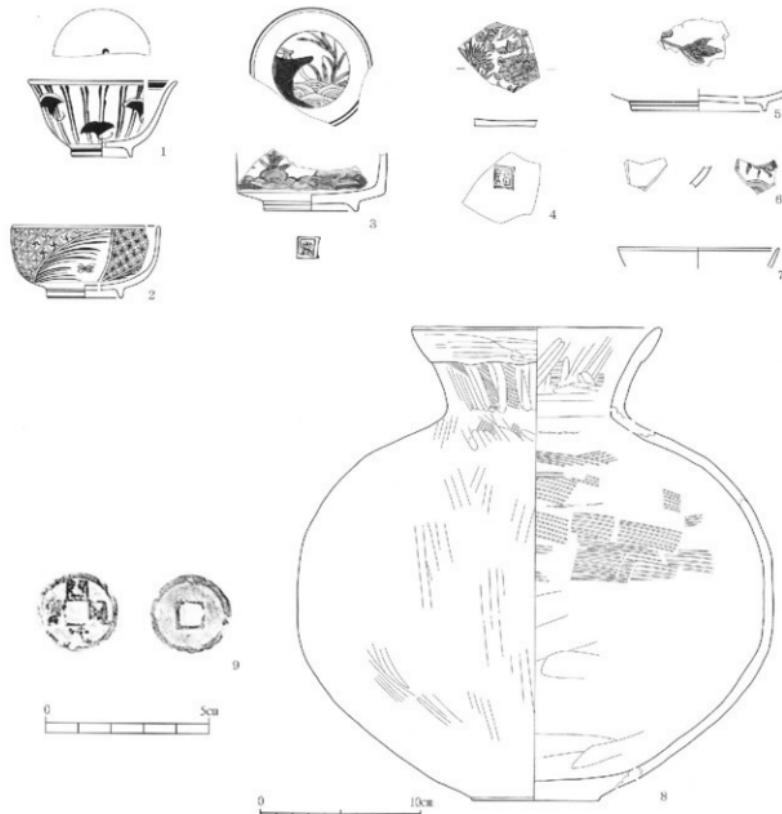
地番	土 色	土 性	備考
1	10Y24/2 黄褐色	シルト質粘土	風化礫。褐色土の小粒を多く含む。
2	10Y24/4 通褐色	粘土質シルト	風化物を多く含む。風化物の小粒をわずかに含む。

第8図 土坑実測図



件号 番号	器種 器物	出 土 地 点 名	遺構圖 No.	尺寸 寸法	分 類 種 類	施 工 法	特 徴 性 質	目 的 用 途	参考圖版
1 3-4 1種	素手器	遺構名	遺構圖 No.	尺寸 寸法	種類	施工法	(回旋、平坦、若狭、圓錐、木痕、火燒、馬蹄)		
1 3-4 1種	素手器	SDP		高さ 高さ	回旋	(2.7)	火燒	15代	6-1
2 1-5 1種	素手器	S64	II層	高さ 高さ	輪郭	(3.4)	火燒	15代	6-2
3 2-6 1種	素手器	S64	II層	高さ 高さ	輪郭	(2.3)	火燒	15代	6-3
4 3-10 1種	素手器	PTD	II層	高さ 高さ	輪郭	(3.0)	火燒	15代	6-4
5 2-9 1種	素手器	PTD	II層	高さ 高さ	輪郭	(2.8)	火燒	15代	6-5
6 3-1 1種	素手器	PTD	II層	高さ 高さ	輪郭	(2.9)	火燒	15代	6-6
7 1-5 1種	素手器	S64	II層	高さ 高さ	輪郭	(3.0)	火燒	15代	6-7
8 1-7 1種	素手器	S64	II層	高さ 高さ	輪郭	(3.0)	火燒	15代	6-8
9 1-2 1種	素手器	S64	II層	高さ 高さ	輪郭	(2.8)	火燒	15代	6-9
10 1-3 1種	素手器	S64	II層	高さ 高さ	輪郭	(2.8)	火燒	15代	6-10
11 1-1 1種	瓦質土器	瓦質土器		高さ 高さ	輪郭	(6.2)	火燒	15代	6-11

第9図 出土遺物1（陶器、瓦質土器）



品名 番号	施設 番号	法木樹 遺構名	遺物名	數量 件	分類	形狀	法 面	法 底	直 徑	直 高	重 量	出 典		写真枚数		
												（複数・単品・素材・被覆・木取・焼物・特殊）	（複数・単品・素材・被覆・木取・焼物・特殊）			
1-1	I-1	1層		1	鉢器	圓	4.7	0.7	3.7	1.7	0.2	施設 滅失	新古文	漢代	24	
2-1-2	I-1			1	鉢器	圓	4.5	0.3	4.6	1.6	0.1	施設 滅失	新古文・草文・鑄文	漢代	7.5	
3-1-3	I-1			1	鉢器	圓	3.63		5.7	1.6	見込古文面文	新古内面鑄柄	施設 滅失	新古文	7.6	
4-1-6		SS4	2個	2	鉢器	圓						世先	草花文・高台内一面特の「輪」部	西周	7.7	
5-1-4	I-1			1	鉢器	圓	(1.1)		(8.0)	0.9	0.1	世先	草花文	西周	7.8	
6-1-5	I-1			1	鉢器	碗						青竹	草花文	中国	16代	2.6
7-1-2		Fa56	1個	1	鉢器	碗						青竹	文様不明	青竹	文様不明	7.0
8-C-1		SDA	折口口付鋸切盤	1	盤	29.0	(15.7)		(7.8)	3.5	0.2	青竹	口付鋸切	中国	16代	6.5
9-N-1		[N]	古鏡	1	鏡				2.4			鏡元祖室			6.10	

第10図 出土遺物2（磁器、土師器、古鏡）

6まとめ

- ① 今回の調査区では、掘立柱建物跡4棟・溝跡3条・上坑5基及び掘立柱建物跡以外のピット36基が検出された。
- ② 調査区南部の段差は、18世紀以降の陶磁器が出土したSK4土坑を削っていることから、概ね江戸時代中期以降に形成されたもので、城館の造成に伴うものでないと考えられる。
- ③ 掘立柱建物跡は、SB4掘立柱建物跡以外は調査区の北側にのびている。
- ④ 掘立柱建物跡は、柱穴の切り合い及び空間の重複があることから、建て替えが行われたことがわかり、長期間にわたって土地が使用されていたことが考えられる。
- ⑤ 掘立柱建物跡のうち、SB1掘立柱建物跡は17世紀初頭の陶器が出土したことからこれ以降の建築年代で、SB2掘立柱建物跡はこれより古いと考えられる。SB3掘立柱建物跡はこの前後の時期と推定される。
- ⑥ SD1～3溝跡は、西壁の断面観察及び堆積土の状況により、段差の形成に伴う造構で、掘立柱建物跡などより新しい時期のものと考えられる。
- ⑦ 5基の上坑のうち、SK2土坑は、造構の規模・形態・深さから井戸跡と考えられるが、底面を検出することはできなかった。また調査部分では井戸枠施設は検出されなかった。
- ⑧ 本調査で検出された掘立柱建物跡や土坑は、松森城の麓部に形成された屋敷地に関係する造構と考えられる。

＜参考文献＞

- 柴桃正隆（1973）：『史料 仙台領占城・館 第3巻』宝文堂出版
 菅田慶信（2006）：『松森城跡』『仙台市史 特別編7 城館』仙台市
 吾妻俊典ほか（1992）『野田山遺跡』『宮城県文化財調査報告書第145集』



1 遺構検出状況（南西から）



2 遺構検出状況（東から）



3 基本層序（北壁西端部）

図版1 遺構検出状況と基本層序



1 北壁断面：北壁中央部（南西から）



2 西壁断面（東から）



3 SB1・2・3掘立柱建物跡（西から）

図版2 土層断面と掘立柱建物跡



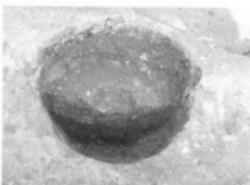
1 S B 1 挖立柱建物跡
(南東から)



2 S B 4 挖立柱建物跡
(北西から)



5 S D 1・2・3・溝跡と S K 1・5 土坑 (北西から)

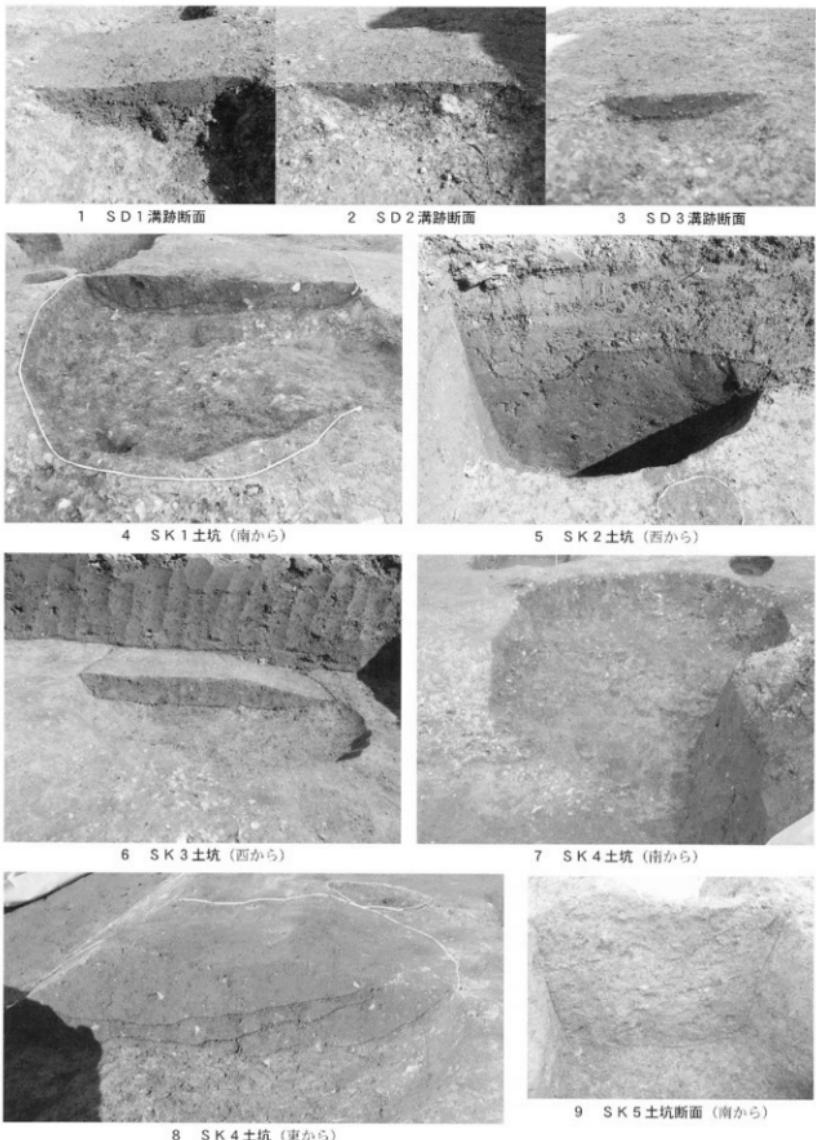


3 S B 3 挖立柱建物跡 : P 38



4 S B 3 挖立柱建物跡 : P 22

図版3 挖立柱建物跡と溝跡



図版4 溝跡と土坑



1 SDA溝跡(北壁III層)土師器出土状況(南から)

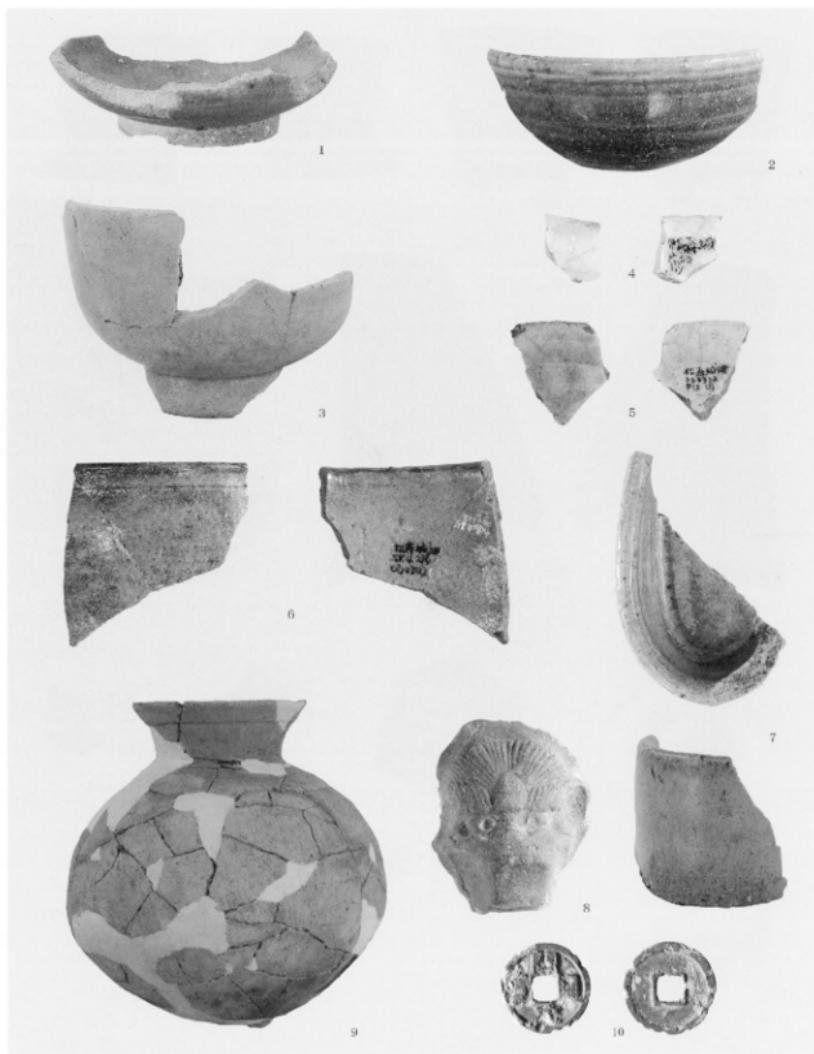


2 完掘全景(東から)



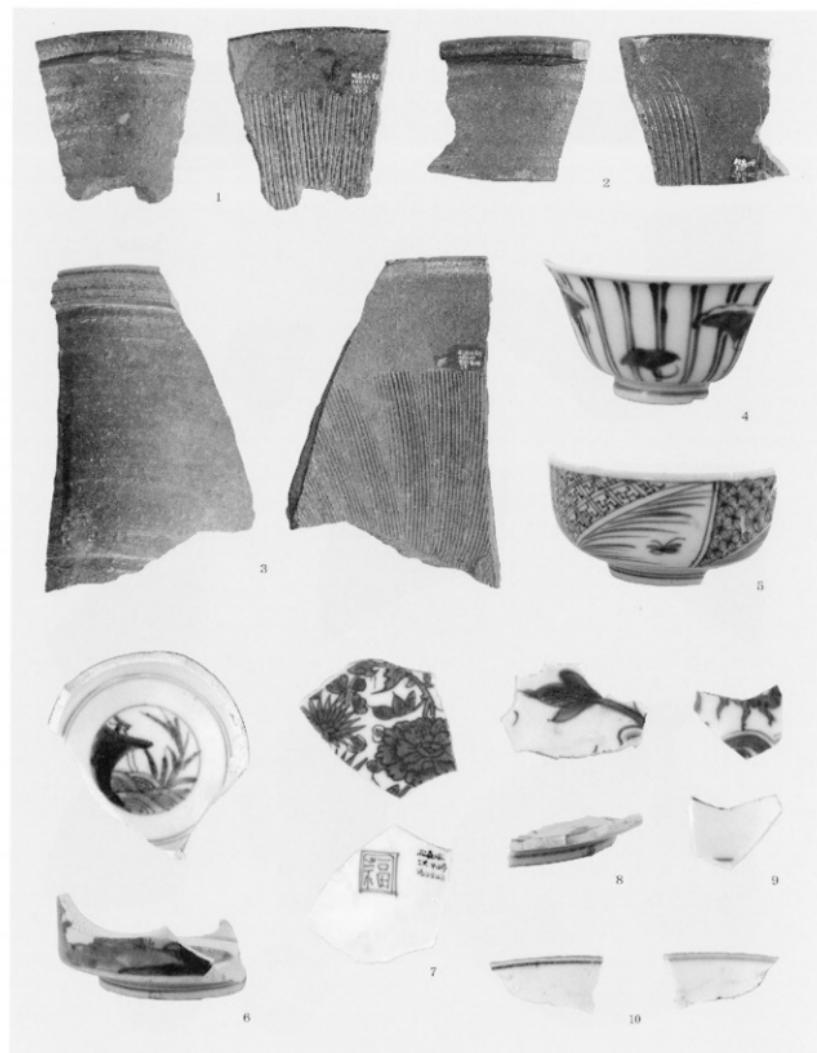
3 完掘全景(南西から)

図版5 SDA溝跡の土器出土状況と完掘全景



1 陶器 3 陶器 5 陶器 7 陶器 9 土師器	碗 碗 碗 質水入 壺	I-4 I-6 I-9 I-1 C-1	I柄 SK4 Pit12 搅乱 SD4	(第9図1) (第9図3) (第9図5) (第9図6) (第10図8)
2 陶器 4 陶器 6 陶器 8 瓦質土器 10 古銭	碗 鉢 鉢 瓦質土器 古銭	I-8 I-10 I-5 I-11 N-1	SD1 Pit53 SK4 I層 Pit1	(第9図2) (第9図4) (第9図7) (第9図11) (第10図9)

図版6 松森城跡第1次調査出土遺物1



1 陶器 楊跡 I-7 SK4 2層 (第9図8)	2 陶器 楊跡 I-2 I層 (第9図9)
3 陶器 楊跡 I-3 I層 (第10図10)	4 磁器 碗 J-1 I層 (第10図1)
5 磁器 碗 J-2 I層 (第10図2)	6 磁器 碗 J-3 I層 (第10図3)
7 磁器 碗 J-6 SK4 2層 (第10図4)	8 磁器 盒 J-4 I層 (第10図5)
9 磁器 碗 J-5 I層 (第10図6)	10 磁器 盒 J-7 PI133 (第10図7)

図版7 松森城跡第1次調査出土遺物2

II 松森城跡第2次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	松森城跡（宮城県遺跡番号19020）	
調査地点	仙台市泉区松森字内町19-1の一部	
調査期間	擁壁部分 平成18年1月31日～2月2日 造成工事部分 平成18年3月1日～3月10日	
調査対象面積	開発面積	1,538m ²
	造成工事部分	317m ²
調査面積	擁壁部分	64m ²
	造成工事部分	302m ²
調査原因	長屋住宅建築	
調査主体	仙台市教育委員会	
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係	
担当職員	主査 工藤哲司	文化財教諭 三塚博之・浅野克樹

2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成17年6月2日付けて、地権者の斎藤一夫氏より、切土と盛土を伴う宅地造成工事のうえ、長屋住宅の建築に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答したことに基づく。調査は、擁壁工事部分を平成18年1月31日～2月2日に実施した。また、造成工事関係部分は、平成18年2月16日～17日に確認調査を実施したところ、多数の造構が検出されたことから再度協議し、平成18年3月1日～3月10日に本調査を行った。

3 遺跡の位置と環境

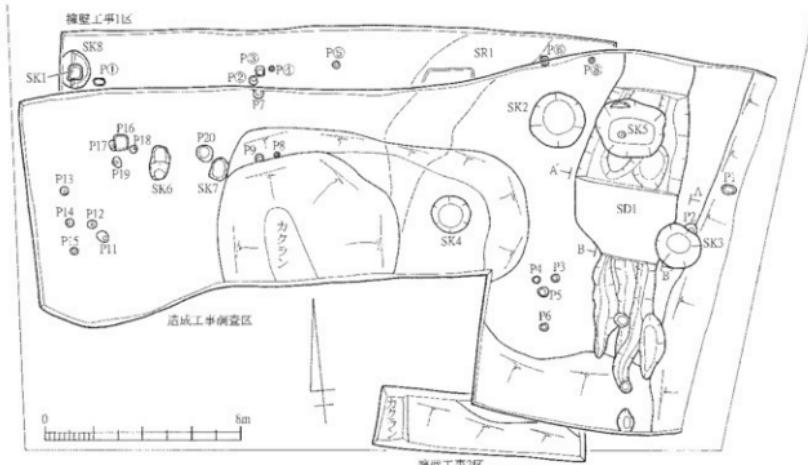
松森城跡の位置と環境は、本書1松森城跡第1次発掘調査報告書を参照されたい。第2次調査区は、城への登城路を挟んで1次調査区の北西約200mにあたる。松森城跡の麓に形成された城下集落の最上部に位置し、開発地区の北側は急傾斜となっており、斜面の途中に数段の曲輪が想定される。

4 基本層序

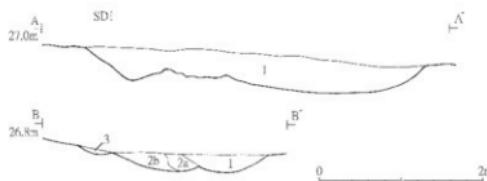
- I 層 10YR 2/3 黒褐色のシルト質粘土。表土及び耕作土。
- II 層 10YR 3/3 暗褐色のシルト質粘土。風化礫を多量に含む。S R 1より東部の一部に分布。
- III 層 2.5YR 5/6 黄褐色の粘土層。地山。場所により、黒色粘土・暗褐色シルト質粘土が地山層となっているが、いずれも丘陵から供給されたと観察される風化礫を多く含んでいる。

5 発見遺構と出土遺物

III層上面で、溝跡1条・井戸跡3基を含む土坑7基・ビット25基が検出された。ビットには柱板跡の認められるものや、底面から扁平な石材が出土したものもあるので、掘立柱建物跡が存在した可能性を考えられるが、建物配置の分かるものはない。調査区中央の現況が屋敷から果樹畠への登り口に当る部分は、近代以降に削平を受け、大きな掘乱坑が掘られている。



第11図 遺構配置図



SD 1

番号	土 垣	土 壁	面 方
1	0.9m 堆積土	シルト	風化砂粘土層に少泥質
2a	0.9m 堆積土	シルト	風化砂ブリック長多量に含む

番号	土 壁	土 壁	面 方
2b	1.97±0.02 黒褐色	シルト	風化砂粘土少泥質
3	1.91±0.02 黒褐色	シルト	風化砂粘土少泥質

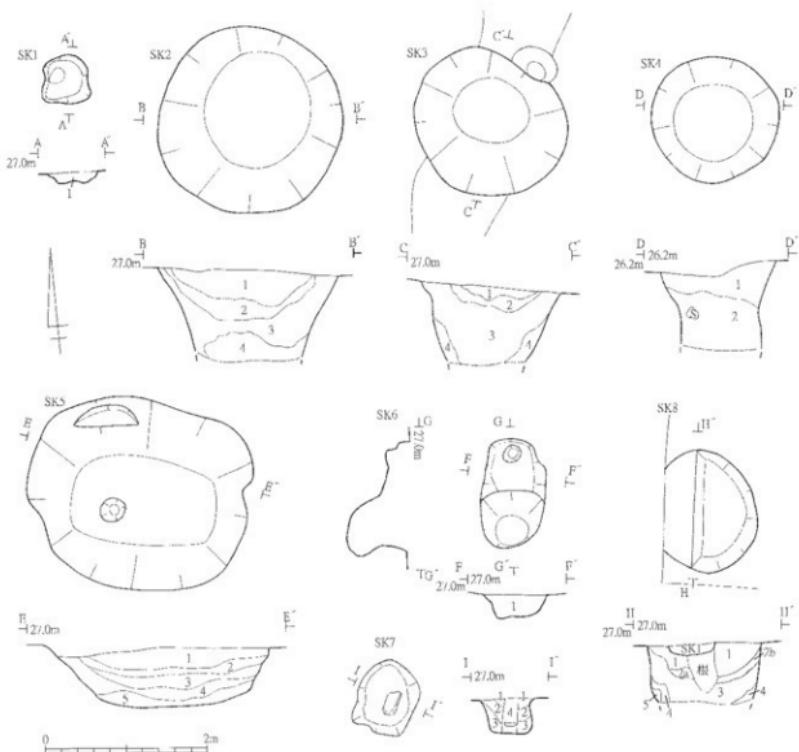
第12図 溝跡断面図

1) 溝跡

SD 1溝跡 調査区の東部で、傾斜と同じ南北方向に延びて検出された。SK 3・5土坑に切られている。検出部の中央付近で幅4.2m・深さ44cmを測る。北端部では1回以上、南端部では2回の掘り直しが行われたことが遺構の横断面と土層断面から確認でき、南端部では4条の平行する溝に分かれている。堆積土は各層とも風化砂を含む黒褐色のシルト層で、旧表土層が流入して堆積したと考えられる。遺物は、ロクロ土師器片1点(第14図1)、上部質土器皿3点(第14図4~6)が出土した。土師質土器は、佐藤洋氏の編年では、3期ないし4期に相当し、13世紀から14世紀頃の年代が考えられる(注1)。

2) 土坑

SK 1土坑 掘壁工事1区の西端部で検出された。SK 8土坑を切る。平面形は不整な方形を呈し、南北長軸60cm・東西短軸55cmを計る。断面形は底面に凹凸のある不整形で、深さは12cmほどである。堆積土は、風化砂を多く含む



SK 1	土色	土性	腐泥
1 10YR2/8 黄褐色	シルト質粘土	泥質粘土の塊化を多く含む。泥質物を少含む。	
SK 2	土色	土性	腐泥
1 10YR2/5 黄褐色	シルト	風化塵を多量に含む。灰化物を含む。	
2 10YR2/2 黄褐色	粘土質シルト	黄色土と細い砂のゾックを多量に含む。	
3 10YR3/5 鹿鳴色	砂質粘土	風化塵を含む。	
4 5YR5/2 黒褐色	粘土	オリーブ色の小ブロックを含む。	
<hr/>			
SK 3	土色	土性	腐泥
1 10YR2/3 黑褐色	シルト	風化塵を多量に含む。	
2 10YR3/0 鹿鳴色	シルト	黄褐色粘土のゾックを多量に含む。	
3 10YR3/1 鹿鳴色	粘土質シルト	風化塵を少量含む。	
4 10YR3/2 黑褐色	シルト質粘土	粘土塵を多量に含む。	
<hr/>			
SK 4	土色	土性	腐泥
1 10Y3/3 黑褐色	シルト	風化塵を含む。	
2 10Y3/1 鹿鳴色	シルト質粘土	樹下土は次後にグライ化している。	
<hr/>			
SK 5	土色	土性	腐泥
1 10YR2/2 黄褐色	粘土質シルト	風化塵と風化粘土を多量に含む。	
2 10YR2/2 黄褐色	シルト質粘土	粘土・砂の块状を含む。	
3 10YR2/2 黄褐色	シルト質粘土	風化塵を多量に含む。	
4 5YR2/2 黑褐色	シルト質粘土	粘土上・砂の塊状・細い塵を含む。	
<hr/>			
SK 6	土色	土性	腐泥
1 10YR2/3 黄褐色	シルト	風化塵を多量に含む。	
2 10YR2/2 黄褐色	シルト	風化塵を多量に含む。	
3 10YR2/2 黄褐色	シルト	風化塵を多量に含む。	
4 5YR2/2 黑褐色	粘土	粘土上・砂の塊状・細い塵を含む。	
<hr/>			
SK 7	土色	土性	腐泥
1 10YR4/5 に紫青色	シルト	風化粘土を含む。	
2 10YR4/5 に紫青色	シルト	粘土・砂の塊状を含む。	
3 10YR3/6 墓葬色	シルト	風化塵を少量含む。泥色を基調に含む。	
4 5YR2/0 黑褐色	シルト質粘土	粘土塵を少量含む。	
<hr/>			
SK 8	土色	土性	腐泥
1 10YR3/6 墓葬色	粘土	風化塵を多く含む。	
2 5YR2/0 黑褐色	粘土	域の風化並びに粘土のブロックを含む。	
3 10Y2/0 黑褐色	粘土	風化塵と風化粘土のブロックを多量に含む。	
4 10Y2/0 黑褐色	粘土	風化塵を多く含む。風化粘土のブロックを含む。	
5 10Y2/4 黑褐色	シルト質粘土	風化塵を少量含む。	

第13図 土坑（井戸跡・柱穴）実測図

黄褐色のシルト質粘土層である。遺物は出土していない。

S K 2 土坑（井戸跡） 調査区の北東部で検出された。重複はない。平面形は円形を呈し、南北軸223cm、東西軸217cmを測る。検出面から110cmまで下げたが底面は検出されなかった。調査部分の断面形は逆台形で、上部がやや広がっている。堆積土は調査部分で4層に分けられた。調査部分では井戸枠等は検出されておらず、素掘りの井戸と考えられる。遺物は、古代の平瓦片1点（第14図14）、折り曲げて形成した管状の鉄製品1点（第15図6）、洪武通宝1点（第15図7）が出土している。

S K 3 土坑（井戸跡） 調査区の東辺部中央で検出された。S D 1溝跡・P 2を切る。平面形は円形を呈し、南北軸で150cmを測る。検出面から90cmまで下げたが底面は検出されなかった。調査部分の断面形は円筒形で、壁面は垂直に近い立ち上がりを示す。堆積土は調査部分で4層に分けられた。素掘りの井戸と考えられる。遺物は、表面が平滑なことから砥石と考えられる砂岩製の石材（第15図2）が1点出土している。

S K 4 土坑（井戸跡） 調査区の中央付近で検出された。搅乱によって上部が切られている。平面形は円形を呈し、南北軸155cm、東西軸156cmを測る。検出面から110cmまで下げたが底面は検出されなかった。調査部分の断面形は円筒形で、壁面は垂直に近い立ち上がりを示すが、上部はやや広がっている。堆積土は調査部分で2層に分けられた。素掘りの井戸と考えられる。遺物は、中世陶器の甕の体部破片1点（第14図7）と、茶臼の下臼の破片（第15図1）が出土している。

S K 5 土坑 調査区の北東部で検出された。S D 1溝跡を切る。平面形は梢円形に近い隅丸長方形を呈し、東西長軸273cm・南北短軸で233cmを測る。深さは72cmで、断面形は舟底形を呈する。北壁の西寄りには半円形のステップ状の段が形成されている。堆積土は5層に分けられた。いずれも色調は黒褐色を呈す。各層とも自然堆積層と観察される。最下層は粘土層で、植物遺体を含んでいる。南西角付近の底面は直径30cm、深さ約5cmのピット状に落ち込んでいる。遺物は出土していない。

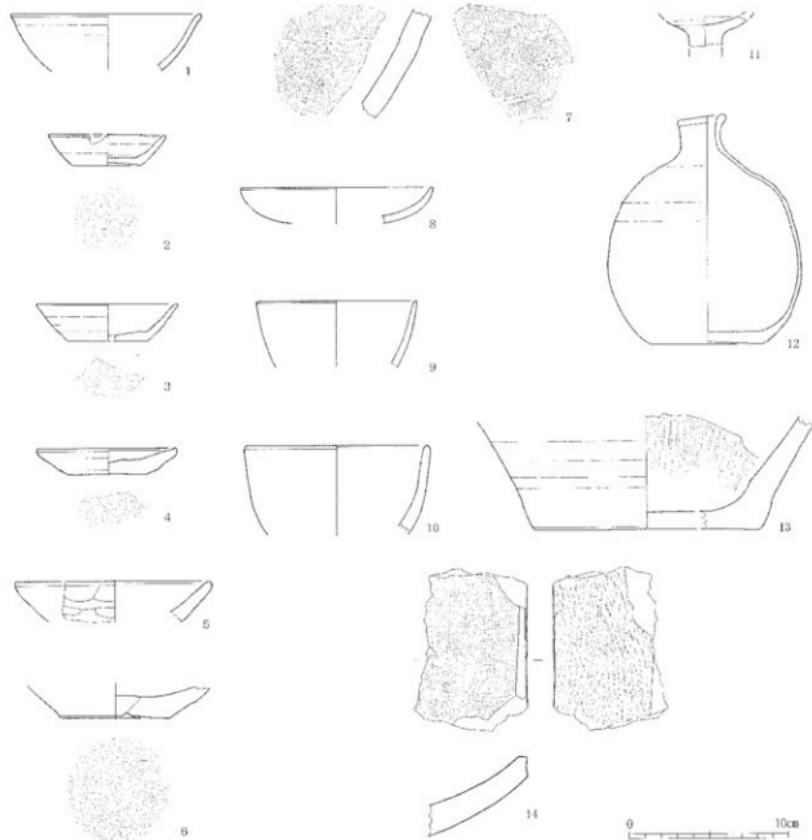
S K 6 土坑 調査区の西部で検出された。平面形は不整な梢円形を呈し、南北長軸134cm・東西短軸で77cmを測る。深さは75cmで、横断面形は舟底形を呈し、縦断面形は南側が1段深く掘られ、南端は壁面がオーバーハングしている。また、北側の底面端部には浅いピット状の落込みがある。堆積土は黒褐色シルト1層で、下部には黄褐色土のブロックを含んでいる。遺物は上師器片が数点と、土師質土器の皿1点（第14図2）出土している。土師質土器の口縁部には数箇所にススが付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。佐藤洋氏の編年では、該当する資料はないが、空白期の5期ないし6期の資料で、15~16世紀に相当する可能性が考えられる。

S K 7 土坑 調査区の西部で検出された。平面形は不整形を呈し、南北長軸93cm・東西短軸で77cmを測る。深さは44cmで、横断面形は円形を呈す。径18cmの円形の柱痕跡が認められたことから、掘立柱の掘り方と考えられる。柱痕跡の位置からは掘り方の底面から数cm浮いた面で礎板状の扁平な石が出土している。柱痕跡の堆積土は黒褐色シルト質粘土で、掘り方の埋め土は3層に分けられる。17世紀後半から18世紀前半頃と考えられる肥前岸の碗の破片（第14図9）が出土している。

S K 8 土坑（井戸跡） 捆壁工事1区の西端部で検出された。S K 1土坑に切られる。西部は調査区の外にのびている。平面形は円形を呈し、南北軸で150cmを測る。検出面から90cmまで下げたが底面は検出されなかった。調査部分の断面形は円筒形で、壁面は垂直に近い立ち上がりを示す。遺物は出土していない。

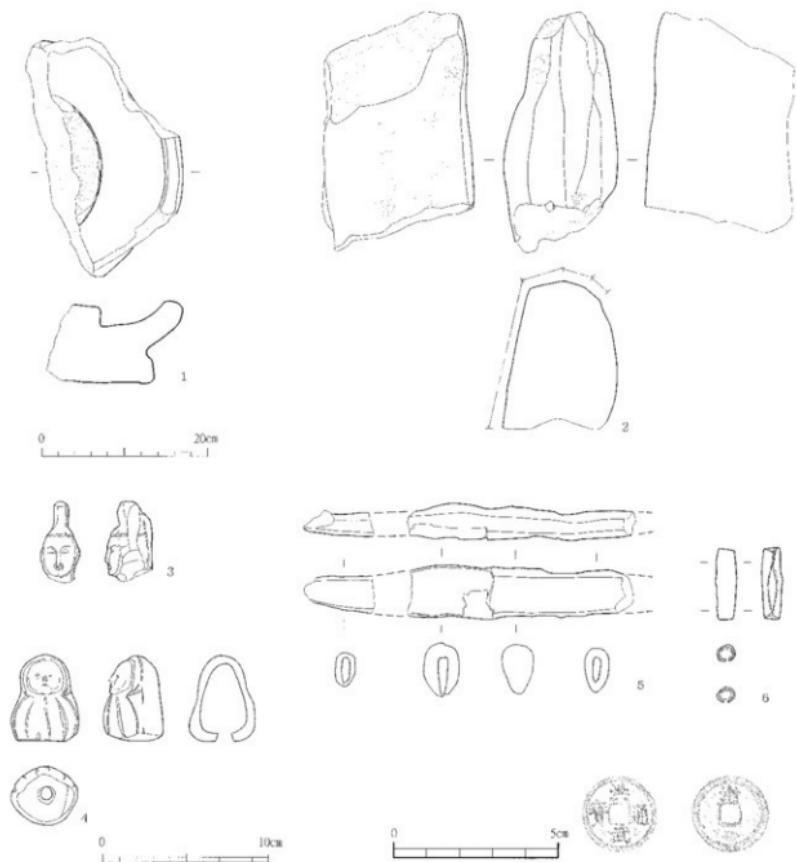
3) ピット群

ピットは25基検出され、このうち櫛壁工事1区に関わるピット①・②・③・⑤・⑥、造成工事調査区に関わるピット5・11・14・16で柱痕跡が確認できた。ただし、搅乱や調査区の制約があり、掘立柱建物跡の柱配置を想定することはできなかった。



図面番号	型式 名	出土 地	分類	測 定		特 徴	考 察	写真番号
				底 径	高 さ			
1	D-1	SD1 塹上	横口 縦溝底	16	(3.5)	1.4	内面、底 部に横 溝有り	13-1
2	2-11	SK6 塹上	横口 縦溝底	16	1.9	7.0	外底 にクロコ状 凹凸有り	13-2
3	2-5	1層	土師質土器	15	2.3	(0.6)	(5.0) 内、外底 にクロコ状 凹凸有り	13-3
4	2-6	SD1 塹上	横口 縦溝底	16	1.6	(0.6)	内、外底 にクロコ状 凹凸有り	13-4
5	2-8	SD1 塹上	横口 縦溝底	15	(2.5)	11.8	手づくね	13-5
6	2-9	SD1 塹上	土師質土器	15	(2.0)	6.8	外底 にクロコ状 凹凸有り	13-6
7	2-10	SK6 塹上	横口 縦溝底	15	1.7	7.0	底 部に横 溝有り	13-7
8	2-13	1層	陶器	15	(2.2)	(11.8)	底 部に横 溝有り	13-8
9	2-13	NAC 塹上	陶器	15	(4.1)	(9.8)	透明感 有り	13-9
10	2-13	1層	陶器	15	(5.5)	(11.4)	透明感 有り	13-10
11	2-12	PCD 塹上	陶器	15	(2.5)	7.0	胎 土 少 量	13-11
12	2-1	陶器	陶器	15	1.3	3.2	6.9 透 明	13-12
13	2-4	1層	土師質土器	15	1.9	—	外底 にクロコ状 凹凸有り	13-13
14	2-1	SK2 塹上	陶器	15	(0.15)	(17.0)	(7.0) 内底 に横 溝有り	13-14

第14図 出土遺物1（土師器、土師質土器、陶器、瓦）



第15図 出土遺物2 (石製品、土製品、金属製品)

団号 番号	形態 名	出土・地 点			年 代		性 質			規 格			考 證	写真版
		藍本用	邊境用	邊境費	地名	範例	鉛錠	28高・長	11幅・廣	83厚・厚	延長・重	(測量・鑑定・茶村・根井・木庭・足施・野間)		
1 K-1	SS4	2箇			心原古	石臼	(29.5)	(10.7)	(10.3)	420	無目立子口		14.5	
2 K-2	SS3				後石塚	引出53.58	39.7	14.1	16.5	800	寸子打裏		14.6	
3 P-1	1箇				上賀古	上人形	(3.0)	(2.5)	(2.9)		鍵人形 茶葉標		14.0	
4 P-2	1箇				十賀古	十人形	5.3	4.2	0.8		だら丸?		14.1	
5 S-3					新潟市	刀子?	(20.7)	3.2	2.2		鍔付刃		14.7	
6 H-7	SS2	3箇			新潟市	小網	4.4	1.3	1.2		日清武夷管	「海」	14.8	
7 H-1	SS2	1箇			古越								14.9	

4) 沢状の落込み

S R 1 調査区の中央を傾斜面と同方向にのびて検出された。掩埋工事1区の西部では幅が2.8mで、検出面からの深さは70cm以上である。断面形はV字上を呈する。堆積土上部に「十和田a（To-a）」（10世紀初頭降下）と見られる灰白色火山灰の小ブロックが分布することから、平安時代には埋没していたことが考えられる。この落込みについては、自然に形成された沢と推定される。

6まとめ

- ① 溝跡1条・井戸跡3基を含む土坑7基・ピット25基などの遺構が検出された。
- ② 溝跡からは土師質土器の皿が複数出土しており、遺構の時期としては中世頃と考えられる。
- ③ 土坑のうち3基は井戸跡と考えられる。調査部分では井戸枠施設は検出されなかった。
- ④ SK 4土坑（井戸）からは、13世紀後半～14世紀前半頃の中世陶器が出土しているが、この遺物が井戸跡の年代を示すかどうかは判断できない。

＜参考文献＞

- 紫桃正隆（1973）：『史料 仙台領古城・館 第3卷』宝文堂出版
 畑田慶信（2006）：『松森城跡』『仙台市史 特別編7 城館』仙台市
 佐藤洋（2003）：『(2)陸奥南部2-宮城県-』「中世奥羽の土器・陶磁器」 p29～96東北中世考古学会編 高志書院



1 調査前全景
(北東から)



2 遺構検出状況全景
(北西から)

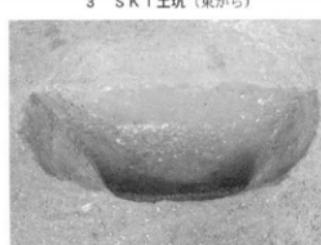
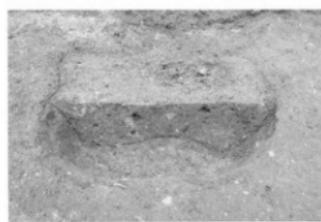


3 遺構検出状況：東部（南から）

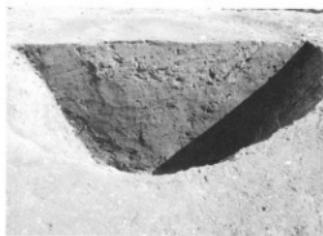


4 遺構検出状況：中央部（北から）

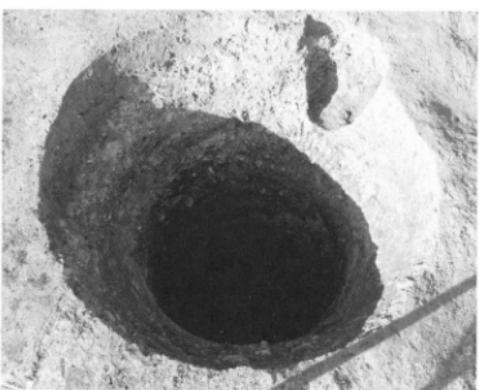
図版8 調査区の位置と遺構検出状況



図版9 溝跡と土坑・井戸跡



1 SK 3 土坑断面（南から）



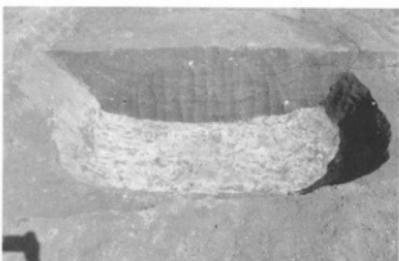
2 SK 3 土坑：井戸跡（南から）



3 SK 4 土坑断面（南から）



4 SK 4 土坑：井戸跡（南から）



5 SK 5 土坑断面（南から）

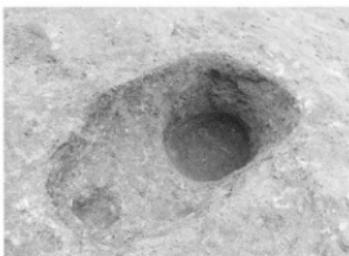


6 SK 5 土坑（南から）

図版10 井戸跡と土坑



1 SK 6 土坑断面（南から）



2 SK 6 土坑（北西から）



3 SK 7 土坑断面（南から）



4 SK 7 土坑（南から）



4 SK 8 土坑（南から）



6 擬壁工事部2区（西から）



5 擬壁工事部1区（西から）

図版11 土坑と擬壁工事部の調査区

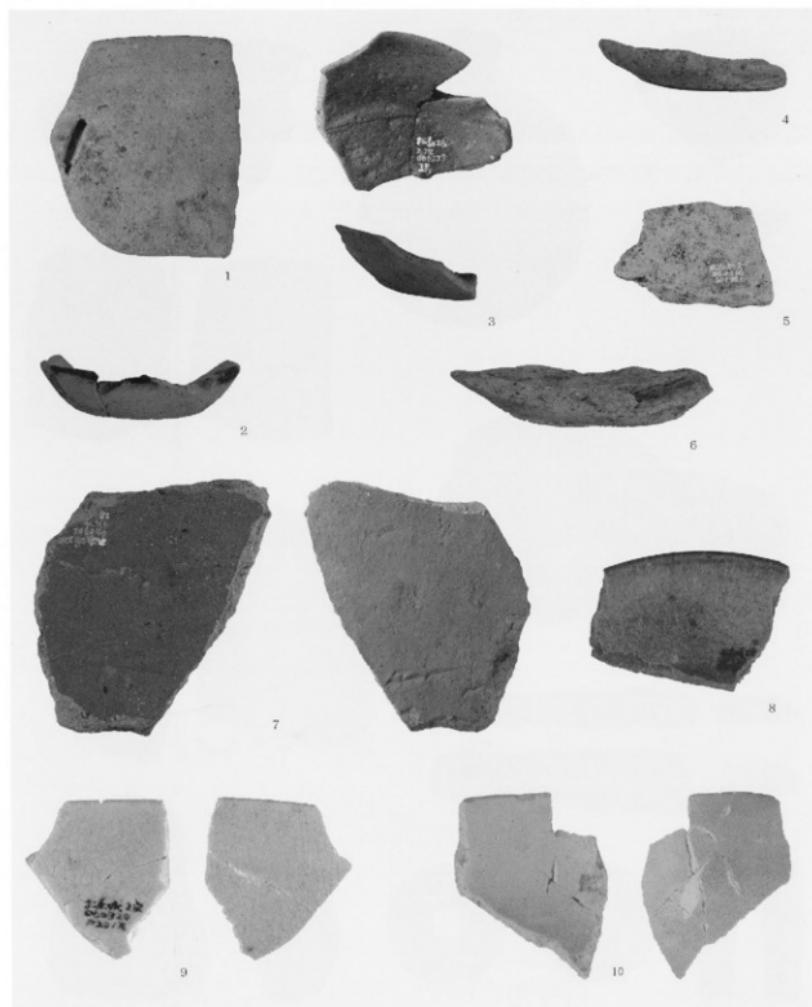


1 調査後の全景（北西から）



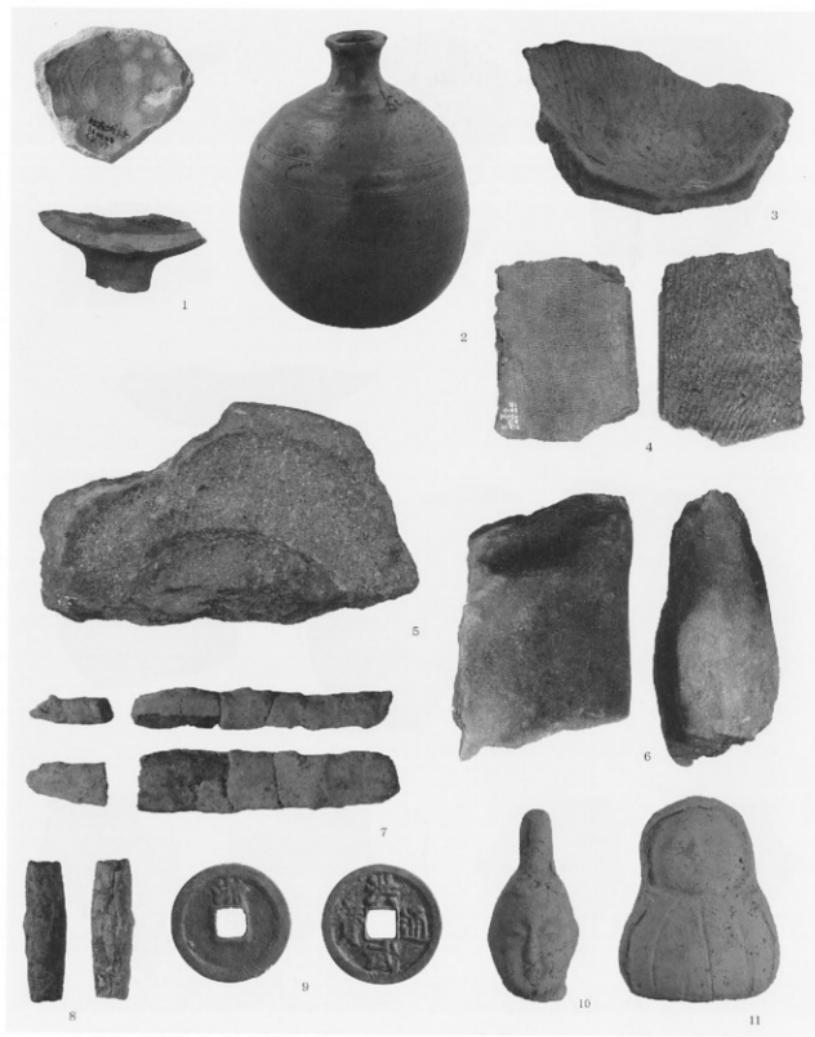
2 調査後の全景（東から）

図版12 調査終了写真



- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 土師器 壕 D-1 SD 1 (第14図1) | 2 土師質土器 瓢 I-11 SK 6 (第14図2) |
| 3 土師質土器 盆 I-5 I層 (第14図3) | 4 土師質土器 瓢 I-6 SD 1 (第14図4) |
| 5 土師質土器 盆 I-8 SD 1 (第14図5) | 6 土師質土器 瓢 I-9 SD 1 (第14図6) |
| 7 陶器 頸 I-10 SK 4 (第14図7) | 8 陶器 瓢 I-3 I層 (第14図8) |
| 9 陶器 瓢 I-13 Pit20 (第14図9) | 10 陶器 瓢 I-2 Pit 1 (第14図10) |

図版13 松森城跡第2次調査出土遺物1



- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 陶器 仏飯器 I-12 SK 7 (第14図1) | 2 陶器 盆 I-1 捺亂穴 (第14図12) |
| 3 陶器 煙鉢 I-4 I層 (第14図3) | 4 瓦 平瓦 G-1 SD 1 (第14図14) |
| 5 石製品 茶臼 K-1 SK 4 (第15図1) | 6 石製品 砕石 K-2 SK 3 (第15図2) |
| 7 鉄製品 刀子 N-3 I層 (第15図5) | 8 鉄製品 不明 N-2 SK 2 (第15図6) |
| 9 古銭 N-1 SK 2 (第15図7) | 10 土製品 人形 P-1 I層 (第15図3) |
| 11 土製品 人形 P-2 I層 (第15図4) | |

図版14 松森城跡第2次調査出土遺物2

III 南小泉遺跡第48次発掘調査報告書

1 調査要項

遺 跡 名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区遠見塚1丁目37-6
調 査 期 間	平成18年3月22日～3月23日
調査対象面積	68m ²
調 査 面 積	21m ²
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	調査係長 篠原信彦 文化財教諭 三塚博之・浅野克樹・赤岡光騎

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成18年2月20日付で、斎藤良太氏より、柱状土壤改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成18年3月22日に実施した。建築予定地に3m×7mのトレンチを設定して調査を行なったところ、調査区内から土坑および溝跡などの構造が検出されたため、引き続き本調査を実施した。



番号	遺跡名	種 別	立 連	時 代	番号	遺跡名	種 別	立 連	時 代
1	西小泉遺跡	集落	自然堆积	绳文～古墳	9	御押1号跡	遺跡地	自然堆积	三塚・古代
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堆积	古墳(前頭)	10	御押2号跡	遺跡地	自然堆积	古墳・古代
3	若林遺跡	城壁	自然堆积	近世	11	萬葉遺跡	河面堆积	自然堆积	古代
4	飛塚遺跡	城壁	自然堆积	古代・中世・近世	12	中櫛石造跡	沿石垣	自然堆积	春秋・古墳・古代
5	保原高瀬遺跡	集落	自然堆积	古代・中世・近世	13	芦野遺跡	堆积	自然堆积	中世
6	辻細井古墳	円墳	自然堆积	古墳(後頭)	14	仙台東部帝都跡 条状堆积	被削夷地		古代
7	辻塚古墳	円墳?	自然堆积	古墳(後頭?)	15	印在田遺跡	祭祀地	被削夷地	不明
8	森原古墳	円墳?	自然堆积	古墳(後頭?)	16	印在家宝遺跡	祭祀・墓地	自然堆积	春秋～中世

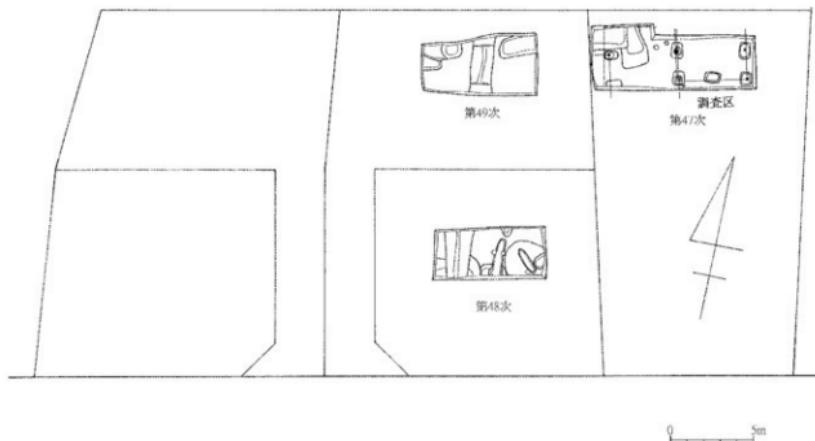
第16図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第17図 調査地点の位置

3 遺跡の位置と環境

仙台市は西部と東部で地形が大きく二分され、西部は奥羽山脈から派生する丘陵ないし段丘地形となっている。東部は、北から七北田川・名取一広瀬川・阿武隈川の3河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がり、河川の流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道からなる複雑な地形を形成している。仙台湾と呼ばれる海岸部には3列の浜堤や潟潮性の低地が認められる。南小泉遺跡は、七北田川と名取一広瀬川に挟まれた沖積平野の発達した自然堤防上に立地している。標高10m前後である。



第18図 南小泉遺跡 第47~49次調査区関係図

南小泉遺跡は、仙台市内でも大きな遺跡のひとつで、東西約2km・南北約1kmの範囲に広がる。これまでの調査では、最古の時期としては縄文時代の遺物包含層が確認されている。その後は、弥生時代前期の土器や、弥生時代中期の土器棺墓が遺跡の東部を中心として発見されている。古墳時代は、前期段階は小規模の集落であったが、中期になると東部を中心に広い範囲に集落が形成される。後期になると集落の範囲は西部に広がることが確認されている。奈良・平安時代の窓穴住跡も広範囲に確認されている。また中・近世の屢歴跡なども存在し、縄文時代以来各時代の遺構・遺物が発見されている。

周辺には遺跡も多く、南小泉遺跡東方約1kmの中在家南遺跡からは、弥生時代中期から古墳時代を中心とする木製品が多量に出土した河川跡や、古墳時代前期の方形周溝墓群などが発見されている。また南小泉遺跡内には、全長110mの前期の前方後円墳である遠見塚古墳がある。西隣接する若林城跡の中では、埴輪を有する古墳が発見されている。北西側には後期の円墳である法顕塚古墳などがある。奈良時代になると、遺跡の北西1kmに陸奥国分寺・国分尼寺が建立される。近世には伊達政宗が晩年の居城とした若林城が造営される。

以上のように、これまでの調査からこの地域は、縄文時代に遺跡が形成され、古墳時代以降は陸奥国の中心地域として栄えていたことがうかがわれる。

4 基本層序

- I a 層 10YR 3/3 暗褐色のシルト層。層厚約20cm。現在の畑耕作土。
- I b 層 10YR 6/4 にぶい黄褐色の山砂層。層厚10~50cm。畑のための盛土層。
- I c 層 10YR 4/6 褐色のシルト層。層厚10~40cm。盛土前の耕作土層。
- I d 層 10YR 4/4 褐色のシルト層。層厚約20cm。調査区東部に分布。
- II 層 10YR 3/4 暗褐色のシルト質粘土層。層厚約30cm。黄褐色土のブロックを霜降状に、炭化物をわずかに含む。土師器片を多く含む。上面で溝跡や土坑が検出された。

III 層 2.5YR 5/4 黄褐色のシルト質砂層。酸化鉄を霜降状に含む。マンガン粒をわずかに含む。地山。上面で古墳時代の土坑が検出された。

5 発見遺構と出土遺物

II層上面で、溝跡2条・土坑2基が検出され、III層上面で土坑3基が検出された。

1) II層検出遺構

①溝跡

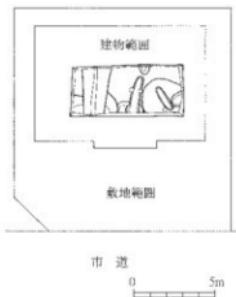
SD 1 溝跡 調査区の西部で、南北方向にのびて検出された。III層のSK 2 土坑を切っている。上面幅は北部で180cm・南部で112cm、底面幅は20cm前後である。検出面からの深さは75cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積上は2層に分けられ、上部は暗褐色の粘土質シルトで炭化物を含んでいる。下部は暗褐色の粘土質シルトで褐灰色土のブロックを含んでいる。遺物は、土師器の壺の口縁部の破片（第22図14）が出土している。

SD 2 溝跡 調査区の中央で、南北方向にのびて検出された。北部では一部が浅くなつて途切れている。上面幅は断面位置で58cm、底面幅は40cm程度である。検出面からの深さは8cmで、断面形は浅い舟底形を呈する。堆積上は、暗褐色のシルト質粘土1層で、黄褐色土のブロックを含む。

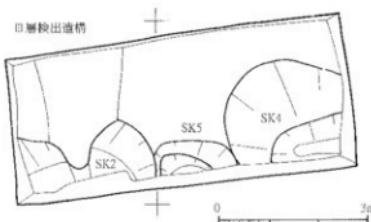
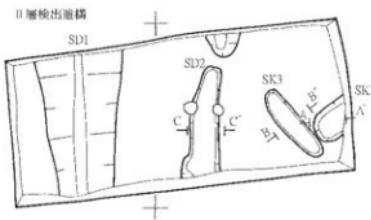
②土坑

SK 1 土坑 調査区南東部で検出された。東部は調査区の外にのびている。検出部は略精円形を呈し残存長軸約90cm、短軸68cmを測る。深さは約10cmで、底面に凹凸があり、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積上は、にぶい黄褐色土を黒褐色のシルト質粘土1層である。出土遺物はない。

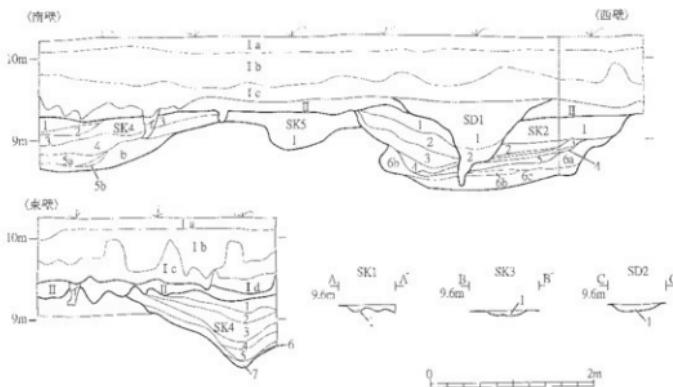
SK 3 土坑 調査区南東部で検出された。平面形は北西から南東方向に長軸を有する長精円形を呈し、長軸170cm・短軸46cmを測る。深さは7cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積上は、黄褐色土の小ブロックを少量含む暗褐色の粘土質シルト1層で、土師器の小片を含んでいる。



第19図 調査区配置図



第20図 遺構配置図



基本層

	上色	土性	備考
I a	IGYR34 黄褐色	シルト	鉛作土
I b	IGYR34 黒褐色	粘土	
I c	IGYR46 黄褐色	シルト	鉛作土土
I d	IGYR46 黑褐色	シルト	
II	IGYR34 黄褐色	シルト四枚土	表面のブロックを多く含む。堆積物を含む。
生	2.5YS4 黑褐色	シルト粘土	鉛作土を含む。

SD 1

	上色	土性	備考
1	10Y33/4 黄褐色	粘土質シルト	鉛作土をばらに含む。
2	10Y33/2 黑褐色	粘土質シルト	下部に黒褐色土のブロックを含む。

SD 2

	上色	土性	備考
1	0Y33/4 黑褐色	シルト質粘土	鉛作土のブロックを含む。

SK 1

	上色	土性	備考
1	IGYR32 黑褐色	シルト質粘土	にぼい黒褐色土を混じる。

SK 2

	上色	土性	備考
1	10Y33/3 黄褐色	粘土質シルト	土塊部分を多く含む。鉛作土を含む。
2	10Y33/2 黑褐色	粘土	鉛作土を含む。土塊部分を多く含む。
3	10Y42 黄褐色	シルト質シルト	鉛作土を含む。土塊部分を多く含む。
4	10Y42 黑褐色	粘土質シルト	鉛作土を含む。土塊部分を多く含む。
5	10Y52 黑褐色	シルト質粘土	鉛作土を含む。
6a	10Y60 黑褐色	粘土	鉛作土を含む。
6b	10Y52 黑褐色	粘土	鉛作土を含む。
6c	10Y60 黑褐色	シルト	鉛作土を含む。

SK 3

	上色	土性	備考
1	10Y23/4 黄褐色	粘土質シルト	土塊部分を含む。鉛作土のトロツクを含む。

SK 4

	上色	土性	備考
1	2.5YS2 黄褐色	シルト質砂	土塊部分を多く含む。鉛作土を含む。
2	2.5Y4/2 黑褐色	シルト質砂	鉛作土を含む。
3	2.5Y4/2 黑褐色	シルト質砂	土塊部分を多く含む。鉛作土を含む。
4	10Y3/3 黑褐色	シルト質砂	鉛作土を含む。土塊部分を含む。
5	10Y4/2 黑褐色	シルト質粘土	土塊部分を多く含む。
6	10Y6/2 黑褐色	シルト質粘土	鉛作土を含む。
7	10Y5/2 黑褐色	シルト質粘土	鉛作土を含む。

SK 5

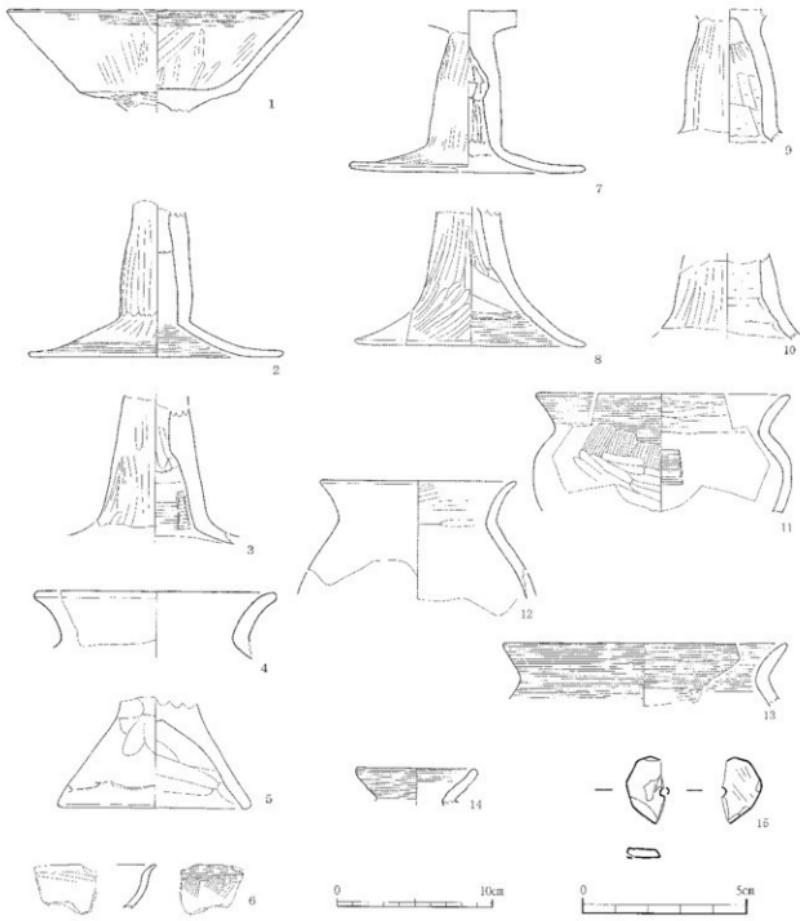
	上色	土性	備考
1	10Y5/2 黑褐色	粘土質シルト	鉛作土を含む。鉛作土のトロツクを含む。

第21図 調査区・遺構断面図

2) III層検出遺構

S K 2 土坑 調査区南西角付近で検出された。西と南側は調査区の外にのびており、検出部は全体の1/4程度である。S K 5 土坑を切る。検出部から平面形は円形ないし梢円形を呈するものと推定される。検出部東西約360cm、南北約130cmを測る。検出部からの深さは約85cmで、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は8層に分けられる。上部が暗褐色の粘土質シルトで、下部は灰黃褐色土が数層に分かれる状態で堆積している。2層中から多数の土師器片が出土している。出土土師器には、高環杯脚部(第22図1)・高環脚部片(2・3)・甕口縁部片(4)・合付甕脚部片(5)がある。器形及び調整は、いずれも南小泉式の範疇で理解されるもので、古墳時代中期に位置付けられる。

S K 4 土坑 調査区東南角付近で検出された。東と南側は調査区の外にのびている。検出部から平面形は円形ないし梢円形を呈するものと推定される。検出部東西約240cm、南北約210cmを測る。検出部からの深さは約51cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は7層に分けられる。堆積土上部から土師器片が多く出土している。出土土師器



第22図 出土物

器種 西村 番号	出 土 地 点	分 類	規 格	基 高 及 び 幅 寸 数	基 底 形 状	基 本 形 状	基 本 形 状
1 C-1	SH2	No.2	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
2 C-2	SH2	No.14	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
3 C-3	SH2	No.17	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
4 C-5	SH2	No.22	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
5 C-4	SH2	No.11	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
6 C-6	SH4	No.18	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
7 C-7	SH4	No.13	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
8 C-8	SH4	No.24	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
9 C-9	SH4	No.28	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
10 C-10	SH4	No.20	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
11 C-12	SH4	No.18	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
12 C-13	SH4	No.20	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
13 C-14	SH2	No.2	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
14 C-15	SH2	No.3	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口
15 C-16	SH4	No.3	高さ2.5cm	高さ2.5cm	直口	直口	直口

には、坪片（第22図6）・高环脚部片（7～10）・甕片（11～13）・石製模造品（15）がある。これらの土師器も南小泉式に位置付けられ、古墳時代中期と考えられる。

S K 5 土坑 調査区中央の南壁際で検出された。両側は調査区の外にのびている。平面形は円形ないし稍円形を呈し、検出部の東西軸162cm・南北軸69cmを測る。深さは45cmで、断面形は舟底形を呈す。堆積土は、黄褐色土のブロックや炭化物粒を含む灰黄褐色の粘土質シルト1層である。

6 まとめ

- ① II層上面とIII層上面の2層で造構が検出された。
- ② II層上面では溝跡2条と土坑2基が検出された。
- ③ II層検出のSD 1溝跡は、第49次調査区で検出されたSD 1溝跡つながることが、方向・規模・堆積土の状況から考えられる。この溝跡については、第47次調査区で検出された平安時代の掘立柱建物跡群の西側を区画する施設の可能性が考えられる。
- ④ III層では3基の土坑が検出され、SK 2・4土坑中から古墳時代中期の土師器がまとまって出土し、周辺にこの時期の集落が存在した可能性が考えられる。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（2006）：「XIV南小泉遺跡第47次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第301集



1 2層上面検出状況（南西から）



2 SD 1溝跡（南から）



3 SD 1溝跡土層断面（南から）



4 SD 2溝跡（南から）



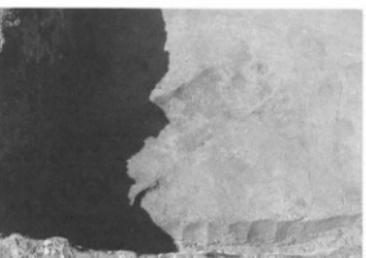
5 SK 1土坑断面（南から）



6 SK 1土坑全景（北から）



7 SK 3土坑断面（南から）



8 SK 3土坑全景（東から）

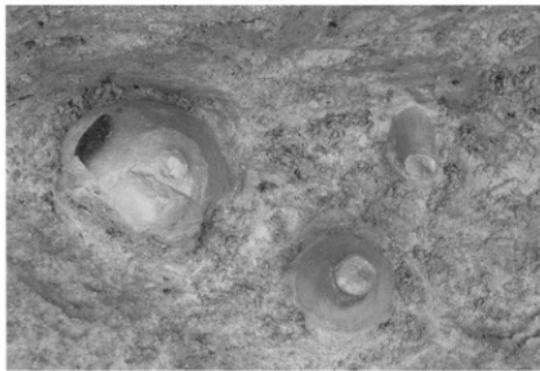
図版15 溝跡とSK 1・3土坑



1 SK 2 土坑断面
(北から)



2 SK 2 土坑全景
(北から)

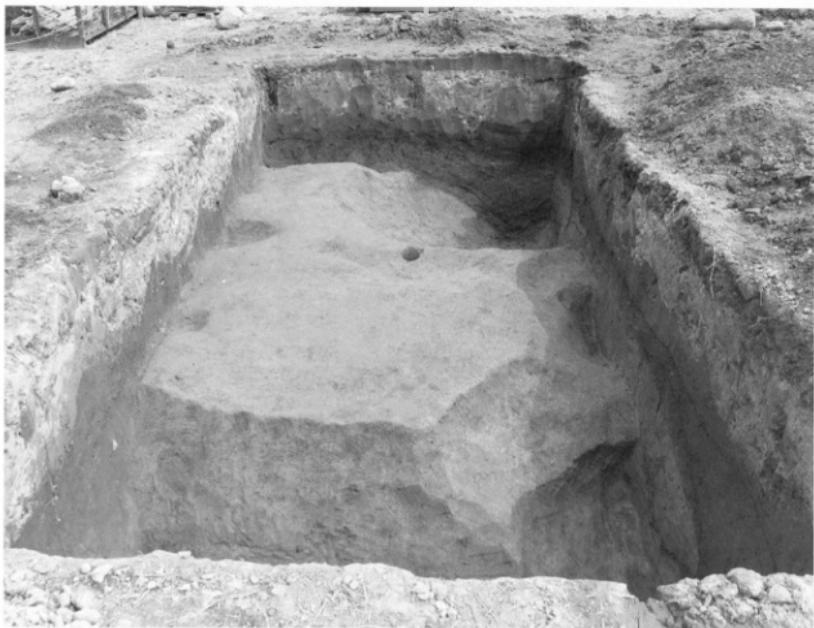


3 SK 2 土坑遺物出土状況
(北から)

図版16 SK 2 土坑と遺物出土状況



1 SK 4 土坑
(西北から)



2 調査区完掘全景 (西から)

図版17 SK 4 土坑と調査区全景



- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1 土師器 高杯 C-1 SK 2 (第22圖1) | 2 土師器 高杯 C-2 SK 2 (第22圖2) |
| 3 土師器 高杯 C-7 SK 4 (第22圖7) | 4 土師器 高杯 C-8 SK 4 (第22圖8) |
| 5 土師器 瓢 C-12 SK 4 (第22圖11) | 6 土師器 瓢 C-13 SK 4 (第22圖12) |
| 7 土師器 台付甕 C-4 SK 2 (第22圖5) | 8 石製模造品 円盤 K-1 SK 4 (第22圖15) |

圖版18 南小泉遺跡第48次調查出土遺物

IV 南小泉遺跡第49次発掘調査報告書

1 調査要項

遺 跡 名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区遠見塚1丁目37-5
調 査 期 間	平成18年4月12日～4月13日
調査対象面積	62m ²
調 査 面 積	21m ²
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査 工藤哲司 主任 長島栄一 文化財教諭 早川潤一、藤田雄介

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成18年3月22日付けで、佐々木勝彦氏より、柱状土壤改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘局が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成18年4月12日に実施した。建築予定地に3m×7mのトレンチを設定して調査を行なったところ、調査区内から溝跡や土坑が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

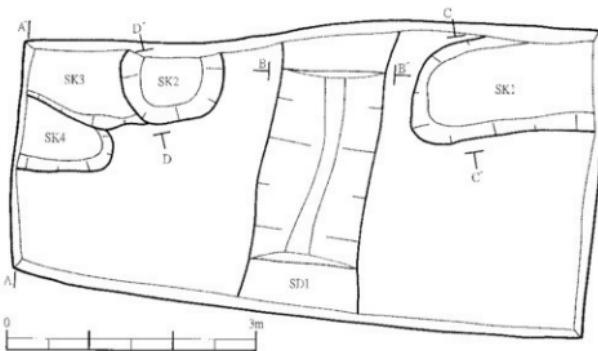
南小泉遺跡の位置と環境は、本書の『南小泉遺跡第48次調査報告書』を参照されたい。調査地点は第48次調査区の北側に当る。

4 基本層序

- I a層 10YR 4/3にぶい黄褐色のシルト質粘土層。層厚約20cm。
現在の耕作土。
- I b層 2.5Y 7/6 明黄橙色の山砂層。層厚約50cm。畑のための盛土層。
- I c1層 10YR 4/4 黒褐色のシルト質粘土層。層厚10～40cm。盛土前の耕作土層。
- I c2層 10YR 4/1 黒灰色のシルト質粘土層。層厚10cm。黒色土を多く含む。
- I c3層 10YR 6/4 にぶい黄橙色のシルト質粘土層。層厚約10cm。黒色土を少量含む。
- II 層 10YR 6/6 明黄褐色の粘土層。遺構検出面。上面で古代・古墳時代の遺構が検出された。



第23図 調査区配置図



第24図 遺構配置図

5 発見遺構と出土遺物

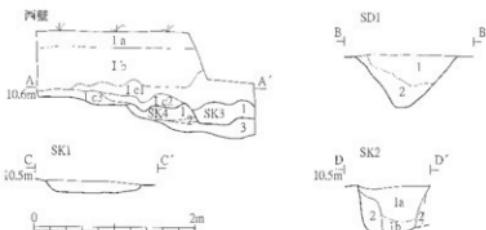
II層上面で、溝跡1条・土坑4基が検出された。

1) 溝跡

SD1溝跡 調査区の中央で、南北方向にのみ検出された。重複はない。上面幅は130cm前後、底面幅は20cm前後である。検出面からの深さは65cmで、断面形はV字に近い逆台形を呈する。堆積土は2層に分かれ、上部は暗褐色のシルト質粘土で部分的に黄褐色土及びにぶい黄褐色土を斑状に含んでいる。下部は暗褐色のシルト質粘土で黄褐色土のブロックを多量に含んでいる。南方にのみ第4次調査のSD1溝跡につながると推定される。

2) 土坑

SK1土坑 調査区北東部で検出された。東部は調査区の外にのみいる。検出部は略椭円形を呈し検出部の東西長軸約220cm、



基本層

層No.	上色	土性	参考
1	G7YB03 にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰土、現耕中土
1	2.5Y2/5 暗褐色	山野	
1	10Y3/4A 暗色	シルト質粘土	耕作土
1	10Y3/4U 黄褐色	シルト質粘土	粘土を多く含む。
1	10Y3/4A にぶい黄褐色	粘土	灰土を少量含む。
1	10Y5/6E 明洪褐色	粘土	

SD1

層No.	上色	土性	参考
1	10Y3/3A 暗褐色	シルト質粘土	部分的に黄褐色土を斑状に含む。
2	10Y3/4 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを多量に含む。

SK1

層No.	上色	土性	参考
1	10Y3/3A 暗褐色	シルト質粘土	云母土上のブロックを含む。

SK2

層No.	上色	土性	参考
1a	10Y3/3A 暗褐色	泥炭シルト	泥炭化現象・上部腐片を多量に含む。
1b	10Y3/3A にぶい黄褐色	シルト	泥炭化現象・土器灰・にぶい黄褐色土のブロックを含む。
2	10Y3/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	上部腐片をわずかに含む。

SK3

層No.	上色	土性	参考
1	10Y3/2F 黄褐色	粘土	土器灰片を含む。

SK4

層No.	上色	土性	参考
1	10Y5/01 にぶい黄褐色	粘土	灰土や赤土状に少量含む。
2	10Y5/01 黄褐色	粘土	にぶい黄褐色土ととの接觸部、灰土を多量に含む。
3	10Y5/01 にぶい黄褐色	粘土	マンガニ酸・鐵化物を少量含む。

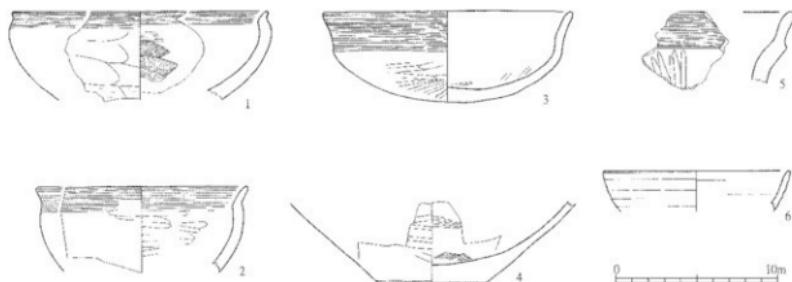
第25図 調査区・遺構断面図

南北短軸118cmを測る。深さは14cmで、断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は、褐色土粒を含む暗褐色のシルト質粘土1層である。短い口縁部がS字状に屈曲する丸底の土師器の坏片（第26図1）と須恵器の坏片（第26図6）が出土している。

S K 2 土坑 調査区北西隅で検出された。北側は調査区の外にのびている。平面形は円形を呈すると推定され、検出部で東西軸120cm・南北軸80cm以上を測る。深さは58cmで、断面形はU字形を呈す。堆積土は、上部が土師器片を多量に含む暗褐色土の粘土質シルトで、下部はにぶい黄褐色のシルトないしにぶい黄橙色の砂質シルトである。出土土師器には坏2点（第26図2・3）と窓の底部片（4）が出土している。

S K 3 土坑 調査区北西隅で検出された。北側及び西側は調査区の外にのびている。S K 4 土坑を切り、S K 2 上坑に切られている。S K 2 上坑に切られているために平面形は不明である。検出部で東西150cm・南北90cm以上を測る。深さは58cmで、断面形はU字形を呈す。堆積土は、灰白色の粘土質シルトで、土師器片を含んでいる。出土土師器には窓の口縁部の破片（第26図5）がある。

S K 4 土坑 調査区西壁際で検出された。西部は調査区の外にのびている。北部をS K 3 土坑に切られている。検出部は略楕円形を呈し検出部の東西長軸約110cm・南北短軸89cmを測る。深さは34cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は、上部がにぶい黄褐色の粘土、下部がにぶい黄褐色の粘土層で、その中間に黒褐色の粘土を挟んでいる。



調査 区分	契跡 番号	出 土 地 点	分 類	法 則	記 述	特 徴 ・ 性 考		写真図版
						鉛灰・青 銅・鐵・鐵 錆・鐵錆	口辺・縁 部・脚・身 部・足	
1 C-1	SK1	1層	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器 (G.4) (15.3)	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	19-2
2 C-2	SK2	1層	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器 (G.0) (13.2)	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	19-3
3 C-3	SK2	1層	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器 (5.7) 15.5	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	19-4
4 C-4	SK2	1層	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器 (G.0)	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	19-4
5 C-5	SK3	1層	No.1	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器 (G.8)	井戸口コト脚器	井戸口コト脚器	19-5
6 D-1	SK3	1層	窓	窓	窓 (G.3) (11.0)	窓	窓	19-6

第26図 出土遺物

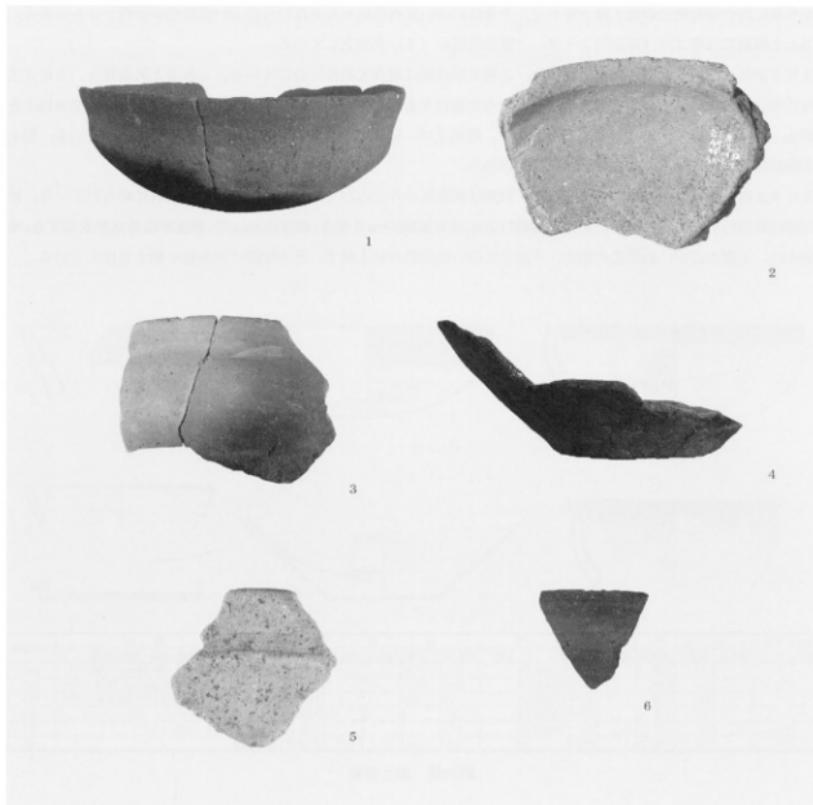
6まとめ

- ① II層上面で溝跡1条と土坑4基が検出された。
- ② II層検出のSD1溝跡は、第48次調査区で検出されたSD1溝跡つながること推定され、第47次調査検出の平安時代の掘立柱建物跡群の西側を区画する施設の可能性を考えられる。
- ③ SK1土坑は、規模と方向から、第47次調査区検出のSK1土坑につながる可能性を考えられる。この場合、土坑の延長は約7.9mとなる。
- ④ 固化したSK1・2土坑から出土した土師器については、古墳時代中期のものと考えられるが、詳細な時期

は不明である。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会 (2006) : 「X IV南小泉遺跡第47次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第301集



1 土師器 杯 C-3 SK2 1層 (第26図3)
2 土師器 杯 C-1 SK1 1層 (第26図1)
3 土師器 杯 C-2 SK2 1層 (第26図2)
4 土師器 裏 C-4 SK2 1層 (第26図4)
5 土師器 基 C-5 SK3 1層 (第26図5)
6 須恵器 基 E-1 SK1 1層 (第26図6)

図版19 南小泉遺跡第49次調査出土遺物



1 遺構検出状況（東から）



2 遺構検出状況（西から）



3 SD 1溝跡（北西から）



4 SD 1溝跡土層断面（南から）



5 SK 1土坑（東から）



6 SK 1土坑土層断面（西から）



7 SK 2土坑（北から）



8 SK 2土坑土層断面（東から）

図版20 遺構検出状況・溝跡・土坑



1 SK 3・4 土坑
(南から)



2 SK 3・4 土坑土層断面
(東から)



3 調査区完掘全景 (西から)

図版21 土坑・完掘写真

V 南小泉遺跡第50次発掘調査報告書

1 調査要項

遺 跡 名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区一本杉町26-1
調 査 期 間	平成18年6月19日～6月22日
調査対象面積	166m ²
調 査 面 積	64m ²
調 査 原 因	診療所建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査 T.藤哲司 文化財教諭 早川潤一 藤田雄介

2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成18年5月18日付で、地権者渡邊龍彦氏、渡邊好子氏より、深さ3.5mの柱状土壤改良を伴う2階建ての診療所の建築工事に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成18年6月1日に実施した。建物建築予定地の北側部分に南北2.5m×東西12m、南側部分に南北2.5m×東西18mの調査区を設定して調査を行なったところ、調査区内から遺構が検出され、本調査が必要と判断されたため遺構の掘り込みは行わず、記録後に調査区内にシートをかけて埋め戻し、確認調査を終了した。

この確認調査の結果を受けて、建物建築予定地に南北6.5m×東西10mの調査区を設定して本調査を実施した。重機により表土およびⅠ層を除去し、Ⅱ層および一部Ⅲ層で個別の遺構調査を行った。その後、北壁際部分および東壁際部分を約1mの幅で、また、調査区中央部分を南北約2m×東西約4mで深掘りし、Ⅱ層の堆積状況とⅢ層の下層（Ⅲ層上面）の遺構の有無を確認した。

なお、本件に関わる敷地については、平成13年にマンション建設に伴う確認調査と本調査（第37次調査）が行われている。

3 遺跡の位置と環境

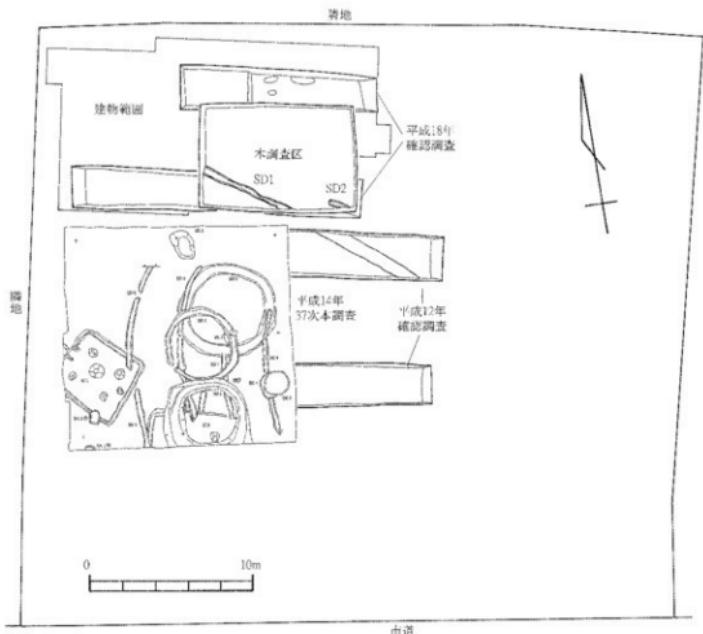
遺跡の環境については第48次発掘調査報告書を参照にされたい。

今回の調査区は遺跡の北西側に位置し、第37次調査の北側に隣接している。第37次調査では奈良時代のものと考えられる住居跡、近世初頭以前の溝跡、時期不明の円形周溝遺構、土坑等が検出されている。

4 基本層序

調査地点は40cm前後の盛土がある。その下のⅠ層は近年の畑の耕作土である。Ⅰ層は、Ⅰ下2層に分けられる。上部は層厚約30cmの灰黄褐色粘土質シルト層（Ⅰa層）である。下部は層厚5～15cmの暗褐色粘土質シルト層（Ⅰb層）である。調査区の北東部分の一部では、Ⅰ層が見られず盛土が約1mある。

Ⅱ層は調査区の東側約2／3のⅢ層が低くなった部分に分布している。Ⅱ層は、4層に分けられ、Ⅱa層は層厚5～20cmの褐色粘土質シルト層、Ⅱb層は層厚5～15cmのにぶい黄褐色砂層、Ⅱc層は層厚5～20cmの灰褐色粘土層、



第27図 調査区配置図

II d 層は層厚10~20cmの暗褐色粘土層である。調査区西側は I 層直下が III 層となる。II 層中には上帥器の小片が多く含まれており、遺物の出土状況などから 2 次的な遺物包含層と判断される。II 層出土上帥器は後述のとおり器形の特徴から塙釜式に相当すると考えられることから、この層については古墳時代前期頃に堆積したものと考えられる。

III 層は黄褐色粘土層で、いわゆる地山を形成しており、第37次調査ではこの層の上面で奈良時代以降の遺構が検出されている。

5 発見構構と出土遺物

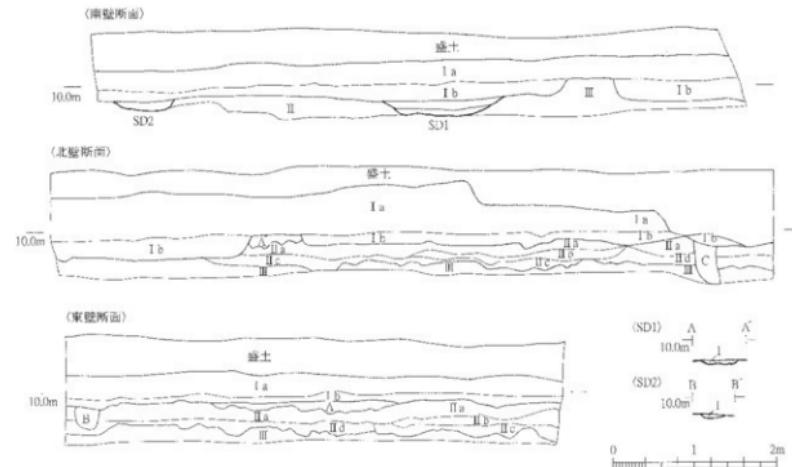
II 層上面から III 層上面を掘り込んで、溝跡 2 条が検出された。

1) 溝跡

SD 1 溝跡 調査区の南壁中央付近から西壁中央付近へ調査区を斜めに横切って検出された。南東方向側・北西方側ともに調査区外に延びている。上端幅30~60cm、下端幅20~50cm、検出面からの深さは3~8cmを測る。断面形は浅い逆台形である。堆積土は、にぶい褐色の粘土質シルトで、褐色粘土質シルトを粒状に少量含み、層底面に酸化鉄が集積している。出土遺物が無いため時期は不明である。平成13年3月の確認調査で検出された溝跡の延長

にあたると考えられる。

S D 2 溝跡 調査区南壁の東端付近から北西方向に検出された。遺構の南部は、調査区外に延びているため正確な形状・規模は不明である。上端幅約30cm、下端幅10~25cm、検出面からの深さ約5cmを測る。断面形は浅い逆台形である。堆積土は、にぶい黄褐色の粘土質シルトで、褐色シルトを斑状に多量に含む。出土遺物が無いため時期は不明である。



調査区南壁

編号	I. 色	土 特	備考
I-a	10Y34/2 黄褐色	粘土質シルト	褐色シルト層下部を帶下部に複数に含む。最近の耕作土。
I-b	10Y34/6 塗ぬれ土	シルト質粘土	褐色シルト層上部を粘土質粘土層に少量に含む。歴史的耕作土。
II	10Y34/6 黄褐色	粘土質シルト	褐色色シルト層下部の耕作の痕と付かれらものを含んでいた。土和田層出土。
III	7.5YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	褐色色シルト層の耕作の痕と付かれらものを含んでいた。土和田層出土。

調査区北壁

編号	I. 色	土 特	備考
I-a	10Y34/2 黄褐色	粘土質シルト	根立が有り、炭化物を粒状に少量含む。未段一帯に埋没あり。最近の耕作土。
I-b	10Y34/6 塗ぬれ土	粘土質シルト	炭化物を粒状に埋没しにぎむ。耕作土。
II-a	10Y34/6 黄褐色	粘土質シルト	褐色色シルト層を耕作に多量に含む。炭化物を埋没しにぎむ。
II-b	6YR7/6 にぶい黄褐色	砂	褐色色シルト層上のブリッカを埋没しにぎむ。上層片を含む。
II-c	7.5YR4/2 黄褐色	粘土	炭化物を多量に含む。褐色色シルト層に埋没しにぎむ。グラウジ化が見られる。上層片を含む。
III	6YR7/6 黄褐色	砂土	褐色色シルト層にうつり現れ。下層片を含む。
IV-a	GYR4/1 にぶい黄褐色	粘土	IV-aが下に付けて現れ。褐色色シルト層に埋没しにぎむ。
IV-b	GYR4/1 にぶい黄褐色	粘土質シルト	下層部に褐色色シルト層を含む。
C	10Y34/6 黄褐色	粘土質シルト	灰質褐色粘土層を含む。地下部に褐色色を含む。下層部を含む。

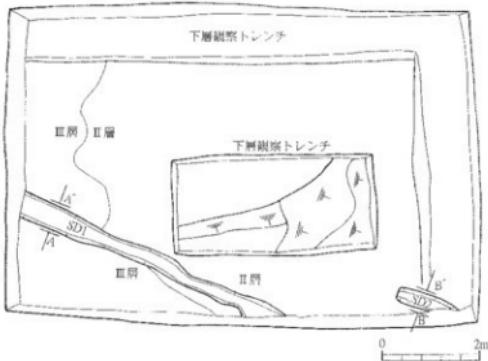
調査区東壁

編号	I. 色	土 特	備考
I-a	10Y34/2 黄褐色	粘土質シルト	細粒漂砾あり。炭化物を粒状に少量含む。ブクスティック層を含む。最近の耕作土。
I-b	10Y34/6 塗ぬれ土	粘土質シルト	炭化物を粒状に埋没しにぎむ。耕作土。
II-a	10Y34/6 黄褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状に埋没しにぎむ。物性熱を含む。二结合起来。
II-b	10Y34/5 にぶい黄褐色	砂	細粒漂砾シルトのブリッカを埋没しにぎむ。上層片を含む。
II-c	10Y34/5 にぶい黄褐色	砂土	炭化物を粒状に埋没しにぎむ。物性熱を含む。上層片を含む。
III-d	GYR4/1 にぶい黄褐色	粘土	炭化物を粒状に埋没しにぎむ。褐色色シルト層に少量含む。グラウジ化が見られる。
IV-a	GYR4/1 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状に埋没しにぎむ。褐色色シルト層を含む。
C	10Y34/6 黄褐色	粘土質シルト	灰質褐色粘土層を含む。地下部に褐色色を含む。下層部を含む。

SD1

編号	I. 色	土 特	備考
1	7.5YR5/1 にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐色色シルトを炭化物に少量含む。

第28図 調査区・遺構断面図

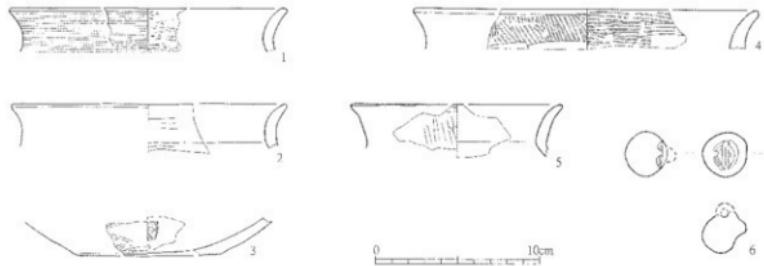


第29図 遺構配置図

2) 出土遺物

II層中から土師器小片等がコンテナ(32)1/4程度出土した。なお、II層からはIIb層を主体に、層全体から散在的に遺物が出土した。この遺物の出土状況からII層は2次的な遺物包含層と判断される。II層出土の遺物の中から、非クロコ土師器實片4点(第30図1,2,4,5)と非クロコ上師器壹片1点(第30図3)、土製品1点(第30図6)を実測した。

II層出土土師器は、比較的薄手で口縁部が短く外傾しない外反し、内面の体部と口縁部との境に後の形成されるものも認められる。調整はヘラミガキを基調とし、ハケメ・ヘラナデ・ヨコナデ調整も見られる。ハケメ調整は、口が纏かく鋭利な工具によってなされている。底部は台が未完成で平坦な底面から体部がゆるやかに立ち上がっていいる。これらの器形や調整の特徴から塙釜式に相当すると考えられる。したがって、この層については古墳時代前



器 種 名 番 号	出 土 地 点	分 類	主 要 部 分	特 徴		参考文	
				直 径	厚 さ		
1 C-1	II層	直柄型	直上柄	直面 直面 直面 直面 直面 直面	(2.6) (3.0) (3.0) (2.4) (2.2) (2.7)	内面：白漆・輪・直面 外面：直面・輪・直面 内面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ハケメ後ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	25
2 C-2	II層	直柄型	直上柄	直面 直面 直面 直面 直面 直面	(3.0) (3.0) (3.0) (2.4) (2.2) (2.7)	内面：ハケメ後ヨコナデ 内面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	25-2
3 C-3	II層	直柄型	直上柄	直面 直面 直面 直面 直面 直面	(2.4) (2.4) (2.4) (2.4) (2.4) (2.4)	内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	25-3
4 C-4	II層	直柄型	直上柄	直面 直面 直面 直面 直面 直面	(2.2) (2.2) (2.2) (2.2) (2.2) (2.2)	内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	25-4
5 C-5	II層	直柄型	直上柄	直面 直面 直面 直面 直面 直面	(2.9) (2.9) (2.9) (2.9) (2.9) (2.9)	内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	25-5
6 F-1	II層	直柄型	直上柄	直面 直面 直面 直面 直面 直面	(2.7) (2.7) (2.7) (2.7) (2.7) (2.7)	内面：白漆 内面：白漆 内面：白漆 内面：白漆 内面：白漆 内面：白漆	25-6

第30図 出土遺物

期墳に堆積したものと考えられる。

上製品は、分銅状の土錐と考えられるものである。球形の本体に半環状の紐がつくと推定されるが、紐の部分は欠損している。

6まとめ

- ① 今回の調査では、溝跡2条（SD1・SD2）が検出された。
- ② SD1溝跡は、時期を決定する資料等は出土していないが、検出状況から古墳時代前期以降と考えられる。詳細は不明である。
- ③ SD2溝跡は、時期を決定する資料等が出土していないが、検出状況から古墳時代前期以降と考えられる。詳細は不明である。
- ④ 调査区の東側部分に分布するII層中からは、2次的に堆積したと考えられる古墳時代前墳の土師器片が出土している。

＜参考文献＞

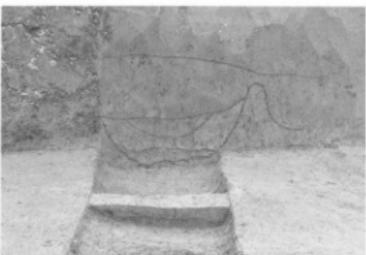
仙台市教育委員会（2003）：「南小泉遺跡第37次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第206集

仙台市教育委員会（2005）：「南小泉遺跡第42次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第237集

仙台市教育委員会（2006）：「南小泉遺跡第44次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第301集



1 遺構検出状況（西から）



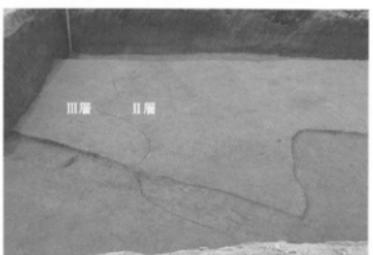
2 SD 1溝跡土層断面（東から）



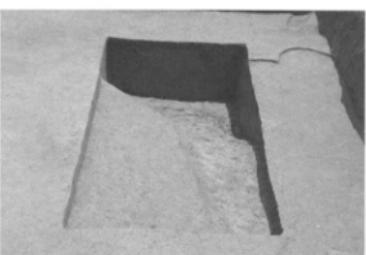
3 SD 2溝跡土層断面（南東から）



4 SD 1, SD 2溝跡完掘状況（北西から）



5 調査区西側部分II層堆積状況（南から）



6 調査区中央深掘り状況（西から）

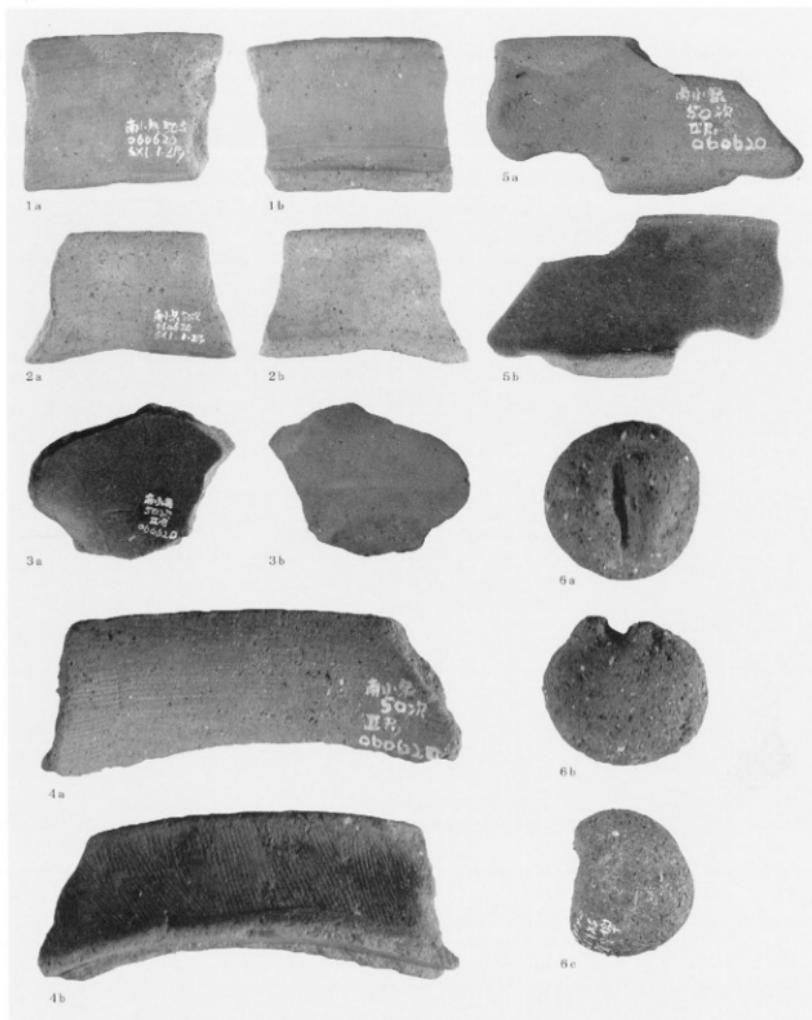


7 調査区中央深掘り東壁断面（西から）



8 調査区完掘全景（西から）

図版22 遺構調査・完掘状況



1 土師器 壺 C-1 II層 (第30図1)	2 土師器 壺 C-2 II層 (第30図2)
3 土師器 壺? C-3 II層 (第30図3)	4 土師器 壺 C-4 II層 (第30図4)
5 土師器 壺 C-5 II層 (第30図5)	6 土製品 土鍤 P-1 II層 (第30図6)

図版23 南小泉遺跡第50次調査出土遺物

VI 南小泉遺跡第51次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺 跡 名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区一本杉町21-4
調 査 期 間	平成18年9月19日～9月20日
調査対象面積	80m ²
調 査 面 積	30m ²
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主任 長島栄一 文化財教諭 今野秀治

2. 調査に至る経過と調査方法

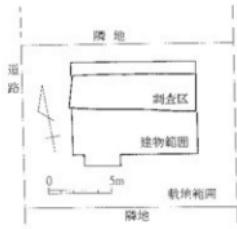
今回の調査は、平成18年8月15日付けで、地権者佐藤孝光氏より、湿式柱状改良の基礎工法による住宅建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。平成18年9月19日に建物部分を対象に3m×10mのトレンチを設定して確認調査を行なったところ、柱列と小溝状造構群、上坑などが検出されたので、引き続き本調査を実施した。

3. 遺跡の位置と環境

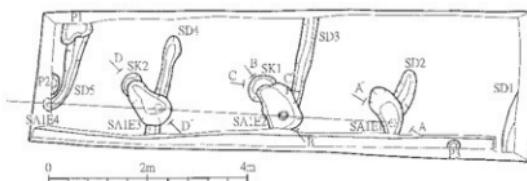
遺跡の位置と環境は、Ⅲ南小泉遺跡第48次発掘調査報告の記載のとおりである。今回の調査地点は、南小泉遺跡の北西部にあたり、標高は約12mである。

4. 基本層序

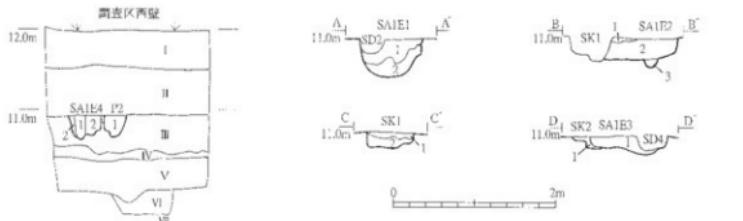
調査区で確認した基本層は、I層からVII層まで大別7層である。I層は厚さ約50cmの盛土である。II層は厚さ約60cmの明黄褐色の粘土質シルト層で、旧畑耕作土である。III層は厚さ約20～30cmの灰黄褐色の粘土層で、本調査における造構検出面である。IV層は厚さ約10cmの灰黄褐色の粘土層である。V層は厚さ約40cmの黒褐色の粘土層で、周辺調査においては縄文土器が出土している。VI層は厚さ約30cmのにぶい黄褐色の粘土層である。VII層は様層である。



第31図 調査区配置図



第32図 調査区平面図



基本層序

部位	上色	下色	備考
I 岩	砂岩		
Ⅱ			
Ⅲ	SAIE4 P2	SD1	特徴やや有り。しまり無し。 山地は作土。下部は大塊。
Ⅳ	2	1	
Ⅴ	1		
Ⅵ			
Ⅶ			

SAIE1

部位	上色	下色	備考
1	10YR5/2 深褐色	鈍土質シルト	特徴やや有り。しまり無し。
2	10YR5/6 明褐色	シルト質粘土	特徴無し。しまり有り。
3	10YR5/2 深褐色	粘土	特徴有り。しまり有り。
4	10YR3/1 黒褐色	粘土	特徴无し。しまり無し。
5	10YR4/1 にがい黒褐色	粘土	特徴有り。しまり有り。
6	6		

SAIE2

部位	上色	下色	備考
1	10YR5/2 深褐色	鈍土質シルト	特徴やや有り。しまり有り。
2	10YR5/6 にがい黒褐色	シルト質粘土	特徴有り。しまり有り。

第33図 調査区・遺構断面図

5. 発見構造と出土遺物

III層上面で、柱列1列、溝跡（小溝状遺構群）5条、土坑2基、ピット3基が検出された。

1) 柱列

S A 1 柱列 【位置・重複】調査区南部で4個の柱穴が検出された。柱列は調査区の西側にのびる可能性もある。なお4個の柱穴は東側からそれぞれE1、E2、E3、E4とした。E1はSD2溝跡に、E2はSD3溝跡とSK1土坑にそれぞれ切られており、E3はSD4溝跡に切られSK2土坑を切っている。E4に関しては調査区西壁の断面において確認したのみである。【規模・配置・方向】規模は東西3間、約700cm、柱間寸法は220cm・260cm・220cmである。方向はN-77°Wである。【柱穴・柱痕跡】E1～E3に関しては、柱穴は掘り方か460cm×100cm程の不整形であり、深さは23～46cmである。柱は抜き取られている。E4に関しては、調査区西壁での確認であり掘り方の平面形は不明であるが、上端幅約40cm・下端幅約25cm・深さ約46cmである。約12cm幅の柱痕跡が確認された。【堆積土】堆積土は、黄褐色や黒褐色などの粘土を基調としている。柱痕跡の下部に白色粘土や酸化鉄を含む柱穴も見られる。【出土遺物】E1の堆積土中から土師器片が1点出土している。

2) 小溝状遺構群（SD 1～5）

調査区を南北方向に縦断するよう200～260cm間隔で検出された。検出面での幅は25～35cmであり、深さは5～15cmである。SD2溝跡はSA1柱穴列E1を、SD3溝跡はSA1柱穴列E2を、SD4溝跡はSA1柱穴列E3を、SD5溝跡はP1をそれぞれ切っている。出土遺物はない。

SAIE3

部位	上色	下色	備考
1	2.5Y3/2 黑褐色	粘土	特徴有り。しまり有り。堆積土を多量に含む。

SAIE4

部位	上色	下色	備考
1	10YR5/5 にがい黒褐色	粘土	特徴有り。しまり有り。底下部に白色粘土や酸化鉄を含む。
2	10YR4/1 にがい黒褐色	シルト質粘土	特徴有り。しまり有り。底穴盛り。

SK1

部位	上色	下色	備考
1	2.5Y3/2 黑褐色	粘土	特徴有り。しまり有り。堆積土を多量に含む。
2	2.5Y8/2 灰褐色		粘土質シルト P2.5Y4/6-7.5Y4/7.5Y5/1-2.5Y6/2-3.5Y6/3

SK2

部位	上色	下色	備考
1	10Y3/2 黑褐色	シルト質粘土	堆積土より多く、酸化鉄を含む。

P 2

部位	上色	下色	備考
1	10Y3/1 黑褐色	粘土	特徴有り。しまり有り。偏白色シルト質粘土をブロック状に含む。

3) 土坑

S K 1 土坑 調査区のほぼ中央で検出された。SA 1 柱穴列E 2 を切っており、1辺が約50cmの隅丸方形を呈する。深さは約20cmで、断面形はおおむね扁平なU字形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は2層に分けられ、1層は酸化鉄を多量に含んでいる。出土遺物はない。

S K 2 土坑 調査区の中央西寄りで検出された。SA 1 柱穴列E 3 に切られているため、正確な規模は不明であるが、直径約50cmの円形を呈するものと思われる。深さは約16cmで、断面形は不明である。堆積土は1層である。出土遺物はない。

4) ピット

P 1 ~ 3まで検出した。平面形は円形を基調とするが、P 1 は不整形である。大きさは直径25~50cmで、検出面からの深さは10~20cmである。柱痕跡を検出できたものはない。遺物は出土していない。

6. まとめ

- ① 本調査区は、南小泉遺跡の北西部に位置する。
- ② 柱列1列と小溝状遺構群、土坑2基などの遺構が検出された。
- ③ 柱列および小溝状遺構群に関して、時期を決定できる資料はないが、周辺部での調査において占墳時代から平安時代の建物跡や小溝状遺構群が検出されていることから、この年代の遺構と推定される。柱列に関しては建物跡の一部となる可能性も考えられ、今後、周辺での調査の際に検討していく必要があると思われる。
- ④ 2基の土坑は、建物の造り替えなど柱列に関わる遺構となる可能性も考えられる。



1 遺構検出状況（東から）



2 完掘全景（東から）

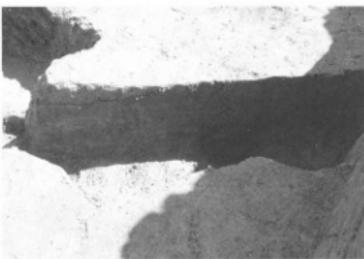


3 調査区西壁断面

図版24 調査区全景・西壁



1 SA1E1断面（北から）



2 SA1E2断面（南から）



3 SA1E3・SK2断面（南から）



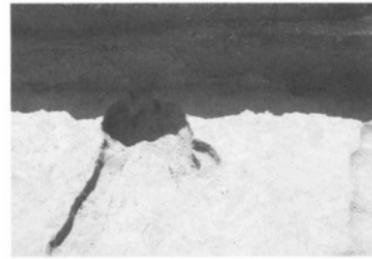
4 SK1断面（南から）



5 SA1E1・SD2（北から）



6 SA1E2・SK1・SD3（北から）



7 SA1E3・SK2・SD4（北から）



8 完掘全景（西から）

図版25 検出遺構・調査区全景

VII 富沢遺跡第137次発掘調査報告書

1. 調査要項

- 遺跡名 富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
 所在地 仙台市太白区泉崎一丁目3-4
 調査原因 個人住宅建築
 調査面積 99m²
 調査面積 19.5m²
 調査期間 平成18年5月8日
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課
 担当職員 主査 工藤哲司 文化財教諭 藤田 雄介 早川 渚一

2. 調査に至る経緯と調査方法

平成18年3月28日付で、笠松松壽氏より上記地内における個人住宅建築に伴う発掘届が提出された。これを受



番号	遺跡名	種別	立地	時代	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	山麓地、水田地	平野部、側生地、古墳～古墳	17	7ノ内山遺跡	集落跡、水田跡	自然切跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
2	芦ノ内遺跡	集落跡	丘陵	18	雲見遺跡	自然切跡	古墳、古代	
3	1丁目付近の古墳群	古墳	古墳	19	7ノ内遺跡	集落跡	自然切跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
4	三神塚遺跡	古墳跡	丘陵	20	9ノ内遺跡	集落跡	自然切跡	縄文、古墳、古代
5	上原地区付近の遺跡	石器遺跡	丘陵斜面	21	六反田遺跡	集落跡	自然切跡	縄文、弥生、古墳、古代、近世
6	土手子塚跡	古墳	丘陵斜面	22	東前里遺跡	集落跡	自然切跡	縄文、古代
7	西行窓跡	古跡	丘陵地	23	大野田・小原跡	古墳群	自然切跡	古墳、古代、中世
8	風越跡	遺跡	丘陵地	24	神代性山遺跡	古跡	自然切跡	古墳
9	五重山跡	遺跡	丘陵地	25	佐古田遺跡	古跡	自然切跡	古墳、古代
10	宮沢上・下谷遺跡	遺跡	丘陵地	26	八幡跡	集落跡、水田地	自然切跡	神代、古墳、中世、近世
11	宮沢下・水田跡	遺跡	自然地帯	27	大野田・油谷	集落、集落跡	自然切跡	縄文、古墳、古代
12	柳内・内野跡	遺跡	丘陵地	28	下ノ道遺跡	集落跡、遺跡	自然切跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
13	廢油谷・内野跡	古跡	丘陵地	29	大野町駒留遺跡	古跡	自然切跡	縄文、古墳、古代
14	宮沢加賀跡	城郭跡	丘陵	30	西有馬跡	集落跡、集落	自然切跡	縄文、弥生、古墳
15	宗時遺跡	古跡	丘陵地	31	山形跡	古跡、水田跡、祭祀跡	自然切跡	縄文、弥生、古墳、古代
16	宗時追跡	古跡	丘陵地	32	北日向跡	古跡、集落跡、田畠	自然切跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
17	山田遺跡	古跡	丘陵地	33	久米跡	古跡	自然切跡	古墳、古代

第34図 遺跡の位置と周辺の遺跡

けて平成18年5月8日に本調査を実施した。建物予定地内に東西約3m、南北約6.5mの調査区を設定し、重機により約80~90cm掘り下げ、調査区を東西約1.5m、南北約5mの範囲にして、調査区西壁ならびに東壁の土層の観察を主とする調査を行った。今回の調査区は、古代の条里制に関係する坪境の畦畔が通っていることが推定されたので、東西方向の坪境に相当する畦畔跡を確認することを主目的とした。

安全面に配慮して現地表下から約1.5m掘り下げた8層中で調査を終了した。

測量は、平面図は1/50平板測量、断面図は1/20実測とした。

3. 遺跡の位置と環境

富沢遺跡は仙台市の南東部に位置し、仙台市太白区長町南・富沢・泉崎等に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地の西側にあり、北西部から西部にかけては丘陵に、他を自然堤防によって囲まれた後背湿地を中心としている。遺跡の範囲は東西2km・南北1kmにおよび、登録面積は約90haである。一帯はかつて水田が大きく広がっていたが、現在は区役所などの行政施設、大型商業施設のほか、大部分が住宅地になっている。盛土以前の旧地形は北西から南東方向に緩やかに下がっている。現在の標高は9~16mである。

これまで100次を超す発掘調査が行われており、弥生時代から近世・現代までの水田跡が重層して検出されている。また、弥生時代の水田跡のさらに下層から縄文時代や旧石器時代の遺構や遺物が発見されている地点もある。

今回の調査地点は、富沢遺跡のほぼ中心部にあたり、古代の条里制に関係する土地割の坪境畦畔の推定地点である。昭和60年に調査を実施した第19次調査区の西側約20m、平成14年に調査を実施した第125次調査区の西北西約20mの地点にあり、標高は約12.8mである。



第35図 調査地点の位置

4. 基本層序

区画整理事業の際に盛土が80~90cmあり、その下に旧表土の水田耕作土（I層）がある。調査区で確認した基本層は大別8層・細別9層である。

- I 層 オリーブ黒色粘土。層厚は5~16cm。土地区画整理前の現代の水田耕作土である。
- II 層 オリーブ黒色シルト質粘土。層厚は10~15cm。砂を多く含む。酸化鉄をまばらに含む。特に層下部に多い。近世以降の水田耕作土の可能性がある。13~14世紀の青磁片1点が出土している。
- III 層 灰色粘土。層厚は16~25cmである。砂を含む。炭化物粒を含む。平安時代以降の水田耕作土層と考えられる。
- IV 層 黒色粘土。層厚は3~16cmである。灰白色の火山灰のブロックおよびVa層のブロックを含む。層底面



第36図 条里型土地割の復元と調査地点

に凹凸がある。

V a層 黒褐色粘土。層厚は2~22cm。水田耕作土である。

V b層 黒色粘土。層厚は2~22cm。VI層起源の黑色土およびVII層起源の暗灰黄色土のブロックをまばらに含む。水田耕作土下部と考えられる。

VI 層 黒色粘土。自然堆積層で層厚は2~12cmである。

VII 層 暗灰黄色粘土。層厚は20~26cm。黑色土の薄層および同色の砂層（層厚3cm程度）を縞状に含む。

VIII 層 黒色粘土。層厚は7~20cm。植物遺体を含む。下部ほど暗灰黄色粘土を縞状に含む。

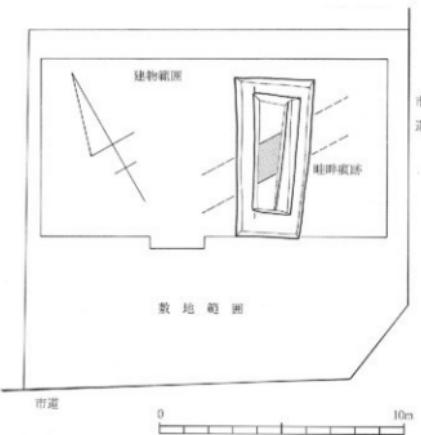
5. 発見遺構と出土遺物

断面観察の結果、現代の水田を含めて5層の水田層と畠跡を確認した。本調査区と第19次調査、第125次調査

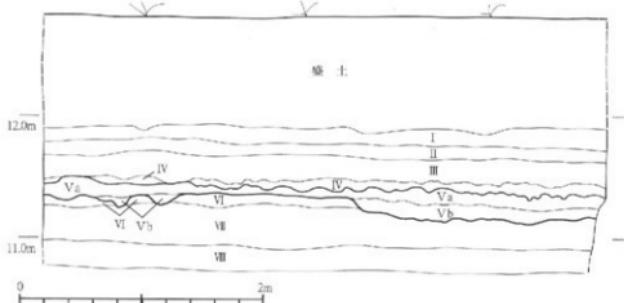
の基本層の対応は別表のように推定される。

1) 水田層

- ① 1層は層厚約5~16cmで、盛上以前の耕作土である。
- ② II層は層厚約10~15cmで、東壁北部から13~14世紀ごろのものと思われる青磁片1点が出土した。この時期以降であると考えられるが、これまでの調査成果との対応関係から、近世以降の水田の可能性がある。
- ③ III層は層厚約16~25cmで、下面に起伏が見られ、平安時代以降の水田であると考えられる。
- ④ IV層は層厚約3~16cmで、「灰白色火山灰」を含んだ地層であり、層底面は凹凸が激しく、南側ではV_a層を巻き上げている。IV層は宮沢跡第125次調査の6層に対応するものと推定され、「灰白色火山灰」が降下した10世紀初頭以降の水田跡であると考えられる。



第37図 調査区配置図と畦畔痕跡



基本層序(西壁)

	土色	性質	参考
Ⅰ	7.5Y3/1 オリーブ風色	粘土 水田耕作土。	
Ⅱ	10Y3/1 オリーブ風色	シルト質粘土 砂を多く含む。塵化鉄板をまばらに含む。特に下部に多い。水田耕作土(有機物汚土)。	
Ⅲ	10Y4/1 黄色	粘土 砂を含む。炭化鉄板を含む。	
IV	10Y3/1.3/1 黒色	粘土 灰白色の火山灰のブロックおよびV _a 層のブロックを含む。耕作面に凹凸あり。水田耕作土。	
V _a	2.5Y3/1 黑褐色	粘土 木柱骨等。	
V _b	2.5Y2/1 黑色	10世紀後葉の遺物土および畠塀瓦の焼成黃色土のブロックをまだらに含む。水田耕作土下部。	
VI	10Y3/1.3/1 黑色	自然土壤。	
VII	2.5Y5/2 緑灰黄色	黒色土の薄層土および河岸の砂利(層厚3m程度)を斑状に含む。	
VIII	2.5Y2/1 黑色	耕物直付多孔土。下部は2.5Y5/2緑灰黄色土を網状に含む。	

第38図 調査区西壁断面図

第137次調査	第125次調査	第19次調査	推定時期	備考・特徴
I層	1層	1 a～1 b層	墓土以前	
II層	2層	2 a～2 c層	近世以降？	137次調査：13～14世紀ごろと思われる青磁片出土。
III層	3層	3 a層		
	4層	3 b層	中世～近世	
	5層	4～5 a層		125次調査：灰白色火山灰のブロックを含む。
IV層	6層		平安時代中葉～中世	125次調査：灰白色火山灰のブロックを含む。
V a層		5 b層	10世紀初頭以前	
V b層				
VI層	7層	6層		
VII層	8層	7 a層		
—	9 a層	7 b層	弥生時代中期	19次調査：楔形團式赤土器出土。
—	9 b層	8 a層		
—	10層	9 a層		
		9 d～9 e層		

(※ は、水田耕作土壌と考えられるもの)

表 富沢遺跡第137次調査と周辺の調査の土層対応表

⑤ V層は上部(Va層)と下部(Vb層)に区分できる。Va層は層厚2～22cm、平均8～10cmで、僅かな起伏がある。Vb層はVI層を切る形で検出された。層厚2～15cmで、VI層及びVII層を母材としており、VI層起源の黒色土ならびにVII層起源の暗灰黄色土のブロックをまばらに含んでいる。V層の水田耕作上の下部と考えられる。V層水田跡に伴う畦畔痕跡(擬似畦畔B)が断面で観察された。畦畔の北側は、VI層が残存せず、VII層の上面を一部切っており耕作が深い。それに対して南側は部分的にVI層を切る形で検出され、耕作深度が南側より浅い。Va・Vb層は富沢遺跡第125次調査の6層(平安時代中頃～中世)に対応する可能性が考えられるが、本層には「灰白色火山灰」が含まれないことから、富沢遺跡第125次調査の6層よりも古く、10世紀初頭以前の水田層と考えられる。

⑥ 富沢遺跡第125次調査の9層に対応する水田跡は今回の調査では確認できなかった。

2) V層水田畦畔跡

西壁南寄りと東壁の中央部において、V a層直下でV層水田跡に伴う畦畔痕跡(擬似畦畔B)が断面で観察された。標高は11.2～11.3mで、畦畔の方向はほぼN-90°-Eで、東西方向に延びるものと考えられる。上端幅は約140cm、下端幅は約160cmを測り、断面形は扁平な台形状を呈する。作土底面との比高差は8～12cmである。畦畔の規模から推定すると、坪境の畦畔である可能性が高い。

6.まとめ

- ① 今回の調査は富沢遺跡の中央部、第19次調査の西約20m、第125次調査の西北西約20mの地点で実施した。
- ② 本調査地点は旧水田から約1.5mの深さまでの地層を大別8層、細別9層に分けることができた。
- ③ 断面観察からは、現代の水田耕作土層であるI層を除き、II層、III層、IV層、Va層・Vb層が水田耕作土層と考えられる。
- ④ 水田の年代は、II層は近世以降、III層は平安時代以降～中世、IV層は平安時代中期以降、Va層・Vb層は10世紀初頭以前に属するものと考えられる。出土遺物がわずかであるため、詳細な年代は不明である。
- ⑤ 調査前に推定されていた古代条里型地割に伴う坪境の畦畔跡がV層で検出された。幅は約160cmで、ほぼ東西方向に延びている。富沢遺跡第35次調査で復元された条里型土地割による坪境の畦畔(N S 0)が、本地区まで伸びていることが明らかになった。

＜参考・引用文献＞

- 渡辺誠（1986）：「富沢遺跡第19次調査」『仙台平野の遺跡群V』仙台市文化財調査報告書第87集 仙台市教育委員会
- 斎野裕彦ほか（1987）：「富沢・富沢遺跡第15次発掘調査報告書一」仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 半間亮輔（1991）：「富沢遺跡－第35次発掘調査報告書一」仙台市文化財調査報告書第150集 仙台市教育委員会
- 太田昭夫・斎野裕彦（1992）：「富沢遺跡－第30次発掘調査報告書第1分冊一」仙台市文化財調査報告書第150集 仙台市教育委員会
- 豊村幸弘（2003）：「富沢遺跡第125次調査」『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第206集 仙台市教育委員会



1 調査区遺構検出状況（北から）



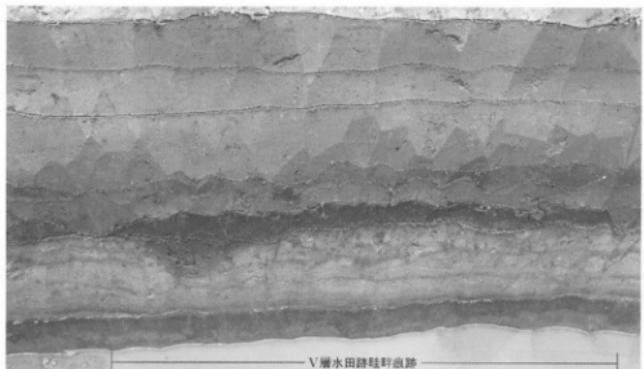
2 調査区西壁断面（北東から）



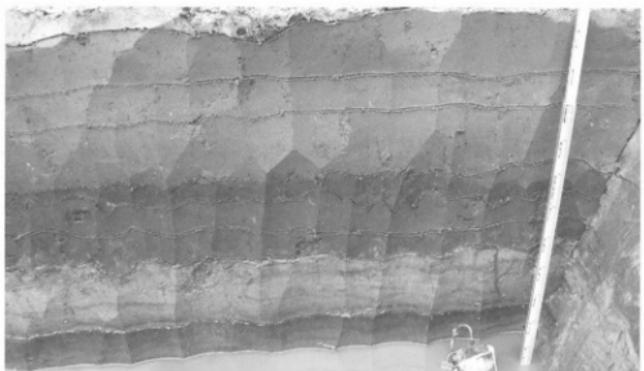
図版26 遺構検出状況・土層断面



1 調査区西壁断面
南部（東から）



2 調査区西壁断面
中央（東から）



3 調査区西壁断面
北部（東から）

図版27 西壁断面

VIII 富沢遺跡第139次発掘調査報告書

1 調査要項

遺 跡 名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調 査 地 点	仙台市太白区長町5丁目85-8
調 査 期 間	平成18年11月13日～11月29日
調査対象面積	222m ² （敷地面積 291m ² ）
調査面積	34m ² （盛土除去面積66m ² ）
調査原因	店舗付き共同住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 早川潤一・藤田雄介

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成18年9月12日付で、申請者佐々賀利氏・佐々久子氏から当該地における杭打ちを伴う共同住宅建築に関しての埋蔵文化財の取扱いの協議書が提出されたことに起因する。協議の結果、当該地周辺部の調査で、弥生時代から古墳時代・古代・中世・近世の水田跡や、中世以降の建物跡等が検出されていることから、事業者の負担において本調査を実施することで協議が成立した。協議に基づき、平成18年9月19日には文化財保護法第93条第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。平成18年10月26日に申請者と仙台市の間で発掘調査委託契約を締結し、11月13日から実動12日間の予定で調査を開始した。

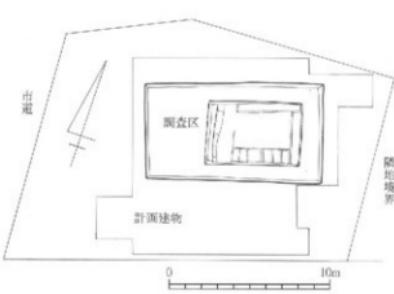
調査は、建築予定地に11m×6mの調査区を設定し、敷地が狭いために表土は場外に搬出した。盛土除去後、調査区を9m×4mに縮小して調査を行った。調査区の西部については土層観察とその記録の後、掘削土砂の置き場とした。調査区の東部は、周辺の調査成果から水田跡が存在すると考えられる層は平面的に調査し、それ以下の層は一部を掘下げて土層観察・記録を行った。

3 遺跡の位置と環境

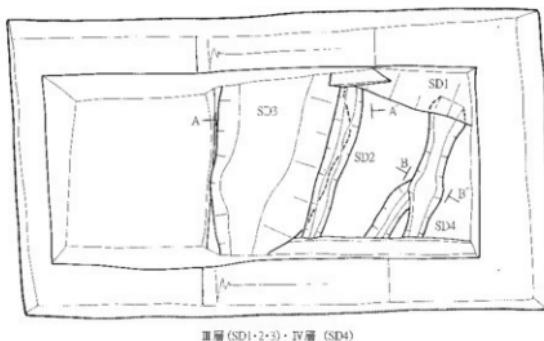
富沢遺跡の立地と環境は、VII 富沢遺跡第137次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、富沢遺跡の北東部にあたり、富沢遺跡の北側に形成された自然堤防の縁辺に近い後背湿地に位置する。



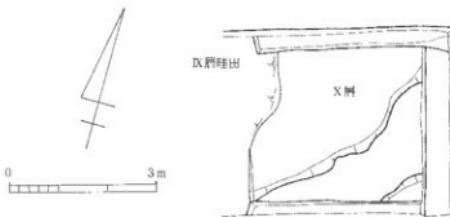
第39図 調査地点の位置



第40図 調査区配置図



III層(SD1)・2・3・IV層(SD4)



第41図 検出造構実測図

4 基本層序

- 盛 土** 残土による盛土層。調査区西部では層厚約30cm、東部では1.2mある。東部と西部の高低差がなくなるよう盛土したとみられる。
- I a 層** 5Y4/1 灰色の砂質シルト層。層厚約20cm。盛上前の水田の耕作上。
- I b 層** 10YR 4/3 にぶい黄褐色の砂質シルト層。層厚10~30cm。西から東に下がって傾斜する。盛土前の畑の耕作上。
- I c 層** 5Y4/1 暗褐色の砂質シルト層。層厚20~30cm。にぶい黄褐色土のブロックを多く含む。西から東に下がって傾斜する。畑の耕作土の下部層。
- II a 層** 10YR 4/6 暗褐色のシルト質砂層。暗赤褐色砂・褐色砂縞状および斑状に含む。層厚30cm前後。
- II b 層** 10YR 5/3 にぶい黄褐色のシルト質粘土層。粗砂をまばらに含む。層厚約20~25cm。溝状に堆積。
- II c 層** 10YR 5/3 にぶい黄褐色のシルト質粘土層。明黄褐色の砂を縞状に含む。層厚約30cm。溝状に堆積。
- II d 層** 10YR 5/4 にぶい黄褐色のシルト層。砂及び酸化鉄を縞状に含む。層厚約30cm。
- II e 層** 10YR 4/4 暗褐色の粘土質シルト層。黒褐色砂を多く含む。酸化鉄を多く含む。層厚10~15cm。
- II f 層** 10YR 5/3 にぶい黄褐色の粘土層。酸化鉄を粒状に含む。層厚15~20cm。
- III a 層** 10YR 3/3 暗褐色の粘土層。灰黄褐色粘土を霜降状に含む。層厚約10cm。調査区の南部に分布。

- III b層 10YR 4/2 灰褐色の粘土層。暗褐色土を少量含む。層厚10~30cm。耕作土。上面で遺構を検出。
- IV 層 10YR 5/3 にぶい黄褐色の粘土層。酸化鉄の薄層を縞状に含む。層厚20~40cm。自然堆積層と観察される。
- V 層 10YR 4/1 鍋灰色の粘土層。灰黄色粘土と黒色粘土を縞状に含む。層厚約10cm。ほぼ均一に堆積。自然堆積層と観察される。
- VI 層 10YR 4/1 鍋灰色の粘土層。均一にこなれた土壤で酸化鉄を含む。層厚約5cm。水田耕作上と観察される。
- VII 層 10YR 5/1 鍋灰色の粘土層。均一にこなれた土壤で層底面に凹凸がある。層厚は5cm前後。水田耕作上と観察される。
- VIII 層 7.5YR 5/1 灰色の粘土層。鍔灰色粘土と黒色粘土の薄い層を縞状に含む。層厚約5~10cm。自然堆積層と観察される。
- IX 層 10YR 4/1 鍋灰色の粘土層。均一にこなれた土壤で層の底面に凹凸がある。層厚約5~10cm。水田耕作上と観察される。
- X a層 10YR 5/3 にぶい黄褐色の粘土層。鍔灰色粘土を縞状に含む。酸化鉄を多く含む。層厚約10cm。自然堆積層と観察される。調査区南部に分布。
- X b層 10YR 4/2 灰褐色の粘土層。暗褐色土を縞状に含む。層厚15~25cm。自然堆積層と観察される。
- X I ~ X VI層 断面観察のみの調査で、平面的な調査は行っていないが、いずれも自然堆積層と観察された。各土層の特徴は第42図の観察表のとおりである。

5 発見遺構と出土遺物

1) II層出土遺物

II層堆積土中からは、18世紀代のものと考えられる肥前産の染付け碗の破片1点（第43図2）と、器種不明の土師質土器1点（第43図1）が出土している。土師質土器は、口縁部が内傾し、後円部の周囲に連続する三角形の透かしがあり、三角形の上下は交互に換わる。五徳のような用途が考えられる。この土師質土器に類似する器形の土器は、仙台城二の丸跡の幕末から明治初頭とされる地層から出土している（東北大學埋蔵文化財調査年報9:1988）。仙台城二の丸跡のものは、口縁部が内傾し、胸部に円形と逆三角形の透かしが交互にあけられている。

遺物の年代から、II層は近世から近代にかけての時期に、洪水のような急激な堆積作用によって形成されたものと推定される。

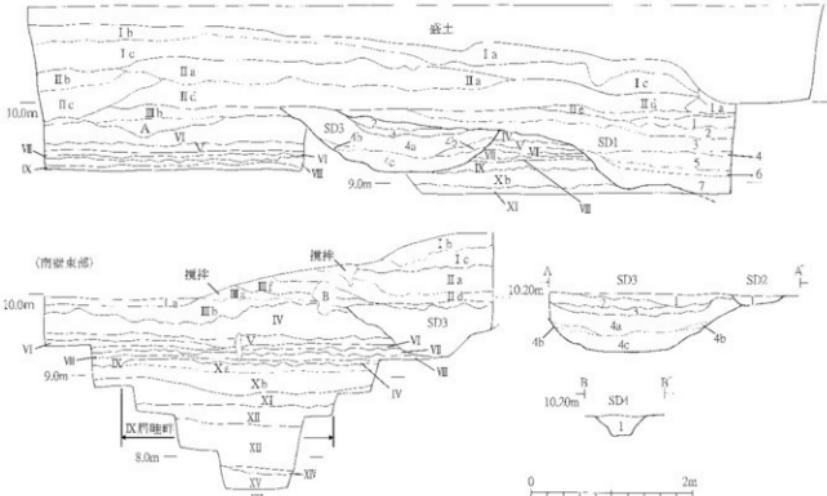
2) III層検出の遺構

SD 1・2・3溝跡は、IV層面を検出した際に、遺構の輪郭が検出された。壁面の土層観察の結果、SD 3溝跡がⅢ層上面まで立ち上ることが明らかになったので、Ⅲ層検出遺構とした。また、SD 1・2溝跡は、SD 3溝跡を切り、基本層II層に覆われていることから直層の遺構とした。

SD 1溝跡 調査区の北東角付近で、東西方向にのびる溝の南側岸部が検出された。SD 2・3・4溝跡を切っている。方向は南側壁面でN-88°-Wである。調査区内で底面は出ていない。検出部分の最大幅は100cm・深さは95cmである。断面形は逆V字形ないしV字上を呈すると推定される。調査部分で堆積土は7層に分けられた。SD 2・3溝跡と異なり、シマリが弱いことからII層より古いがSD 2・3溝跡よりは新しい遺構と考えられる。いずれも自然堆積の状況を呈している。出土遺物はない。

SD 2溝跡 調査区の中央で検出された。南北方向にのびる。SD 1溝跡に切られ、SD 3溝跡の東側岸を切っている。方向は南側壁面でN-2°-Wである。規模は、幅38~51cm・底面幅17~23cm・深さ12cmを測る。断面形は浅い舟底形を呈する。堆積土はⅢ b層に類似する灰褐色シルト質粘土層である。出土遺物はない。

(北壁)

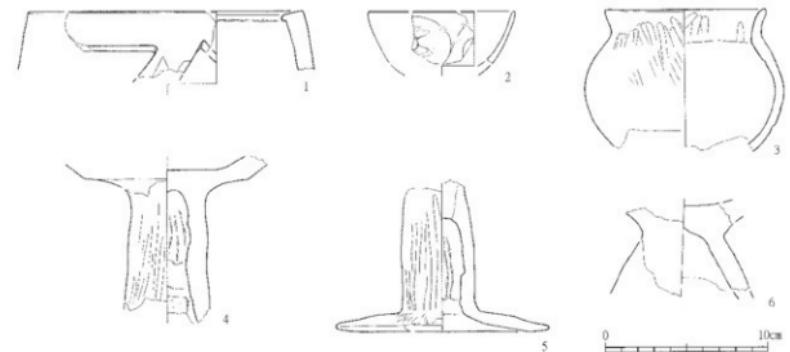


No.	土色	土性	層号
1-i	3-Y4c 黄褐色	砂質シルト 中に物質を多く含む。水田耕作上 砂質シルト	Ib
1-b	10YR 4/3 に少し黄褐色	砂質シルト 中に物質を多く含む。	IIa
1-c	10YR 4/4 深褐色	砂質シルト。に少し黒褐色のロカクを含む。透水性	IIb
2-a	10YR 4/6 浅褐色	シルト質粘土 透水性。透水性を有する細粒に多く、水田耕作	III
2-b	10YR 5/3 に少し黃褐色	シルト質粘土。E面で見られる。透水性を有する。自然堆積	IV
2-c	10YR 5/6 に少し黄褐色	シルト質粘土。透水性を多く含む。	V
2-d	10YR 6/2 に少し黄褐色	シルト質粘土。透水性を多く含む。	VI
2-e	10YR 6/6 に少し黄褐色	シルト質粘土 透水性。透水性を多く含む。	VII
2-f	10YR 6/2 に少し黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	XI
3-i	10YR 4/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	XII
3-j	10YR 4/4 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	XIII
3-k	10YR 4/6 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	XIV
3-l	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	XV
4-a	10YR 5/6 に少し黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	
4-b	10YR 5/3 に少し黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	
4-c	10YR 6/6 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	
4-d	10YR 6/2 に少し黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	

No.	土色	土性	層号
No.	土色	土性	層号
SD1-i	10YR 5/2 に少し黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅰa
SD1-b	10YR 4/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅱa
SD1-c	10YR 4/4 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅲa
A	10YR 6/7 に少し黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅳ
2'	10YR 5/2 に少し黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅴ
V	10YR 4/1 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅵ
VII	10YR 6/6 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅶ
VIII	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅷ
IX	7.5-YR 5/1 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅸ
X	10YR 5/3 に少し黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅹ
XI	10YR 4/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅺ
XII	10YR 5/6 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅻ
XIII	10YR 6/1 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅼ
XIV	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅽ
XV	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅾ
XVI	10YR 5/6 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	Ⅿ
XVII	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅰ
XVIII	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅱ
XIX	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅲ
XVII	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅳ
XVIII	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅴ
XIX	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅵ
XVII	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅶ
XVIII	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅷ
XIX	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅸ
XVII	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅹ
XVIII	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅻ
XIX	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅽ
XVII	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅿ
XVIII	10YR 5/3 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅾ
XIX	10YR 6/2 黄褐色	粘土 透水性を多く含む。	ⅿ

第42図 調査区・遺構断面図

S D 3 溝跡 調査区の中央で検出され、南北方向にのびる。S D 1 - 2 溝跡に切られている。方向は南側壁面で N - 5° - Wである。規模は、検出部分の最大幅270cm・底面幅60~132cm・深さ最深で72cmを測る。断面形は舟底形を呈する。調査部分で堆積土は大別4層・細別6に分けられた。いずれも自然堆積の状況を呈し、土質・土色は基本層Ⅲb層に類似している。4 a層下部ないし4 c層上面付近から上層器が多数出土した。出土土器には鉢1点(第43図3)、高杯脚部2点(4・5)、台付甕の底部から脚部の破片1点(6)がある。高杯の脚部は中空で、脚部中央に張りがあり、外側は丁寧にヘラミガキ調整されており、器形や調整の特徴から南小泉式期にあたるものと考えられる。他の器種も高杯と共存しても大きな矛盾はないと考えられる。したがって、この溝の年代については古墳時代中期頃と推定される。



番号	区分	基木層	上層	地質	分類	測定	基盤	基盤	基盤	特徴	参考・備考	参考範囲
1-1	Ⅱ層	—	—	—	切妻形	高さ?	底面:白・口部:輪	体積:3.5	(17.0)	△鉢の底面形状あり	—	36-1
2-3-1	Ⅱ層	—	—	—	切妻形	底面?	—	3.0	(9.0)	平付:平花文	花瓶	36-2
3-3-1	SD3	S33	4層	N.d.	ようこそ上層部	—	—	1.5	(9.9)	外腹:ペラミガリ 内腹:口縁へクミガリ 体部不明	—	36-1
4-3-2	SD3	S33	4層	—	ようこそ上層部	高坪	—	6.0	—	外腹:ペラミガリ 内腹:ペラミガリ	—	36-2
5-3-2	SD3	S33	4層	—	ようこそ上層部	高坪	—	9.2	—	13.0	外腹:ペラミガリ 内腹:ナギ、ヘラミガリ?	36-5
6-C-4	—	S33	7層	—	ようこそ上層部	ひれ壳	—	6.0	—	内外腹とも磨滅	—	36-4

第43図 出土遺物

3) III b 層: 耕作土層

基木層III b 層は、暗褐色土粒を少量含むが、良く攪拌された土壌で、層厚は10~30cmある。層の底面に大小の凹凸が観察される。耕作土となっていた可能性があるが、関連する構造は不明である。層厚が厚いことから、畑の耕作上の可能性が高い。出土遺物はないが、SD 3溝跡との関係から古墳時代中期またはそれ以前でもこれに近い時期と推定される。

4) IV層検出遺構

SD 4溝跡 調査区の東部で検出された。南北方向にのび、北部はSD 1溝跡に切られる。南側は逆Y字状に分かれている。方向は東側でN=7°±である。規模は、北部で幅50~75cm・底面幅20~50cm・深さ25cmを測る。断面形は逆台形を呈する。堆積土はIII b 層に類似するにぶい黄褐色粘土1層である。出土遺物はない。

5) VI層: 水田土壌

VI層は、褐灰色の粘土層で層厚は約5cmである。上下層が薄い縞状を呈するのに対し、良く攪拌された均質な上層である。V層を薄く削って畦畔の検出に努めたが、検出はできなかった。また、VI層を除去する際にも畦畔の痕跡は検出されなかった。遺物は出土していない。

6) VII層: 水田土壌

VII層は、褐灰色の粘土層で層厚は5cm前後である。攪拌された土壌であるが十分に均質にはなっておらず、層を母材とする土壌のブロックを含む。層の底面に細かな凹凸があることから水田土壌と観察される。畦畔の痕跡は検

出されなかった。遺物は出土していない。

今回の調査では、VI層とVII層を土壤の攪拌状況によって分割したが、同一水田耕作土の上・下である可能性もある。

7) IX層水田跡

IX層は、褐色灰色の粘土層で層厚は5~15cmである。良く攪拌された均質な土壤で、層の底面に細かな凹凸がある。IX層を薄く削る過程で、X層の盛り上がり（掘り残し）を畦畔痕跡（擬似畦畔B）として検出した。畦畔の壁面は著しい出入りがあるが、およその方向はN-38°~Eである。畦畔痕跡の規模は、上面幅100~120cm、某底部幅120~150cm、高さは1~5cmを測る。Xa層・Xb層はIX層水田の母材となっている。畦畔の規模から判断すると、大畠に相当すると考えられる。

6 まとめ

- ① 本地区は、近世から近代にかけて洪水のような現象により、厚く土砂が堆積したことが明らかになった。
- ② IIIb層の上面で溝跡3条、IV層で溝跡1条が検出され、II層検出のSD3溝跡からは古墳時代中期の土師器が出土した。
- ③ IIIb層は、古墳時代中期頃の畑の耕作上層の可能性が考えられる。
- ④ VI層・VII層・IX層は水田耕作土壤と推定され、IX層では畦畔の痕跡と考えられるX層の高まりが検出された。
- ⑤ 周辺の調査区との土層の対比は、本調査区が後背湿地から自然堤防へ移行する場所に当たっているために明確ではないが、南側に隣接する第15次調査の成果と比較すると次のとおりに推定される。

第15次調査

VIIa層	(古墳時代中期：南小泉式)
7c層	(弥生時代後期：大土山式)
9a層	(弥生時代中期後半：十三塚式)
11a層	(弥生時代中期中頃：樹形圓式)
13b層	(弥生時代中期中頃：樹形圓式以前)

第139次調査

IIIb層	(古墳時代中期：南小泉式頃)
	(対応層無し：IV層の一部？)
VI・VII層	
IX層	

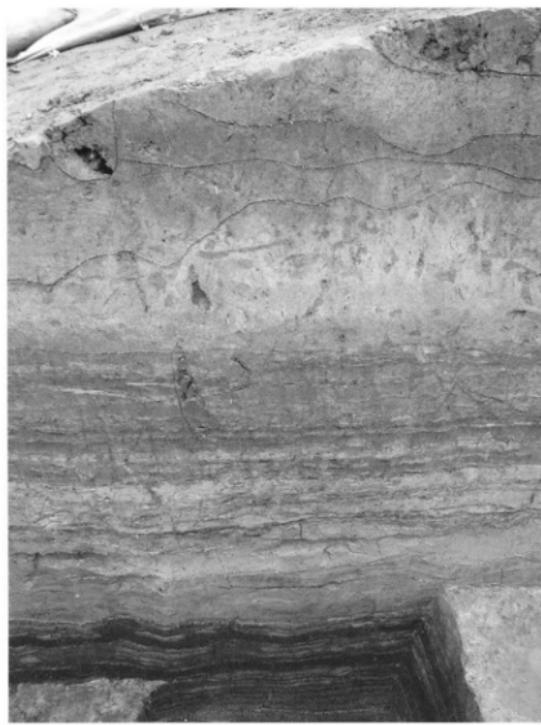
<参考文献>

仙台市教育委員会(1987)：「富沢」仙台市文化財調査報告書第98集

仙台市教育委員会(1989)：「富沢・泉崎浦・山口遺跡」仙台市文化財調査報告書第128集



1 調査区全景（西から）

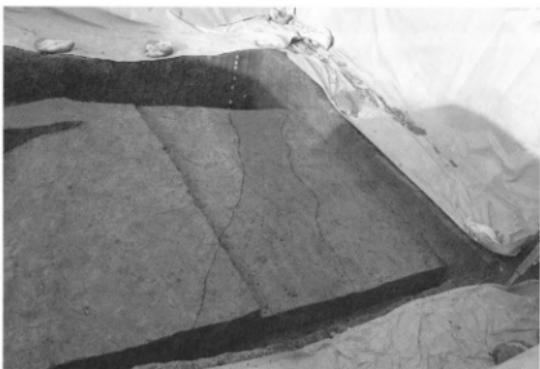


2 基本層序
：南壁中央（北から）

図版28 調査区と基本層序



1 IV層上面検出状況
(西から)



2 1号溝跡完掘と4号溝跡検出状況
(南西から)



3 2・3号溝跡完掘状況
(南西から)

図版29 4層上面と検出遺構



1 2・3号溝跡断面
(南から)

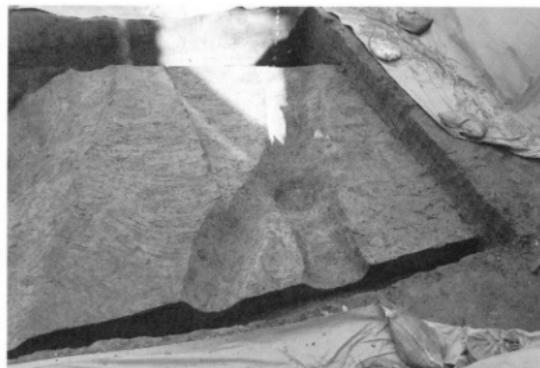


2 3号溝跡出土土師器(C-1)
(南から)



3 4号溝跡断面
(南から)

図版30 2・3・4溝跡断面と遺物出土状況



1 4号溝跡完掘状況
(南から)



2 IV層上面完掘状況
(南西から)



3 VI層上面検出状況
(南から)

図版31 IV層完掘状況とVI層の状況



1 VII層上面検出状況
(南から)



2 IX層上面検出状況
(南から)



3 IX層水田跡検出状況
(西から)

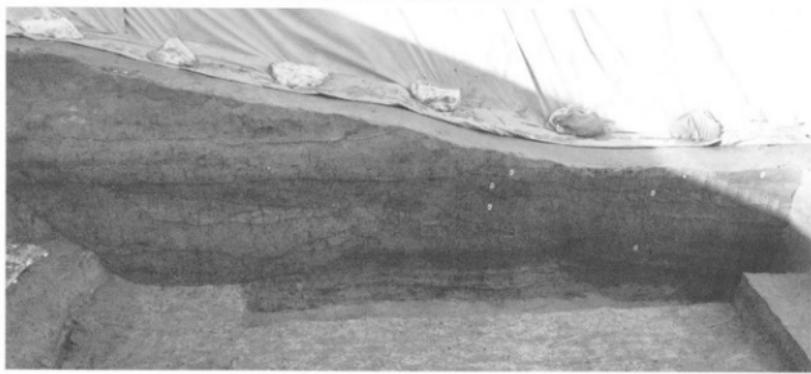
図版32 VII層上面とIX層水田跡の検出状況



1 IX層水田跡畦畔痕跡
(西から)



2 IX層水田跡畦畔痕跡
(南から)



3 調査区北縁東部（南から）

図版33 IX層水田跡畦畔痕跡と調査区断面



1 調査区北壁東部（南から）



2 調査区南壁断面（北西から）

図版34 調査区土層断面 1



1 調査区南壁東部土層断面（北から）



2 調査区南壁中央部土層断面（北から）

図版35 調査区土層断面2



1 瓦質土器 五施? I-1 II層 (第43図1)	2 磁器 瓶 J-1 II層 (第43図2)
3 土師器 袋 C-1 SD 3 4層 (第43図3)	4 土師器 台付甕 C-4 SD 3 4層 (第43図6)
5 土師器 高杯 C-3 SD 3 4層 (第43図4)	6 土師器 高杯 C-2 SD 3 4層 (第43図5)

図版36 富沢遺跡第139次調査出土遺物

IX 田母神屋敷跡発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	田母神屋敷跡（宮城県遺跡番号01231）
所在地	仙台市宮城野区蒲生字鍋沼41番、42番
調査原因	鉄筋コンクリート造平屋建て集会施設建築及び外構工事
調査対象面積	420m ²
調査面積	192m ²
調査期間	確認調査：平成18年5月29日 本調査：平成18年7月24日～平成18年7月27日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 早川潤一 藤田雄介

2. 調査に至る経緯と調査方法

平成18年2月18日付けで、仙台市建設局下水道部施設建設課より上記地内における集会施設建築工事に伴う協議書が提出された。これを受け平成18年5月29日に、施設予定地内に2ヶ所のトレーナーを設定して確認調査を行った。その結果、1区で溝跡と土坑、2区で溝跡と見られる遺構を確認したため、7月24日から本調査を実施することとなった。

本調査は確認調査の1区と2区の間に東西約15m×南北約20mの調査区を設定した。湧水が著しいため、調査区の周囲と壁際に排水溝を作り、排水を行いながら調査を行った。このため、調査区は確認調査の1区と一部重複した形で、全体的に建物予定地の東側を中心とする東西約12m×南北約16mとなった。重機により盛土及び耕作土層を除去し、現地表下約25cmのII層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。

測量は、平面図は1/50平板測量、個別遺構は1/20実測、断面図は1/20実測とした。

3. 遺跡の位置と環境

田母神屋敷跡は仙台市の北東部に位置し、仙台市宮城野区蒲生字岡田に所在する。JR仙台駅から東へ約9.2km、JR仙石線陸前高砂駅の南東約2.8kmに位置する。仙台平野の北部、七北田川下流低地部の右岸（南岸）に広がる自然堤防を中心に立地し、標高は2m前後である。遺跡の規模は最も広い部分で東西約300m、南北約250mあり、面積は約6.8haである。

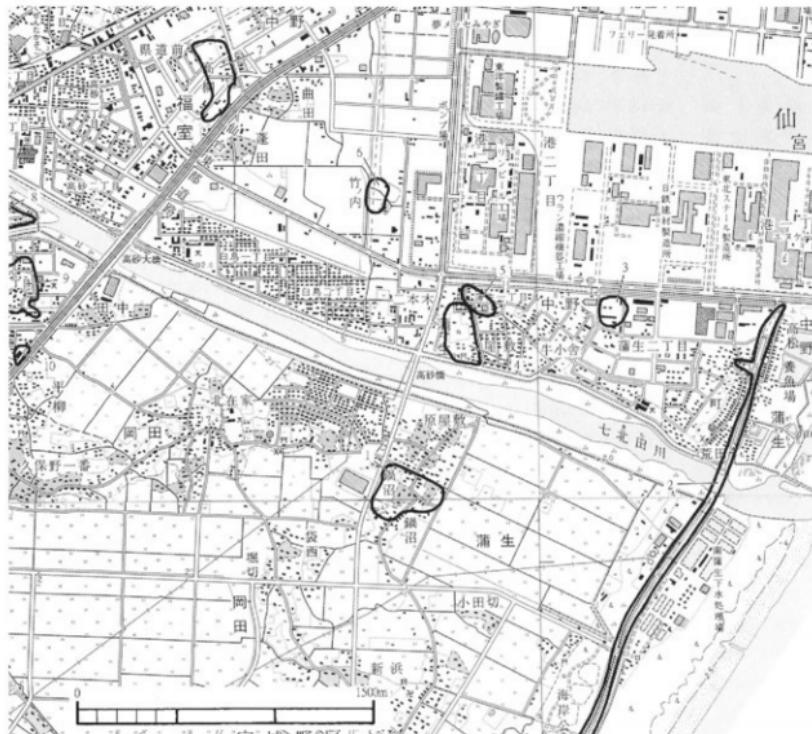
岡田地区は、近年宅地の造成も見られるようになってきているが、大部分の地域は米や野菜類を栽培する古くからの田園地帯が広がる。

紫桃正隆氏の『史料 仙台領内古城・館 第四卷』によれば、本遺跡は江戸初期に小太刀の師範として伊達家に仕え450石を拝領した田母神氏が居住したと言われる屋敷跡である。周囲を水濠と土塁に囲まれた南北約250m、東西約120mに及ぶ平城形式の屋敷で、田母神屋敷の中心は専能寺墓地の北側、かつて七北田川に架かっていた旧高砂橋へ向かう街道の西側にあったとされる。

周辺に位置する遺跡として、古代から中世にかけては、平安時代中期以降の水田跡・畠跡・屋敷跡からなる中野高柳遺跡のほか、牛小倉遺跡、竹ノ内遺跡、西原遺跡、福井町遺跡、鶴巻I遺跡、鶴巻II遺跡、小原遺跡などが点

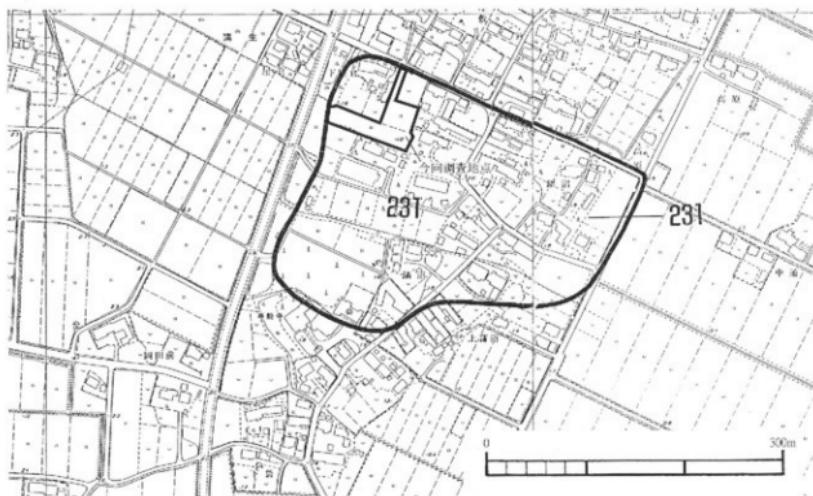
在している。また、近世以降の遺跡としては、藩政時代から明治初期にかけて開削され、塩竈市から岩沼市に至る全長30km余りの運河である貞山堀、伊達家の着座の格式を有した和田氏が蒲生在所として家中屋敷を構え、蒲生地区における新田開発の拠点だった和田織部屋敷跡などが分布している。

田母神屋敷跡ではこれまでに数度の確認調査が実施されており、当該地から東に約50m離れた地点では南東方向から北西方向に延びる溝跡1条が検出されている。

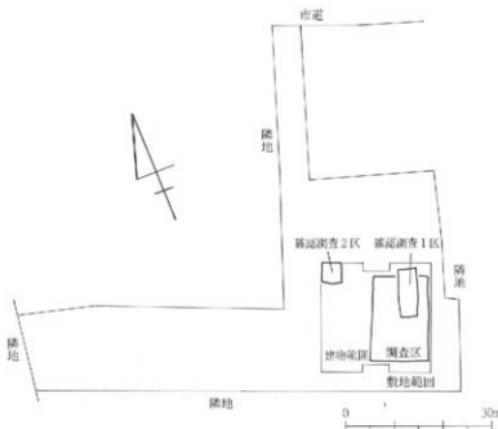


番号	遺跡名	性質	立地	特征	時代
1	田母神屋敷跡	自然堤防	田代	6 竹ノ内跡	築造・造石跡 平安・近世
2	貞山堀	砂防・堤防	鶴沼	7 中野内堀跡	築造・堤防跡 平安・近世・近世
3	西畠遺跡	自然堤防	空良・平安	8 岩山町造跡	自然堤防 平安
4	和田織部屋敷跡	自然堤防	高野	9 藤巻1造跡	自然堤防 平安
5	牛小谷遺跡	自然堤防	泉良・平安	10 小岸道跡	自然堤防 平安

第44図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第45図 調査地点の位置



第46図 調査区配置図

4. 基本層序

調査区の周囲と壁際に排水溝を作り、排水ポンプを使用して調査区内および周辺の排水を行いながら調査を実施したが、調査区全域からの湧水があり、調査区内の壁面全体の断面調査を行うことができず、やむを得ず部分的な断面調査となつた。西壁南部で確認した結果は以下の通りである。

- I層 黒褐色シルト質粘土。層厚は約25cm。砂を含む。
水田耕作土。
- II層 黄褐色砂。層厚は約5~10cm。上面の標高は0.8m。

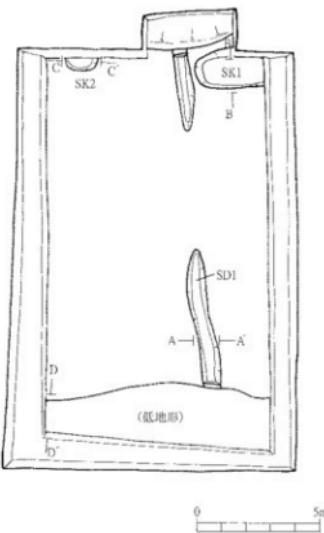
5. 発見遺構と出土遺物

1) 溝跡

S D 1 溝跡 【位置・重複】調査区中央やや東寄りで検出された。溝は調査区中央部付近で途切れており、南側は低地形の堆積土に切られている。【方向・幅】全体の方向はほぼ南北方向である。検出部分の溝の長さは北半部で約3m、南半部で約5.5m、幅は検出面で約50~90cm、底面で約10~30cmである。【深さ・断面形】検出面からの深さは約15~25cmである。断面形は舟底形を呈する。【堆積土・出土遺物】堆積土はオリーブ褐色砂のブロックと、植物遺体を含む黒褐色砂からなる1層である。出土遺物はない。

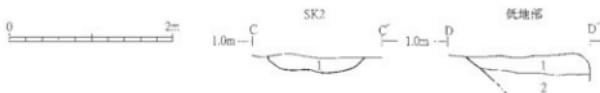
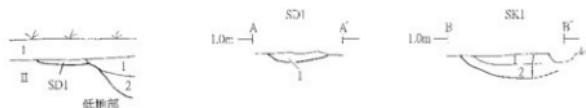
2) 土坑

S K 1 土坑 【位置・重複】調査区北東部で土坑の一部が検出された。東側は調査区外に延びる。【平面形・大きさ】平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、検出部分では東西3m、南北1.2mを測る。【深さ・断面形】深さは14~32cmで、断面形は逆台形である。【堆積土・出土遺物】堆積土は2層に分けられる。1層は黄褐色砂で、2層は黒褐色砂質粘土である。遺物は1層から磁器3点、陶器片1点、木製品片2点が出土した。このうち岡化できたのは、磁器(J-1)、陶器片(I-1)、木製品片(L-1~2)の計4点である。J-1はほぼ完形の状態で出土した。18世紀前半から中頃と考えられる肥前産の染付皿で、三重円線で囲まれた見込の中央部に印判五角花文があり、内側面には草花文が描かれている。外面の腰部、高台、高台内部に圓線が入っており、外面底部には土坡、雲、もしくは雁が描かれているように見えるが、何の文様なのかは不明である。このほかの磁器には、18世紀代の肥前産の染付碗と見られる小片(図版40-2)と、17~18世紀頃と見られる肥前産の青磁皿の小片(図版40-3)がある。I-1は美濃産の腰錐碗の一部で、口縁部に灰釉、体部に鉄釉がかけられている。時期は18世紀前半のものと考えられる。L-1は漆器椀で、内面に朱漆、外面に黒漆が塗られ、外面底部には二重輪に菱花蔓または丸に菱花蔓と見られる家紋らしき文様が施されている。L-2は柾目の板材で、溝曲が見られる。凸面の狭端側と中央部がくぼんでおり、輪の跡と思われる。このことから桶の側板の一部と見られる。



第47図 遺構配図

基本断面図(西壁南部)



基本層位(調査区西壁南部 断面図)

層位	土色	土質	備考
I	2.073/31 黒褐色	シルト質砂土	(砂)を含む。
II	2.357/30 黄褐色	砂	

SD1 溝跡

層位	土色	土質	備考
1層	2.357/30 黑褐色	砂	2.5Y4/3 オリーブ褐色沙をブロック状に含む。植物遺体を含む。

SK1 土坑

層位	土色	土質	備考
1層	2.5Y3/1 黑褐色	砂	植物遺体を含む。木質品・陶器片等。
2層	2.557/30 黄褐色	少質砂土	植物遺体を含む。

SK2 土坑

層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/1 黑褐色	砂	同様の粘土を斑状に含む。

低地部

層位	土色	土質	備考
1層	2.5Y3/1 黄褐色	砂	粘土層上及び灰白色砂層間に多く含む。
2層	2.5Y3/1 黑褐色	砂	植物遺体を多量に含む。

第48図 遺構断面図

S K 2 土坑 【位置・重複】調査区中央北西部で土坑の一部が検出された。北側は調査区外に延びる。【平面形・大きさ】平面形は橢円形と推定され、検出部分では東西約130cm、南北約50cmを測る。【深さ・断面形】深さは15~30cmで、断面形は逆台形である。【堆積土・出土遺物】堆積土は黒褐色の粘土を斑状に含む黒褐色の砂である。遺物は出土していない。

3) 低地形

【位置・重複】調査区の南端から確認調査の2区にかけて延びる地形の下がりが検出された。北側でSD1溝跡を切っている。【方向・幅】方向はほぼ東西方向であり、北側は調査区外に延びている。【深さ】掘り下げは行っていないが、建物予定地の南辺部分におけるボーリングの結果から深さは1m以上あると推定される。【堆積土・出土遺物】断面観察を行った西壁では、上部の堆積土が2層に分けられる。1層は黒褐色土及び黄褐色砂を斑状に多く含む黒色砂、2層は植物遺体を多く含む黒褐色砂である。旧河道の可能性が考えられる。

6.まとめ

- ① 今回の調査は遺跡の北西部で実施した。
- ② 今回の調査では溝跡1条、土坑2基、旧河道と思われる落ち込みを確認した。
- ③ SK1土坑は出土遺物から18世紀より新しい時期の遺構と考えられる。
- ④ SD1溝跡、SK2土坑については出土遺物ではなく、時期や性格など詳細は不明である。
- ⑤ 本調査区周辺では、近世ないしそれ以降に属する可能性のある遺構が存在することが明らかになったが、田母神屋敷跡と直接関係のある遺構かどうかは、今後の調査成果にかかる課題である。

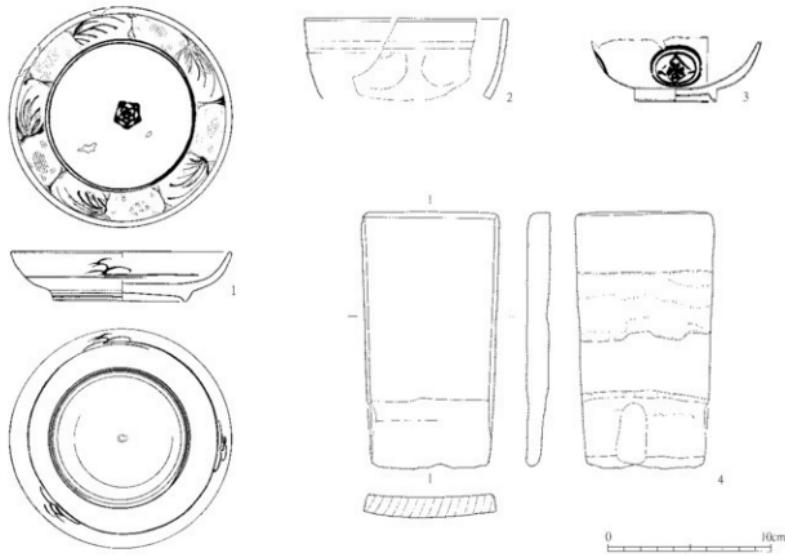
<参考・引用文献>

柴桃正隆(1974) :『史料 仙台領内古城・館』第四卷 宝文堂

宮城県教育委員会・宮城県企業局(1976) :宮城県文化財調査報告書第43集『貞山郷通河』

宮城県教育委員会・宮城県土木部(2006) :宮城県文化財調査報告書第204集『中野高柳遺跡IV』

- 宮城県仙台港背後地土地区画整理事業調査報告書IV



回数	型録 名前	上 土 地 方 佐賀県 舞鶴市 茅根町 有上町	分類	形態	法編			特徴・備考	写真図版
					笠置	山根・輪	体割		
1	J-1	SK-1	器	面開	皿	3.1	13.6	丸紋、外周に文様あり。内面：蓮花文。既述：印刷瓦舟文。肥原船。絵：蓋下～中幅	45-
2	J-1	SK-1	器	面開	輪	5.0	(12.0)	口縁：灰持 体部：淡地(織物) 美濃系：玉後半	40.4
3	J-1	SK-1	器	大翼足	輪	(4.0)	10.5	5.0 外底：藍色漆。三方に文様あり。内面：朱漆。	40.5
4	J-2	SK-1	器	木型足	織網底	5.9	8.5	1.5 大足り：駆目。	40.6

第49図 出土遺物



1 遺構検出状況（南から）

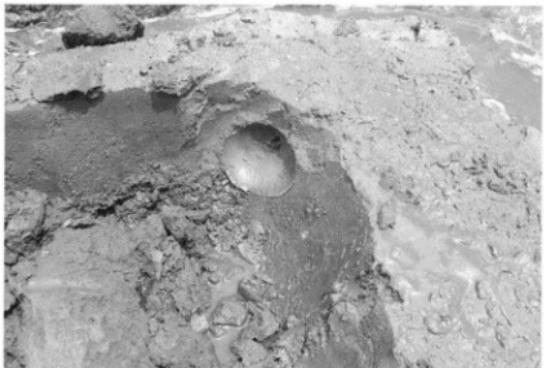


2 SD 1 溝跡断面（北から）



3 SD 1 溝跡完掘状況（南から）

図版37 遺構検出状況・遺構調査状況



1 SK 1 土坑遺物出土状況（南から）



2 SK 1 土坑断面（東から）

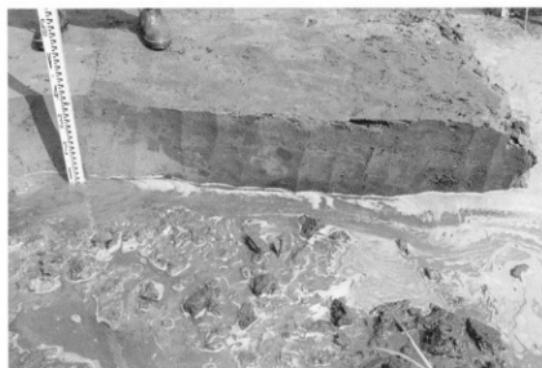


3 SK 1 土坑（南西から）

図版38 遺物出土状況・遺構調査状況



1 SK 2 土坑（南から）

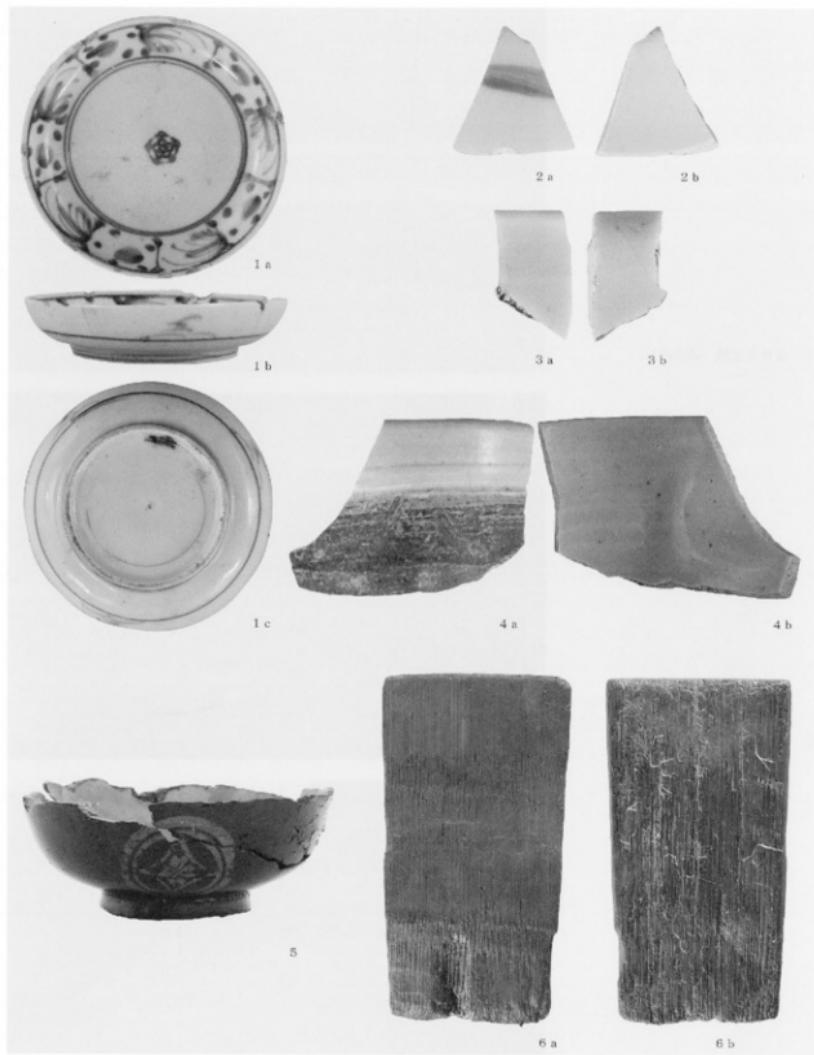


2 低地形堆積土断面（西から）



3 完掘全景（北から）

図版39 遺構調査状況・完掘全景



図版40 田母神屋敷跡出土遺物

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 磁器 染付皿 J - 1 SK 1 (第49図1) | 2 磁器 染付碗 ? SK 1 |
| 3 磁器 青磁皿 SK 1 | 4 陶器 腰鉗鉢 I - 1 SK 1 (第49図2) |
| 5 木製品 木製板 L - 1 SK 1 (第49図3) | 6 木製品 木製板 L - 2 SK 1 (第49図4) |

X 袋前遺跡第3次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名 袋前遺跡（宮城県遺跡番号01439）

調査地点 仙台市太白区大野田字竹松地内

調査期間 平成18年8月7日～8日

調査対象面積 195m²

調査面積 25m²

調査原因 鋼管杭打ちを伴う個人住宅建築

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

担当職員 主査 工藤哲司 文化財教諭 今野秀治



番号	遺跡名	種別	立地	時代と主な遺構
1	喜茂井跡	集落	自然地盤	古墳：墳丘式古墳、三代：縦立柱式古墳、墳頂
2	白山遺跡	集落、水田跡	自然地盤・河岸段丘	縄文：早原土塁、中期環濠土塁、春季後期水稻跡。古代：墳丘式古墳、中世：縦立柱式古墳跡、丹戸川
3	喜茂井遺跡	集落、水田跡	自然地盤	縄文：喜茂井水跡、縄文：早期落成式玄室、共生：経世水田跡、中世：砂利路、近世：堤防
4	喜茂井内堀跡	集落、水田跡	自然地盤	縄文：早期墳丘式古墳、深さし穴、施塗堆疊式壙塚（壙跡）。南北：後湖跡六道塚、土塁墓、塚壇、近世：縦立柱式古墳跡
5	喜茂井古墳	集落	自然地盤	縄文：中期墳丘式古墳跡、跡：後湖跡、三編：墳丘式古墳跡、六代：墳丘式古墳跡
6	喜茂井跡	集落	自然地盤	縄文：中期墳丘式古墳跡、跡：後湖跡、三編：墳丘式古墳跡、六代：墳丘式古墳跡
7	八坂川遺跡	集落、扇状地	自然地盤	縄文：印相、後湖跡穴庭風向。古墳：墳丘式古墳
8	大野田村古跡群	集落、水田、樹林	自然地盤	縄文：後附石合葬、古墳、砂～後湖跡穴庭風向。古墳：縦立柱式古墳、墳丘式古墳、相時、中世：ビット列
9	元気遺跡	集落	自然地盤	古墳：水口塚、古代：墳丘式古墳、縦立柱式古墳、中世：砂利
10	大野田遺跡	集落	自然堤防・河岸段丘	縄文：後期墳丘式古墳、施塗堆疊式壙塚、土塁、古墳：墳丘式古墳、古代：塚壇、中世：縦立柱式古墳、塚壇
11	王ノ道遺跡	集落、扇状地、泥炭	自然堤防・軟膏	縄文：後湖跡穴庭風向。泥炭：縦立柱式古墳、土塁、古代：塚壇、中世：泥炭跡（縦立柱式古墳、塚壇、火葬墓、土塗墓、丹戸川）
12	喜茂井遺跡	集落	自然地盤	縄文：後期墳丘式古墳、施塗堆疊式壙塚、土塁、古墳：墳丘式古墳、塚壇

第50図 調査区の位置と周辺の遺跡（1/5000）

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成18年6月28日付けで、高橋恒男氏・高橋英氏より、深さ5.5mの钢管杭打ちを伴う個人住宅建築に伴う免振届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成18年8月7日に実施した。建築予定地に南北4m・東西16mのトレンチを設定して調査を行なったところ、盛土と表土層が合わせて1.1mの深さがあったので、実質の調査区は南北2m・東西12.5mの範囲となつた。V層上面で遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3. 遺跡の位置と環境

袋前遺跡は、仙台市の南部の「郡山低地」と呼ばれる地域にあり、南を名取川・北西から南東を広瀬川・北東から南西を大年寺川に囲まれている。遺跡の近くは名取川の支流の一つである荒川が流れ、この河川が複雑な微地形を形成している。大野田周辺の自然堤防は古い時代に形成され、縄文時代以来多くの遺跡が密に存在している。調査区付近の標高は11m前後である。

縄文時代早期には下ノ内遺跡で竪穴住居跡・落とし穴、中期には六反田遺跡・下ノ内遺跡で竪穴住居跡、後期には六反田遺跡で竪穴住居跡、大野田遺跡で環状配石遺構、下ノ内前遺跡で配石墓が発見され、この辺りの自然堤防上では縄文時代早期以来、活発な人間活動が行われたことが窺われる。弥生時代には自然堤防上の下ノ内遺跡や下ノ内前遺跡では後期の竪穴遺構や上墳墓・壺棺が、後背隣地の富沢遺跡では中期から後期の水田跡が重層的に発見されている。古墳時代は、各遺跡に前期から後期の竪穴住居跡が散在しており、大野田古墳群では中期末から後期の前方後円墳や円墳があるほか、石棺墓・木棺墓なども発見されている。奈良・平安時代には、各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。また、袋前遺跡・大野田古墳群・六反田遺跡に跨って隅で囲まれた方形区画の中に大型の柱穴の建物群が存在することが明らかになってきた（平成16年度宮城県遺跡調査成果発表要旨・宮城県考古学会）。中世には王ノ塙遺跡に塹に囲まれた大規模な屋敷が形成され、多数の掘立柱建物跡のほか井戸跡・塚墓・火葬墓・土壙墓などがあり、近くには道路遺構も発見されている。

4. 基本層序

盛 土 山砂・碎石・残土による盛土層。層厚約110cm。

I a 層 10YR 5/2 灰黄褐色のシルト質粘土層。層厚約15cm。
水田耕作土層。

I b 層 10YR 6/2 灰黄褐色のシルト質粘土層。層厚約10cm。
酸化鉄を粒状に含む。水田耕作土層。

I c 層 10YR 6/4 にぶい黄褐色のシルト質粘土層。層厚約10cm。
酸化鉄を粒状に含む。水田耕作土層。

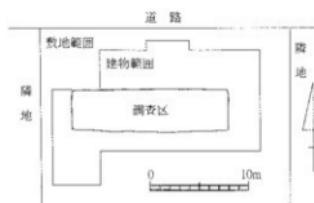
II 層 10YR 2/3 黒褐色のシルト質粘土層。層厚約5cm。周辺調査における中世の遺構面である可能性がある。

III 層 10YR 3/4 暗褐色のシルト質粘土層。層厚約5cm。酸化鉄を粒状に含む。

IV a 層 10YR 3/2 黒褐色のシルト質粘土層。層厚約15cm。マンガン鉢を含む。畑耕作土層。

IV b 層 10YR 3/3 暗褐色のシルト質粘土層。層厚約10cm。黄褐色土（V層起源）のブロックを多量に含む。

V 層 10YR 5/6 黄褐色のシルト質粘土層。地山。今回の遺構検出面。



第51図 調査区配置図

5. 発見遺構と出土遺物

V層上面で、溝跡（小溝状遺構）12条と性格不明遺構1基・ピット7基が検出された。

1) 小溝状遺構群

V層上面で検出された小溝状遺構群は、調査区壁面での断面観察から、そのほとんどがIV層からの落ち込みであることが確認できた。方向と切りあいから、南北方向のものを1群、東西方向のものを2群とした。1群が2群を切っている。

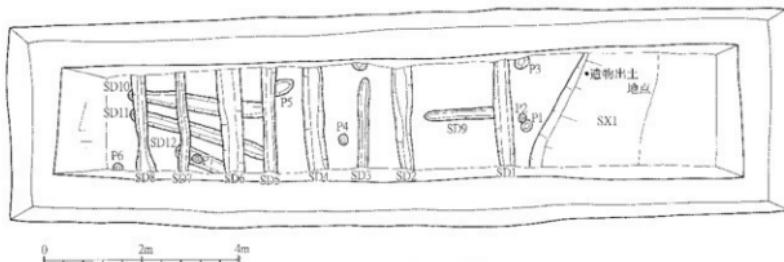
<小溝状遺構1群 8条 (SD1、SD2、SD3、SD4、SD5、SD6、SD7、SD8)>

調査区を南北方向に横切る形で、80~90cm間隔で検出された。検出面での幅は20~40cmであり、深さは5~15cmである。堆積上は2層に分けられ、基本層のIVa層とIVb層に対応する。

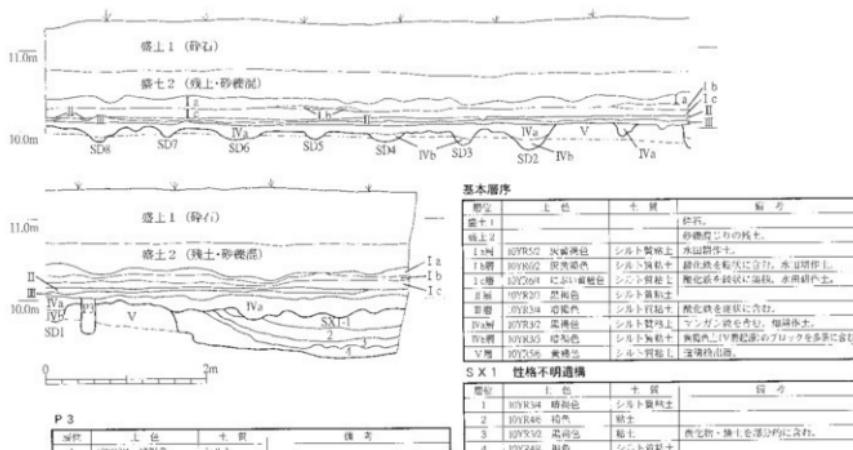
<小溝状遺構2群 4条 (SD9、SD10、SD11、SD12)>

調査区を東西方向に横切る形で、約50cm間隔で検出された。検出面での幅は約30cmであり、深さは約5cmである。堆積土は1層で、いずれも褐灰色粘土質シルトで酸化鉄を霜降状に含んでいる。1群に切られている。SD9とSD10～12とでは方向が多少異なるので、時間差がある可能性も考えられる。

1群および2群からの出土遺物はない。



第52図 調査区平面図



第53図 調査区北壁・遺構断面図

2) 性格不明造構

S X 1 造構 調査区東部の壁沿いで検出された。V層上面で検出されており、調査区北壁の観察では掘り込み面もV層上面と考えられる。東壁沿いで検出のため、正確な規模や平面形などは不明であるが、断面形が扁平な逆台形を呈する南北方向の溝状造構である可能性も考えられる。検出部分から東西の幅は約480cm以上の規模である。深さは30~40cmである。堆積土は4層に分けられ、3層は部分的に炭化物や焼土片を含み、造構底面から土師器裏の底部を含む土師器片が数点出土している。

出土した土師器（第54図）は、器形の特徴から塗釜式の甕と判断されるので、造構の時期については古墳時代前期と考えられる。

3) ピット

P 1 ~ 7まで検出した。検出面はいずれもV層上面であるが、P 7に関しては小溝状造構の底面で検出した。またP 3に関しては調査区北壁の観察から掘り込み面がIV層上面と考えられる。平面形は円形を基調とし、大きさは直径15~30cmで、検出面からの深さは15~20cmである。柱痕跡を検出できたものはない。遺物は出土していない。

6. まとめ

- ① 今回の調査地点では、V層上面で、IV層の落ち込みからなる小溝状造構12条と性格不明造構1基、ピット7基が検出された。
- ② 小溝状造構については畑の耕作に関わる造構と考えられていることから、IV層は耕作上層であると判断される。周辺部の調査におけるV層上面検出の小溝状造構群の年代について、当遺跡の南に隣接する大野田古墳群では古墳時代中期以降、奈良時代以前とされており、当遺跡の北西に隣接する六反田遺跡では奈良時代以降、平安時代前期以前とされている。

今回の調査ではIV層がSX 1 造構を覆っていることから、古墳時代前期以降、平安時代前期以前としておきたい。
③ SX 1 造構について、詳細な性格など不明であるが、出土遺物から古墳時代前期の造構と考えられる。

<参考文献>

渡邊誠ほか（2000）：『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第243集

佐藤淳（2005）：『大野田古墳群 第8次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第290集

佐藤淳（2005）：『大野田古墳群 第9次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第291集

工藤哲司ほか（2005）：『V 大野田古墳群第10次発掘調査報告書』『VI 大野田古墳群第11次発掘調査報告書』

『XV 袋前遺跡第2次発掘調査報告書』『前田館跡他』仙台市文化財調査報告書第301集



図中 番号	登録 番号	山 上 地 点	分 類	法 量	特 徴	種 名	写真場所
1-C-1	馬本號 SN	道筋 底面	吉澤二 打削	11件-1 件空手打 (5.7)	底盤・魚 身(鰯・赤 魚)	吉澤・赤量 素材・側扁 未收・底浅 切削	-

第54図 出出土師器



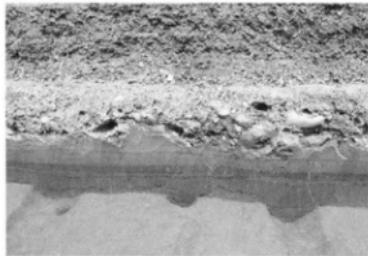
1 完掘全景（東から）



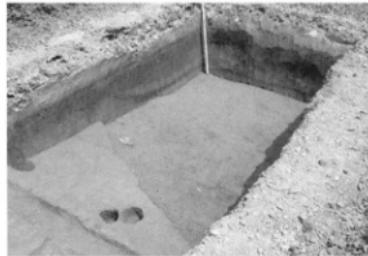
2 遺構検出状況（西から）



3 調査区北壁西端部（SD 7・8断面）



4 調査区北壁中央部（SD 2・3・4断面）



5 S X 1 遺構完掘全景（南西から）

図版41 調査区・検出遺構

XII 養種園遺跡第6次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	養種園遺跡（宮城県遺跡番号01349）	
調査地点	仙台市若林区南小泉1丁目14-37	
調査期間	平成18年10月25日	
調査対象面積	71.21m ²	
調査面積	30m ²	
調査原因	個人住宅建築	
調査主体	仙台市教育委員会	
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係	
担当職員	主査 工藤哲司	主任 長島栄一 文化財教諭 今野秀治

2. 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成18年9月6日付で松井順也氏より、深さ4mの柱状土壌改良を伴う個人住宅建築に伴う発掘届けが提出されたので、確認調査を実施しその上で、必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成18年10月25日に着手し、建物建築予定部分に東西10m×南北3mのトレンチを設定して調査を行った。重機により盛土および1層を掘り下げたところ、溝跡の堆積土と思われる土層が検出されたため、引き続き本調査を実施した。調査区西端部で溝の立ち上がりが検出され、調査区のほぼ全体が南北方向の溝跡の中に位置していることが確認された。



第55図 遺跡の位置と周辺の遺跡

3. 遺跡の位置と環境

養種園遺跡はJR仙台駅の南東約2.5km付近に所在する。宮城野海岸平野と呼ばれる沖積平野の自然堤防から後背湿地にかけて立地しており、標高12~14mほどである。東側には縄文時代以降、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世の各時代に遺跡の形成された南小泉遺跡が広がっており、南小泉遺跡のほぼ中央には全

長110mを計る前期の前方後円墳である遠見塚古墳が存在する。北側には終末期の円墳である法領塚古墳が存在し、遺跡内には、共に後期の円墳と思われる猫塚古墳、蛇塚古墳が点在している。また南方500mには伊達政宗の晩年の居城である若林城跡があり、当遺跡周辺にも若林城下の町割りと考えられる区割りが残存している。

これまでの養種園遺跡の調査では、繩文時代・弥生時代の遺物が出土し、繩文時代には前期の遺物包含層が確認されている。古墳時代から奈良・平安時代にかけては集落が発見されており、この時代には南小泉遺跡と一連の遺跡が形成されていたと考えられる。中世の遺構としては屋敷跡や道路跡・墓跡群などが検出されており、屋敷跡に関しては庇をもつ大型の建物を中心に数棟の付属建物と区画の堀で構成されるなどして有力者層のものと考えられる。

その後この地域は、近世になると伊達家二代藩主忠宗により御仮屋（別荘）が、四代藩主綱村により国分小泉屋敷と呼ばれる別荘が造営され、明治期になって養種園が開設される。近世以降は、伊達家との深い関わりを持たれ、別荘跡と関係する堀跡や池跡などの遺構も発見されている。



第56図 調査地点の位置

4. 基本層序

調査区内で確認した基本層は、盛土層下のⅠ層とⅡ層である。

盛 土：砂疊。層厚約80cm。

I 層：10YR 4/2 灰黄褐色シルト層。層厚20~25cm。炭片を多く含む。

II 層：10YR 5/6 黄褐色粘土質シルト層。地山。下部には砂が多く含まれる。

5. 発見遺構と出土遺物

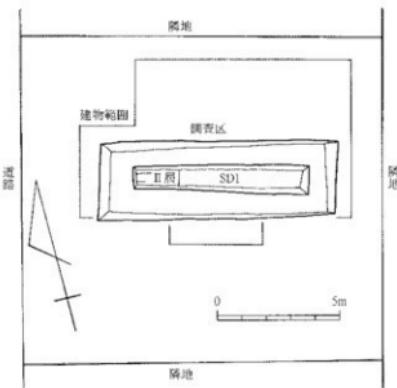
調査区全域にわたって南北方向の溝跡1条が検出された。

溝跡

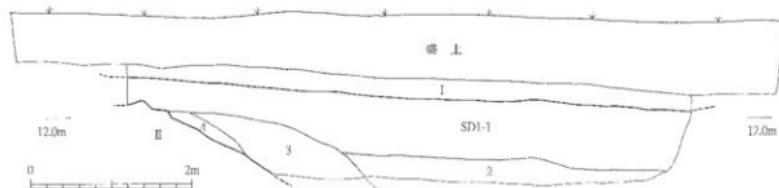
S D 1溝跡 調査区のほぼ全域がこの遺構に含まれていたものと思われる。正確な規模などは不明であるが、上端

幅7m以上・深さ1m以上の南北方向に延びる溝跡であると考えられる。なお深さに関しては、一部ボーリングにより堆積土上面からの深さが2mを超すことを確認している。調査部分の堆積土は4層に分かれ、I層は暗褐色の粘土質シルトであり、径1~5cmの礫をまばらに含んでいる。2層はにぶい黄褐色の粘土であり、こぶし大の礫を少量含んでいる。調査区の中央付近ではグライ化している。3層は暗褐色の粘土であり、大小の礫を多量に含んでいる。しまりは無く、人为的に埋め戻された可能性がある。4層は暗褐色のシルト質粘土であり、基本層II層起源の黄褐色粘土のブロックをまばらに含んでいる。出土遺物はない。

規模や方向性などから、都市計画道路「南小泉~茂庭線」敷設に伴う羨穂園遺跡第1次発掘調査のIV区・V区・VI区において検出されたSD1溝跡（近世の屋敷跡に伴う堀跡：深さ2.04~3.58m）[詳1]の延長である可能性が考えられる。また本調査区の東に隣接する蛇塚古墳と関連する周溝である可能性も考えられるが、過去の調査実例からは仙台平野における古墳の周溝の深さは1~1.5m程度である状況が確認されているので、古墳の周溝の可能性は低いものと思われる。



第57図 調査区と造構配図



基本層序

層位	土色	上質	備考
I	0BYR47 黄褐色	シルト	炭化木多く含む。
II	0BYR56 黄褐色	粘土質シルト	下部には砂が多く含まれる。

SD1

層位	土色	上質	備考
1	10YR4/3 解褐色	粘土質シルト	径1~5cmの礫をまばらに含む。
2	10YR4/5 にぶい黄褐色	粘土	こじれ大の礫を少く含む。 トレシ中央付近では2.5mの黄褐色に変化している。
3	10YR3/5 暗褐色	粘土	大小の礫を多量に含む。
4	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色地Iのブロックをまばらに含む。

第58図 調査区北壁断面図

6.まとめ

- ① 今回の調査によって検出された遺構は、南北方向に伸びる溝跡1条である。
- ② この溝跡については出土遺物もなく性格や時期などの詳細は不明であるが、羨穂園遺跡第1次調査（V区・VI区）で検出された近世の屋敷跡に伴う堀跡の延長部である可能性と、東に隣接する蛇塚古墳の周溝である可能性が考えられ、今後の周辺部における調査の際に検討していく必要がある。



第59図 養種園遺跡の屋敷堀跡推定ライン（1/2000）

〔註1〕 本調査区の北側で南方向に折れることが確認されているが、第5次調査地点にはかかっていないので、本調査区にその延長がかかっている可能性が考えられる。

＜参考・引用文献＞

- 佐藤 洋 (1997) 「養種園遺跡発掘調査報告書—伊達家別荘跡の調査—」仙台市文化財調査報告書第214集
- 豊村幸宏ほか (2003) 「養種園遺跡第3次発掘調査報告書」「国分寺東遺跡他」仙台市文化財調査報告書第236集
- 豊村幸宏ほか (2004) 「養種園遺跡第4次発掘調査報告書」「保春院前遺跡他」仙台市文化財調査報告書第274集
- 工藤哲司ほか (2005) 「養種園遺跡第5次発掘調査報告書」「山田本町遺跡他」仙台市文化財調査報告書第287集
- 仙台市教育委員会 (2001) 「若林城跡と養種園遺跡」仙台市文化財パンフレット第48集



1 調査区全景（東から）



2 調査区北壁土層断面（南西から）



3 SD 1 西端部（南東から）

図版42 調査区全景・SD 1

XII 杉土手第4次発掘調査報告書

1 調査要項

遺 跡 名	杉土手（宮城県遺跡番号01382）
調 査 地 点	仙台市太白区鹿野本町109
調 査 期 間	平成18年12月4日～12月7日
調査対象面積	150m ²
調 査 面 積	48m ²
調 査 原 因	駐車場造成
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査 工藤哲司 文化財教諭 早川潤一 畠田雄介

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成18年10月10日付で、栗山 健氏より、杉土手の削平を伴う駐車場造成の埋蔵文化財発掘の届出が提出された。計画は、土手上に長さ約80mに渡り、北側に沿う道路の高さに合せて、幅約6mの駐車場を造成するものである。80mのうち東側の約30m範囲が道路面より高く土手が残っていたので、この部分を調査の対象とした本調査を実施する必要がある旨を回答した。本調査は、栗山氏と仙台市が平成18年11月30日に契約を締結して実施した。造成予定地に3m×15mのトレチを設定して表土層を除去したところ、開発予定地の東側から12mの地点で、表土の除去面が道路面とほぼ同様の高さとなったので、調査区を縮小した。土手の残存部を検出した後、土手の構築状況を観察するための、比較的保存状況の良好な調査区東端部にトレチを設定して土手の基部まで掘り下げて形成土層の観察を行った。

3 遺跡の位置と環境

仙台市は、西部は奥羽山系から派生する丘陵と、丘陵を切って東流する北から七北田川・広瀬川・名取川・阿武隈川などが形成した段丘地形が広がり、東部は河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる冲積平野が複雑な微地形を形成している。奥羽山系から派生する丘陵の末端部は、七北田川の北が富谷丘陵、七北田川と広瀬川の間が七北田丘陵、広瀬川と名取川の間が青葉山丘陵、名取川と阿武隈川の間が高館丘陵と呼ばれている。各丘陵の裾部には段丘地形が発達している。

杉土手は、名取川が青葉山丘陵と高館丘陵の間から沖積平野に流出する名取市「余方」付近の丘陵側麓から青葉山丘陵の南側の裾を巡って丘陵東端の大年寺山まで所統的に続いている。調査地点は、JR長町駅の西方1.5kmの青葉山丘陵の南側斜面の上町段丘にあたり、標高は40m前後である。沖積面との比高差は25m前後である。

本調査地点の周辺には、古くから遺跡が形成されている。丘陵の前面の富沢遺跡では、現地表下約5mから旧石器時代の石器と森林跡が発見され、その上層では縄文時代早期の落とし穴や土器・石器が発見されている。さらにその上層には弥生時代から近世まで続く水田跡が重層して存在する。三神峯遺跡には縄文時代前期に大きな集落が形成されている。三神峯遺跡の上には古墳時代中期頃の古墳群があり、その南麓には富沢埴輪窯や金山窯跡等の古墳時代の窯がある。土手内遺跡には弥生時代の竪穴住居跡が存在し、周辺には古代の須恵器窯や横穴墓群もある。丘陵裾の段丘の端部上には一塚古墳・二塚古墳・砂押古墳・金洗沢古墳などの古墳が列を成して並んでおり、築かれている。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	杉手子	土手	丘陵斜面	古墳	8	二高古墳	古墳	石塚鶴	古墳
2	前山一丁目付近	台地	丘陵斜面	回石帶・説文	19	砂利地點遺跡	古代	丘陵鶴	古代
3	貴山一丁目遺跡	台地	丘陵斜面	古代	20	砂利帯	古墳	丘陵鶴	古墳
4	ノ沢遺跡	台地	丘陵斜面	説文	21	土手内遺跡	台地	丘陵	説文・共生・古墳・古代
5	八丈山山麓遺跡	台地	丘陵	説文・古代	22	土手内遺跡	台・橋・谷	三輪鉄面	古墳・古代
6	甲子丘遺跡	台地	丘陵	説文・古代	23	芦ノ瀬遺跡	台地	三輪	説文・共生・古代
7	南ノ沢遺跡	台地	丘陵	説文	24	三神寺遺跡	台地	三輪	説文・古代
8	夜ノ崎遺跡	台地	中世		25	金山寺遺跡	台	行持鉄面	云崩
9	大知寺山麓六軒	山麓	丘陵斜面	古墳	26	三郎山古墳	丘陵	行持	古墳
10	田舎寺山麓六軒	山麓	丘陵斜面	古墳	27	前川実驗室跡	古墳	丘陵	古墳
11	河原山遺跡	台地	丘陵	建文	28	東山古墳	古墳	丘陵鶴	古墳
12	東側古墳	古墳	自然斜面	古墳	29	東丸山古墳	古墳	丘陵鶴	古墳
13	小野塙古墳	古墳	自然斜面	古墳	30	金剛山六軒	古墳	自然侵蝕	古墳
14	ノツ松原六軒	山麓	丘陵斜面	古墳	31	宿川遺跡	集落・水田層	行持鉄面	日石副・説文・古墳
15	愛ノ浦原六軒	山麓	丘陵斜面	古墳	32	長良集落遺跡	石室・洞窟	自然侵蝕	共生・古代
16	鷹之塙遺跡	台地	丘陵斜面	古墳・古代	33	西竹内遺跡	集落	自然侵蝕	共生・古代
7	第一三筋	台地	丘陵	古墳	34	豊川遺跡	丘陵・集落	自然侵蝕	説文・共生・古代・中世

(a)が風食地盤)

第60図 遺跡の位置と周辺の遺跡

4 基本層序

- I a 層 10YR 3/4 暗褐色のシルト層。層厚約20~40cm。現表土。
- I b 層 7.5YR 3/2 黒褐色のシルト層。層厚約30cm。土手の北側斜面の崩落土。抜根による影響も受けている。
- I c 層 7.5YR 3/3 暗褐色の粘土質シルト層。層厚約30cm。土手の南側斜面の崩落土。
- I d 層 7.5YR 3/2 黒褐色の粘土質シルト層と10YR 6/8 明黄褐色の粘土質シルト層が交互に堆積。土手壁面の崩落土。
- II a 層 7.5YR 2/3 極暗褐色のシルト質粘土層。層厚15~20cm。北から南側に傾斜しているが、南側では平坦になる。旧表土層。
- II b 層 7.5YR 3/3 暗褐色の粘土層。層厚10~15cm。傾斜面に堆積。旧表土層からⅢ層への漸移層。
- III 層 7.5YR 4/4 褐色の粘土層。層厚約50cm。下部は明褐色粘土に移行する。縦まりが強い。地山。
- IV 層 7.5YR 5/8 明褐色の砂礫層。層厚30cm以上。縦まりが非常に強い。地山。



大日本市地図測量部明治38年測定
同40年復元行「二万分の一」地形図より作成

第61図 現存杉土手とその想定線

5 発見遺構と出土遺物

1) 平面調査の検出状況

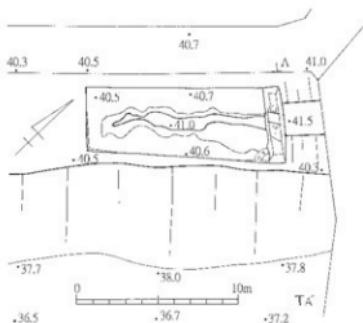
当該地区的杉上手は、調査対象地区の東側では道路面から約1mの高さで残るが、西に移行するにしたがって徐々に低くなり、上手残存部の東端から約30mの地点で路面との比高差がなくなる。また、道路面から盛り上がった土手の南側は、2.5m前後の落差の比較的急な傾斜面になり、土手の痕跡を残している。その南側は上手某部付近からは比較的緩い丘陵斜面となっている。

調査対象区の表土及び抜根による影響を受けた土砂を、工事の掘削計画面である現道路面の高さまで除去した状況が第65図である。土手残存部の東端から約14mの地点で、表土の方が路面レベルより低くなった。現道路面以下での表土層の除去は行わなかった。その結果、道路面と同一レベルで検出された土手の規模は、東部で幅230cm前後・高さ20~50cm、西部で幅150cm・高さ15~20cm程度である。検出された土手の積み土は、東部南辺の低い部分は後述する1期段階の上層で、それ以外の大部分は2期段階のものである。

杉土手については、仙台市太白区秋保湯元作勘温泉に伝わる「御山守・湯守佐藤勘三郎家文書」に、御山守をしていた阿家に対して、明暦2年に「ほけ」と呼ばれる長さ五尺の棒を、鹿除土手の起び返しの構築のために50荷提出せよという指示文書があるので、検出された土手の上面を精査したが、掘り方や杭の痕跡は確認できなかった。



第62図 調査地点の位置 (1/2500)



第63図 調査区配置図

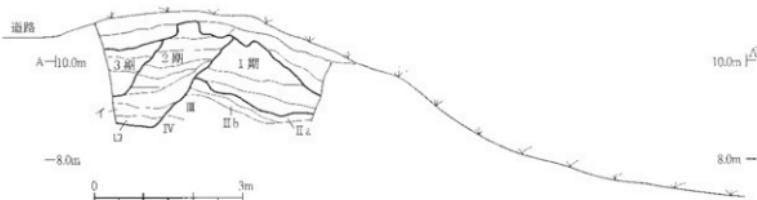
2) 断面調査の状況

平面調査後、調査区の東端に土手を横断するように深掘りのトレンチを設定し、土手を基盤削まで掘下げ、積上の観察を行なった。土眉観察の結果、土手の積土は大きく3時期に分けられることが明らかになった。古期から1期・2期・3期とした。2期は1期の、3期は2期の北側に寄せて盛り上げられている。

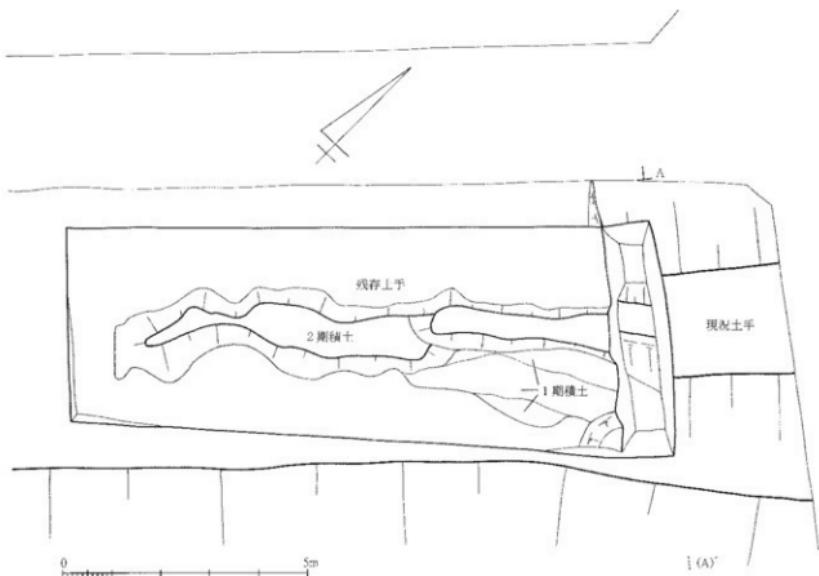
<1 期>

南側の基底部は調査区の外にのびているが、調査範囲で265cmである。高さはIIa層の山側上面からで約80cm、谷側の上面からで約160cmである。積土は3層に大別されるが、いずれも明褐色上ないし褐色土を基調とし、2期・3期の積土と比較すると明るい色調を呈する。各層は、細かく見るとさらに狭い間隔で積まれている。下部は傾斜面に沿って積まれているが、上層に移行するにしたがって水平になっている。積土はブロック状の土壌で、締まりは強くない。

土手の北側は、Ⅲ表土と観察されるⅡ層及び地山のⅢ層・Ⅳ層が土手の傾斜に合せて削られている。これについては、山側の旧表土及び地山を削って土手の積土にするとともに、相対的に土手の高さを上げるための作業の結果であると考えられる。このような山側の基底面の掘削については、杉土手第3次調査（太白区山田北前町）地点で



第64図 調査区杉土手断面図



第65図 造構検出状況

も、旧表土上面からの深さ約70cm・幅約90cmの溝状の落込みとして検出されている。堆積上のイ・ロは土手の積土崩落土及び山側からの流入土と考えられる。

<2期>

1期の北側に、100~120cmの幅で寄せるように積まれている。積土は7層に分けられ、各堆積土は北側に下がっている。暗褐色基調とする積土で、1期の積土とは明確に区別できる。現状では1期の上に積上げられたかどうかは不明である。なお、2~7層については、ブロック状の土壤であるが、1期の崩落土の可能性もある。

規模は、基底幅が4m以上、高さが3~3層底面から150cmである。

<3期>

2期の北側に、調査区内で最大120cmの幅で寄せるように積まれている。積土は3層に分けられるが、いずれも暗褐色・黒褐色を基調とする土壤である。各堆積土は水平になっている。1期・2期の上に積上げられたかどうかは不明である。この段階での規模は、基底幅が4.5m以上となる。高さは不明である。

平面調査及び断面観察の調査でも出土遺物はなかった。

6まとめ

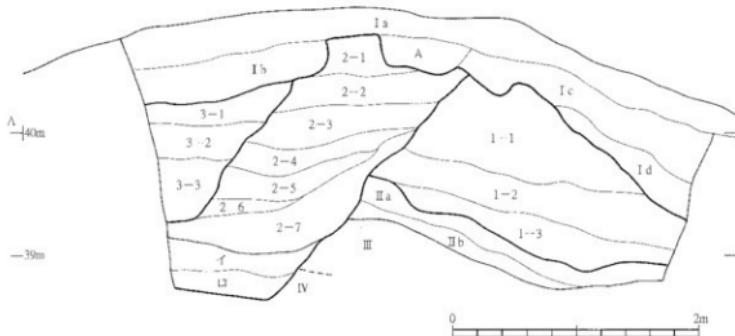
- ① 当該地区的上手は、土手の北側でも現道路面から約1.8mの深さまで造構が存在することが明らかになった。
- ② 杉上手は何地点かに分かれて残存しており、本地点の調査は今回が初めてであったが、本地点でも調査が進んでいる太白区山田北前町地区と同様に3時期の積土があることが明らかになった。
- ③ 3時期の各時期の年代については、今回の調査でも明らかにできなかった。今後の課題である。

④ 文献から、土手の上に柵が設置されたと推定されるが、今回の調査地点でも関係する遺構を検出できなかつた。

<参考文献>

仙台市教育委員会(1992) :『杉土手・北前遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第157集

仙台市教育委員会(1997) :『IV 杉土手(3次)・北前遺跡(5次)調査報告書』『高屋敷遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第223集



層No	土色	土質	備考
Ia	NOYR46 砂褐色	シルト	砂的に褐色土のブロックを含む。(底上部)
A	LSYR32 黒褐色	シルト	褐色土のブロックを多量に含む。(堆丸形)
Ib	7SYR32 黒褐色	シルト	褐色のブロック及び褐色土の多量に含む。
Ie	7SYR30 砂褐色	粘土質シルト	褐色土及び黑色土のブロックをまばらに含む。
Id	7SYR32 黑褐色 707568 明褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	泥炭が交互に複数に堆積。(土手断面)
I-1	7SYR36 明褐色	シルト質粘土	褐色土上のブロック及び粒径を10~20mm程度で結成に含む。
I-2	7SYR46 棕色	シルト質粘土	褐色内土をブロック及び块状にまばらに含む。
I-3	7SYR46 棕色	粘土	褐色土を焼成しない焼成土に含む。
2-1	7SYR46 棕色	シルト質粘土	褐色土を焼成しない焼成土に含む。
2-2	107R32 棕褐色	粘土質シルト	表面に黑色土及び明褐色土を複数に含む。
2-3	7SYR46 棕色	シルト質粘土	褐色土中のブロック及び块状を多量に含む。

層No	土色	土質	備考
2-4	7SYR31 墓褐色	粘土質シルト	黒褐色土を砂状に含む。
2-5	107R34 墓褐色	シルト質粘土	明褐色土をブロック及び輪状に含む。島田色土を多量に含む。
2-6	7SYR40 棕色	シルト質粘土	明褐色土を多く含む。
2-7	7SYR30 棕褐色	粘土	黒褐色土カラーブック及び明褐色土の人の形のブロックをまばらに含む。
3-1	7SYR34 黑褐色	シルト質粘土	褐色土及び同色の黒褐色土を多量に含む。
3-2	7SYR30 墓褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックをまばらに含む。
3-3	7SYR32 黑褐色	シルト質粘土	褐色土上のソックク及び褐色土粒をまばらに含む。
イ	7SYR34 墓褐色	粘土	灰褐色土を斑状に含む。
ロ	7SYR45 棕色	粘土	褐色土及び母土を多量に含む。
3a	7SYR29 墓褐色	シルト質粘土	(目赤ナガ?)
IIb	7SYR30 墓褐色	粘土	IIa層から墓層への過渡層。
III	7SYR44 黑褐色	粘土	マリウスい。下部は明褐色粘土に移行。(堆山)
IV	7SYR58 墓褐色	粘土	シマリは黒に強い。河床帯層? (堆山)

第66図 調査区東壁断面図



1 調査前の全景（北東から）



2 表土排除後の残存状況（北東から）



3 表土排除後の状況（西から）

図版43 調査前と調査状況1

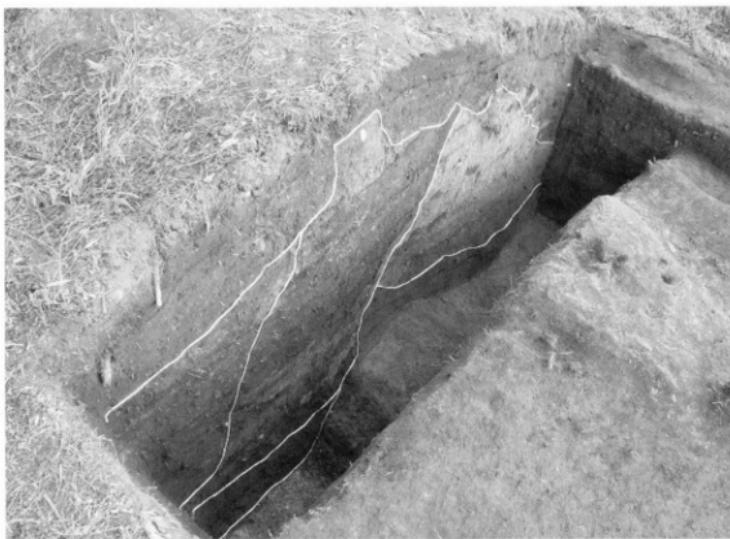


1 残存部積土の平面的検出状況（東から）



2 調査完了状況：奥が土層観察トレンチ（西から）

図版44 調査状況 2



3 土手土層断面（北西から）



2 1期の積み土断面：下部は旧表土と基盤層（南西から）

図版45 土層断面1



1 2期・3期の積み土断面：1期は旧表土と基盤層を掘削して構築（北西から）



2 2期・3期の積み下部と1期の基部の堆積層（西から）

図版46 土層断面2

報告書抄録

ふりがな 書名	まつもじょうあとほか							
副書名	松森城跡他							
巻次	発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第310集							
編著者名	工藤哲司 今野秀治 早川潤一 藤田雄介							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-6711 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1 電話 022-214-8894							
児行年月日	平成19年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつもじょうあと跡 (第1次)	仙台市泉区松森字内町 20-2、20の一部	04100	19020	38° 18' 46"	140° 55' 16"	2006・2・27 2006・3・10	94m ²	共同住宅 建築
まつもじょうあと跡 (第2次)	仙台市泉区松森字内町 19-1の一部	04100	19020	38° 18' 47"	140° 55' 15"	2006・3・1 2006・3・10	302m ²	共同住宅 建築
みなみこいづみ遺跡 (第48次)	仙台市若林区遠見塚 1丁目37-6	04100	01021	38° 13' 58"	140° 54' 54"	2006・3・22 2006・3・28	21m ²	個人住宅 建築
みなみこいづみ遺跡 (第49次)	仙台市若林区遠見塚 1丁目37-5	04100	01021	38° 13' 39"	140° 54' 54"	2006・4・12 2006・4・13	21m ²	個人住宅 建築
みなみこいづみ遺跡 (第50次)	仙台市若林区一本杉町 26-1	04100	01021	38° 14' 24"	140° 54' 40"	2006・6・19 2006・6・22	64m ²	診療所建 築
みなみこいづみ遺跡 (第51次)	仙台市若林区一本杉町 21-4	04100	01021	38° 14' 25"	140° 54' 35"	2006・9・19 2006・9・20	30m ²	個人住宅 建築
まつざわ遺跡 (第137次)	仙台市太白区泉崎 1丁目3-4	04100	01369	38° 13' 11"	140° 52' 26"	2006・5・8	19.5m ²	個人住宅 建築
たかさわ富沢遺跡 (第139次)	仙台市太白区長町 5丁目85-5	04100	01369	38° 13' 23"	140° 53' 7"	2006・11・13 2006・11・29	34m ²	店舗付共同 住宅建築
たかさわ宮城城跡 (第140次)	仙台市宮城野区 蒲生字猪沼41番、42番	04100	01226	38° 15' 3"	140° 59' 33"	2006・7・24 2006・7・27	144m ²	集会施設 建築
ふくろう袋前遺跡 (第3次)	仙台市太白区大野田 字竹松地内	04100	01439	38° 12' 48"	140° 52' 48"	2006・8・7 2006・8・8	25m ²	個人住宅 建築
まつやま種園遺跡 (第6次)	仙台市若林区南小泉 1丁目4-37	04100	01349	38° 14' 20"	140° 54' 22"	2006・10・25	30m ²	個人住宅 建築
まつやま土手手 (第4次)	仙台市太白区鹿野本町 109	04100	01382	38° 13' 41"	140° 52' 27"	2006・12・4 2006・12・7	48m ²	駐車場造 成

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松森城跡 第1次	城館跡	中世	掘立柱建物跡 溝跡・上坑・ピット	土器・磁器	
松森城跡 第2次	城館跡	中世	溝跡・井戸跡 土坑・ピット	土器・陶器 茶臼・古錢	
南小泉遺跡 第48次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡・上坑・ピット	土器	
南小泉遺跡 第49次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡・土坑	土器	
南小泉遺跡 第50次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡	土器	
南小泉遺跡 第51次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	柱列・小溝状遺構 上坑・ピット	土器	
富沢遺跡 第137次	水田跡・包含地	後期旧石器 ～中・近世	水田跡・畔跡	磁器	
富沢遺跡 第139次	水田跡・包含地	後期旧石器 ～中・近世	水田跡・畔跡・溝跡	磁器・土師質土器	
田母神屋敷跡	屋敷跡	近世	溝跡・土坑	磁器・陶器・漆器 木製品	
袋前遺跡 第3次	集落跡	縄文・古代	小溝状遺構・ピット 性格不明遺構	土器	
養種園遺跡 第6次	集落跡・屋敷跡	古墳～中・近世	溝跡		
杉土手 第4次	土手	近世	土手		

仙台市文化財調査報告書第310集

松森城跡他 発掘調査報告書

2007年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8894

印刷 株式会社建設プレス

仙台市青葉区折立二丁目2-10

TEL 022(0)201677

